
捕獲大作戦

鶴 庭子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

捕獲大作戦

【NZコード】

N0942S

【作者名】

鶴 庭子

【あらすじ】

『ある地方の とある会社の 恋話4』

男×男を愛でるB_L大好きな私（女子デス^{ボイズラブ}）。上司にウツカリ同人誌用の原稿を見られちゃってあら大変！ だってそれは上司をモデルにしちゃつてましたからね！ えっと、私、どうなっちゃいまスカ？？

B_Lとはいもののその成分はほぼ出ません。出たとして

もプラトニックです。基本ノーマル恋愛です。でももしB-Cというだけで拒否反応ある方は回れ右でお願いします。

まずは立ち位置の紹介テス（前書き）

ノリと勢いで書いたらウツカリ長くなりましたが短編じゃ収まらない（汗）暫くお付き合いください。

まずは立ち位置の紹介テス

上司と部下のイケナイ関係…… 萌えですなー！！！

私は乱雑に書類が積まれた机の隙間から、ずり下がる眼鏡を押し上げてこつそりと二人を眺めた。

力チヨー はかまだけい 褙田圭吾、三十一歳、バツイチ独身。課長（仮）
だつたけど、来月から正式に課長昇進となる。大人の魅力がムンムンで、前の奥さんが昔の男と逃げたって言うのがまず信じられないハイスペックな男性。

清水センパイ しみずひろゆき 清水博之、二十七歳、独身。次期係長に内定しております！ こちらも将来有望株のイケメンだー！ ひやつほつ！

私は誰にも見られないよう後を気にしつつ、メモ用紙の片隅に一人の談笑する姿を絵に書き記す。力チヨーが清水センパイとよく話すのは、引継ぎがあるからなのだ。

ああ、堪らんですよ！ この二人が……っ！ くうううー！

私は世間で言う所の『腐女子』である。B.Lボイズラブが大好物の二十二歳新入社員。ややつ、しかしこれは公表してはならぬことなど重々承知の上デス！

こういったものは、世間体悪いことこの上なし！ ひつそりと社会の片隅にて生息中なっています。

私はこの二人をモデルに書いた、めぐるめぐ愛の世界を同人漫画

へとしたため、同人誌即売会やサイトにて絶賛販売中。

はー、就職活動の最中、面接官としてこの力チヨーがいたのには衝撃を受けましたですよ。「これぞ理想のＳ彼氏！」ってね。

絶対この人は攻めだな。言葉でも体でも、技巧を尽くして相手を陥落させるのですよ！ もう帰りの電車ではもうつたパンフにモリ設定書いちゃったもんね！

はー、眼福であります。この会社はステキ男子ステキ女子、よりどりみどりでパラダイスー！ 創作意欲が湧くつてもんだよ有難う皆さん！

割と社内恋愛に関しておおらかな社風のせいか、何組か見受けられる。

係長内定の清水センパイと美穂センパイ、それから百合センパイとマメ橋……もとい高橋センパイもラブですね？ どうしてこの私が恋愛事情に聴いのか？ 伊達に長いこと創作活動してないっすよ、こと他人に関してはね！

ただ悲しいかな、只今彼氏いない歴イコール年齢という悲しい現実。というか、よくあるこのテンプレがリアルに使えてしまつのも如何なものでショーカ。

恋の一つも芽生える思春期黄金時代に、とある漫画に出会ってしまったのが運命のイタズラっていうかなんていうか。しかも不健全なBL。

西に即売会があれば小遣いとバイト代をつぎこみ、東にオフ会があれば予定最優先で参加。いやー、脳内は充実してたな、ビバ青春！

ま、そんな訳で。リアル男子の絡みはほぼイメージで描いているんですけどね。

最近、ちょっとばかり悩みがあるんデス。

ちつともリアルに感じられない！ とコメント貰いまして……ア

イタタタッ！

ばれてますよ世間の方々に！ 私がソレ知らんって事！！ そり
やーリアルを出さねば「抜き^{ハリ}」が空々しく感じるでしょう
からネ。

ああ、どうしたものか。

まずは立ち位置の紹介テス（後書き）

ちなみにB君がよく分からなまま書いてるんですけど、なにか「
そうじゃない！ もうとにかくもうもんだ！」という熱い思いがあり
ましたらメッセージでコツコツお願いします。w

力チョーにバレたの巻であつマス

「滝浪さん、あの会社に送る封筒はどこにあつたかな？」
たきなみ

「あ、ハイ。こちらにあります！」

終業間近、力チョーに言われ私は角型0号サイズの茶封筒を取り出した。明日取引企業に送る封筒に、私が資料を揃えて入れて置いたのだ。その最終チェックをする為、力チョーは私が渡した封筒の中身を取り出……

「なんだこれは？」

「え？ ひ、ひやあああああつ？！」

力チョーが出したもの。それは……私の趣味モリモリの漫画原稿！！ ややややばし！ 私が所属するサークル『B A R A たいむ』に送る為の封筒を、間違えて力チョーに渡しちゃった！！

一旦手にした原稿を封筒に戻した力チョーは。

「……滝浪さん？ 会議室まで来てくれるかな」

「……はい」

死刑宣告のような絶対零度の冷たい声に私は逆らえるはずもなく、トボトボと力チョーの後についていった。

会議室、といつても十人ほどが入れる小さな小部屋。カチヨーはパチパチと電気のスイッチを押し、私には椅子へ座れと促したけれど自身は行儀悪くも机に腰を預けた。

こんな状況なのに、あーその姿、様になるなーなんてジックリ観察しちゃったよ。

カチヨーはさつきの封筒から中身を取り出し、私の渾身の力作である原稿をパラパラと見だした。

ぐつ！ 何の羞恥プレイなのデスか！！

私は自分の描いた漫画にはそれなりに自信を持っている。同じ趣味を持つ相手だけにはね！ ノーマルで、異性で、上司に見られるなんて想定外！ しかしこのシチュ使えるな、と頭の片隅で思う私は芯まで腐ってるんじゃないかな、ほんとにさ…

「 この登場人物の名前に見覚えがあるのは気のせいいか？」

うぐつ、気付かれましたかつ！

読み終えたらしいカチヨーは、トントンと原稿を揃えて封筒に再び仕舞つた。そして、軽く腕を組んで私をじっくりと眺める。

「 も、まあ？ 気のせいじゃありませんか？」

「 褙田、清水……課長と係長……三十一のバツイチと一十七の…

…」

しらばっくれてみたものの、カチヨーがそらんじて読み上げるその設定に、私は恐怖で慄いた。

ひょええー！ こんなマニアックな世界で会社の人絶対読まないしと思って『そのまんま』の設定で気軽に描いちゃつたんだよー！ モロバレちゃん！

「あの……えーと……見なかつた事には……」

ギロツとひと睨み。

「ああそりですよねハイ。なりませんよね」

シユコンと肩を落とす。 終わったな、私。

上司達をモ『テル』に『テ』なB『レ』描いちゃ、そら……良くつて自己都合退職でしょーか？ 即売会とオフ会参加や製本代の資金の為の社会人、ここで終了？！

「私はいたつて健全な趣味を持ちこの分野に全く興味の欠片もない。このように私をそのまま投影したかのような作品は非常に気分が悪い」

「はい、そうですよね……」

分かります、分かりますって。だから『めんなさい』いつ。

「『れは世に出すものなのか？』

「えー、えつと……『れは何人か趣味を同じくする者が集まってサークルを作り、アンソロジーとして一冊の同人誌という自費出版物を作り上げ、んーと、こういった同人誌の即売会なんか

で手売りをしたりネット販売したり……ああでもこのジャンルは腐女子が好んで読むものであります……」

「ふじょし？」

「つまり……男性同士の恋愛が堪らなく好みであるという女子達です。ザックリ言えば『やおい』または『薔薇』でしょうか？私の所属するサークルはそんなに有名ではないし、そもそもB^{ボーイズラブ}の同人誌を買うという人もそんなにいるわけじゃないし、世に出回る部数も大した事がないからなんと言つか……」

最後はゴニョゴニョと口^ノる。そう、大した事がない。本当に売れてるわけではないのだ。いいんだよ好きでやってるんだからねつ！

力チヨーは一つ溜息を零し、私の原稿が入った封筒をコンコンとノックするように叩く。

「この件に関して。本当ならば重役会議のちに処分を決定するものだが……。しかし私としては自分が望んだわけではないにしてもモデルとなっていて、それをお偉いさん方に見せる勇気はない。よつてこの件に関し、私の胸に収めておく」

「え！　いいんですかっ？！」

やた！　まさかの不問？

「まだだ、最後まで聞け。それには三つの条件があるが、飲めるか？」

「三つ？　何ですかソレ」

「飲むと約束できるまで言わない」

「ひいっ！ それ、一択のフリして一択ですぜ！ 拒否権ないじゃ
ないテスか！」

「そそ、その条件つて、命までは取りませんよね？」

「はあ？ ビーヴしたらそんな突飛な発想が出てくるんだ。当たり
前だが命の危険はない。そして仕事もこのままだ」

条件の内容は気になるが、そんなマンガ的な無体はないだろ？
見た目上司だけど普段のカチヨーは紳士だし？ ってことで、深
く考えずにとりあえず了承した。

すると、カチヨーは「ここにサインと押印」と一枚の紙を差し出
した。なんて抜け目のない！ カチヨーの本質はこちらサイドでし
たか！ 流石私の見込んだSキャラですね！ 僕様キャラですね！
私の目に狂いはありませんでしたよ……はあ。

ちょつ、オッソロシー条件つ！

「待たせたな」

「あ、いえいえ。ネタ書いてたんで全く問題ありませんデスよ」

と、カチヨーが来たので私はネタ帳を置んだ。

「ふふーん、この喫茶店で少し痴話喧嘩的な雰囲気のカポー（注・カップル）に聞き耳立てて居りましたので！ いやー、いいネタ拾えました！ というわけで、待ち時間など全く気になりませんでしたのです」

カチヨーはそう言つ私のネタ帳を腐つたものでも見るかのようにした。あははそれ正解！ 大分腐つてますからねつ！ 異性カポーは私の脳内ではBLに変換デス！

時刻は午後七時。

私は定時上がりだつたけど、カチヨーは残業の為にこの時間。それでもかなり早い方らしいけどさ。

あのおっそろしー『三つの条件』の内容を聞く、その為にこの場へ待ち合わせたのだ。だつて会社じや私もカチヨーも色々まずいからね。

うう……どんな条件を提示されるのかな？！ はっ！ まさかカツプリングに問題が？！ 清水センパイじや萎えるとか、実はその相手は元彼で、本命はマメ橋センパイだとか？！ そっちのフラグ回収ですかカチヨー！ 奉仕キャラが好みですかカチヨー！

それはそれでアリですね！ とネタ帳に書き付けるため広げよう
としたら、ピンチと私のオーディオテコピングが当たった。

「痛つ！ 何するんデスか！」

「お前今話聞いてないだろ。いいか、その腐った脳みそでよく聞
け」

わーん、何気に失礼！

「まづ一回。その小学生のまま時代が止まつたような見た目全
て変えろ」

「え、えええつ？！」

「今時探す方が大変なガラス製の太枠黒縁眼鏡。前髪と後ろ髪す
べて同じ長さを真ん中で分けた、二つ縛りの昭和初期な髪型。化粧
がドヘタクソのその顔、彩りが一つもなく逆にかわいそうに思える
その残念な服装。どれもこれも最初から気に食わないんだ。変える」

ちょ、私をまるつと全否定？！ いやいや、じいて言えば私って

ナチュラリストなんんですけどねっ！

猛然と抗議をしたものの、カチヨーは「条件その一」と譲りはず。
くつそー、パワハラだあ！

「それから条件その二」

私の反論を何事もなかつたかの様に流したカチヨー様は、続けて
二つ目を切り出す。

「私の家に住み込み、家事全てやる」と

「ちよ……困われるー。ぐむむ……」

「バカッ！ 人聞き悪い事いうな！」

慌てて私の口を塞ぐカチヨー。ええー、だって住み込むだなんてそんなああ。

私の□に手を当てながら、一いかよくその腐った耳で聞け！」と脳内の妄想が暴走しがちな私を理解した（？）カチヨーは視線で私をギツチギチに縛りながらようやく手を離してくれた。

つていうか、カチヨーの手は大きくて固いんですね。いい手です。これをアレすれば萌えるな。それでもつて、こう……。

「腐った意識を現実へ戻せ！」

「いたたたたたたたたたた！」

力チヨー 酷いです！ 私の耳はそんなに伸びませんて！

「とにかくよく話を聞け！　まず期限は一ヶ月と定める。理由はお前知ってるだろ？　今独り身でありそして残業続きの為家事まで手が回らず、非常に困っている」

「ああ、奥さんに逃げられ……いたたたた！－は、はい。そうですねうですね！」

「そして一ヶ月後に……客が来るんだ。それなりの部屋にして迎える為、人手がいるから丁度言いかと思つてな」

「えー、家事代行サービス使えばいいじゃないですか」

「却下」

即答『テスかつ！』

「まあ丁度いいタイミングで、お前が条件を飲むと言つてくれたから任せよつと」

飲むつていうか、飲まれましたケドね！！

とっくに注文してあつた紅茶は飲み終えてある。ぬるくなつた水滴がびつちょりついたグラスを掴み水を一口飲んで、はあつとこれみよがしに溜息を吐いてみた。

ピクリと片眉を動かしたけど、特に何も言わなかつたよ力チョー。そこはなんか言ええ！

「じゃあ、なんで住み込みなんテスか？」

むーっと腰を突き出し座席の背もたれに思い切り体重を乗せた。態度悪い事この上なし『テス』。

「簡単。お前の家は通勤に時間かかるからだ。その時間すら惜しい。キリキリ働け」

「暴君め！」

なんてこいつたい！ どんだけ散らかしたんだ、カチヨー！

カチヨーサマのお宅訪問であります！

『私は研修の為、一ヶ月合宿をすることになりました』

って家族には伝えました。ええ、私は実家暮らしですからね。建前は必要なんです。

カチヨーのサインの入ったキチンとそれっぽく書いた書類に騙されんな、オール！

えー、ほんとカチヨーって私の見立て通りのSキャラで俺様でしたね……。こんなのが当たつても嬉しくないやい！ 妄想だから楽しいキャラクターなんだい！

旅行用（主にオフ会参加で趣味詰め込む為無駄にでかい）キヤスター付きのスーツケースをノロノロと引きずりながら辿り着いたのは、一戸建てでした……。

で、でか！

繁華街に程近く、それでいて閑静な住宅街。会社まで……そุดな、徒歩で二十分もかかるないかな。カチヨーの長いおみ足ならば、十分もあれば着いてしまうでしょーね。ちえつ。

会社休日の本日から一ヶ月、ワタクシこちらに住み込むことになりました……えーん。

何風だかよく分からぬけど、とにかくオサレな玄関の表札を見

れば間違いなく力チヨーですね。
『袴田』って書いてあるしね。間違いないですね……。

回れ右して帰りたいよマリー！

しかしここで帰つたら……あの私のステキ原稿が取り上げられてしまうのだ。そう、あの原稿はカチヨーに没収されてしまった。生活指導の先生かっ！

幸い締め切りにはうんと余裕を持っていたため、ギリギリ期限に間に合つだらう。つい筆が進んで早めに描き上げたのが功を奏したというか何というか……いやそもそもそれが原因でこうなった訳であります。

ゴ
ツ。

「いっただああああああああ」

「遅い」

「ちよつともねー、ドアをこきなり開けるだなんて酷こじやない
テスかー。」

「早く入れ、そして仕事しろ」

人の話を聞けつて、昨日おつしやつてませんでしたか？ カチヨー

いやいや、それにしても……。

休日のカチヨーはなんというか。『THE 色男』デスねつ！
眼福デスねつ！
これが妄想の中だけなら最高なんデスけ
どねえ……。

綺麗に整えられている髪と、パリッと着こなしたスーツ。輝いた靴。仕事中のカチヨーはどれをとっても一流の男性なのに、オフモードは大人の余裕をどこか感じさせる、それでいてすこし隙のあるような……。

ハツと気付いたら目の前に「デコピン」発射一秒前がいました！ 慌てて後に下がり、オデコガードしましたよ！ 危ない危ない。

「妄想に耽るのも結構だが、時と場所を選べ」

「は、はひつ！ 失礼致しました～」

カチヨーの先導でお邪魔しましたこのお宅は、まだ新しい匂いがした。広い玄関、上がり框の低さ、作りつけの飾り棚。どれをとってもオサレで私は、ほおおっと見惚れてしまった。

「カチヨー、いいおうちですね！ ここに独りで……あわわ」

「……とにかく荷物を置け」

うわー、うつかり地雷を踏みましたね、私！ 最初の沈黙がオソロシー！

つといいますか……あれ、あまり想像より散らかつてませんよ？ 想像では腐海の森でしたからね！

カチヨーに案内されるまま、一階へと上がり一つの部屋のドアを開けた。

「ここで一ヶ月寝起きしてもいい」

その部屋は八畳ほどの広さがある洋間で、ベランダに続く履き出

し窓と出窓がついた、とても田舎たりのよいステキなお部屋。客用と思われる布団一式と小さなテーブルが片隅に置かれていた。

あ、あれ？なんか待遇いいっすね？

わづ私のイメージでは階段下とか物置とか……暗い部屋で「コシンリと過ぐ」すのかと思つてましたよ！ なんつたつてメイドですからねー（脳内イメージアップ）

カチヨーは腕時計を見て「ああ」と声を洩らした。

「もうこんな時間か。今日の所は条件その一をクリアしてもうおつ。行くぞ」

「えええ、どうくつ」

「…………トリミング。」

「あ、疑問形デスか！ いや、私ペントじゅあつませんけどおお？」

「ゴハンは意外に庶民派テス！」

その前にまずは腹^{アヒ}しらえとこう事でお昼近くの時間、カチョーの運転する車で食事を取ることになりました。

「カチョーはいつもこの食べなことと思つてマシタ」

「そうか？　俺は好きだぞ。ほら、早く決めろ」

「イエッサー！　ではでは私め、じゅうのキムチ牛丼でー！」

「却下」

「出たな暴君！　即却下^{アヒ}テスよ！」

「何でですかっ！　私これが一番好きなん^{アヒ}テスよ？ー」

「これから人に会うのに何故臭つもの食べる？　少しは考えろ

阿呆

阿呆とな！　漢字読みで来ましたね？！　くつ、だから^{アヒ}テキる男つていかんのだ！

渋谷二番田に好きなネギ玉牛丼を選んだけれど、それもまた却下。トホー、なんて可愛そうなワタシ。三番田のチーズ牛丼ミニサイズでひとまず許可が下りてホッとした。

いやいや、しかしカチョーが牛丼ローン店が好きとはねえ。なんとなくハイカラでオサレな洋食のお店でランチなんか頼んじゃつて軽く一千円コース食べちゃって。なーんてそんなイメージ持つてマシタ。

……なにその牛丼大盛り味噌汁卵付きってー 食べ盛りのお子様デスか！

丼を食べるその姿。カウンターに座りながら横目でチラリとみると、とても男らしく見えますねっ。おすましした料理じゃなく、丼物を食べるイケメン…… いひいのはぎヤップ萌えとここのでじょうかあつ！

ああ、いいネタまた一つ拾えましたぞ！ そうだよ、いひいひた場面でキュンと落ちればいいんだ。大きな手で持つから丼が小さく見える、とか、味噌汁飲むとき上下する喉仏にムラつとするとか！ 忘れないうちにメモ、メモ！

慌ててバッグの中からマル秘手帳を出そうとした私の手を、いつの間にかぎゅうっと捕まえたカチョー。え、なに、その笑顔……怖いデスよ？ 真も笑つてくださ……！

「は・や・く・食・え」

「うわーああ、私のネタよサラバ！（覚えてる自信がない）

お腹一杯になつた所で車に乗ると、もれなく眠くなりますよね？ それは仕方がないつてもんです。気付いたら目的地に到着してしまシた。

「おー」

「ふえ？ 彼はまだモノを握つただけで……イダ――――ツ！」

『「コピン炸裂！』こつ、これ、地味に痛いんデスよつ！

「寝ぼけるのも大概にしる。着いたぞ、降りろ」

言われるがままシートベルトを外し降り立つそこは、なんともセレブ臭漂う店構えの美容室。私は見た事ないケド、カリスマ美容師というものがいそうだよ。一人見つけるとあと三十人はうじゅうじや出てくるに違ひない！

カチヨーは私の事などお構い無しにじく自然と店のドアを開ける。うをうつ！ まだ心の準備が！

すると、「お待ちしております。袴田様ご来店有難うございます そちらの方がご予約時に申された……？」

わ、その日！『どんな関係だよお前そしてビニの山奥からタイムスリップしてきたサルなんだ』とおっしゃつてますね？！
幾分怯んだものの、私はオサレ魔人に値踏みされる言われはないので黙つてカチヨーの隣に立つていた。

「ああ、店長よろしく頼む。見れる格好にしてくれ

「費まりました」

そしてカチヨーは私の首根っこ捕まえて店長へと引き渡した。

ちよ、トリミングで正解なんデスカ？！

毛先のヒアリー感ハンパねえデス！

「ほお」

私は完成のちにカチヨーへと引き渡されました。ええ、それはそれは死闘の末にね！

まず私のロングヘアを（頑張つて英語デス！）を、しょーとぼぶとかいうオサレな髪型にされちゃいまして！ 短く切るの、頑張つて抗議したんデスよ！

ちょ、縛れる方が楽なんデスよ！ 切らないでええ！

「条件その一」、そつ伺つております。

ぎょええ！

有無を言わせぬその営業スマイル！ 目、笑つてませんよー！ 何よ何よ何なのよー、仕事だからって忠実にこなさないでください！

仕事仕事つて、たまには僕の事も構つてよー。仕事と僕どっちが大事なんだよ？！ あ、このフレーズ使える！ ジゃなくてつ！

そう脳内で妄想していたらいつの間にかザックリと切られてましたね……グッバイ 私のヘア。

そして完成したその姿。私の蚤ほどの大心臓が飛び上がりマシたね！ 誰よコレ？！

「ふむ。大分マシになつたな」

「かつかつかつ……」

「水戸の御老公か？」

「かちよおおお……」

ナニコレなにこれ、田の前の私はステキ女子に仕上がつてマス！

（顔以外）

うわーお！ どうやつたらこんなサラサラ『風を弄びヘア』になるんデスかつ！ そうね、こんな髪型は受けのタイプが多いデスねつ！ 攻めはモチロン硬派がいいのだ！ 黒髪短髪う！

ベチツ！

「イッタ――――――イ――――――！」

「次行くぞ阿呆」

くつ！ 折角いい波が来てたのに！

またもやデコピンされて、どうやらまたどこかに連れて行かれる。私は売られた子牛風となつて荷馬車（車）に揺られていくんだ。グ

ツバイ 日常。

そして着いた先は

。

「が、眼科？」

「保険証持つてるだろ。出せ」

もういいですケドね。逆らつた所で敵いませんケドね。今更とやかく言いませんケドね。

「出せ」

「はーい……」

着いた先は何故か眼科。一体ワタクシめはここで何をされるのでしょーか。力チョーは眼科の受付を済ませ（そこは私がやってもよくなideスか？）簡素な長椅子に並んで座つた。

なんdeスか？ この保護者に連れられてきた子供みたいな扱いは！

確かに私は小さい。一五一センチのチビッ「だ。力チョーの身長はよく分からぬけど私の頭のテッペンが力チョーの大胸筋ちょうど位。私、成人してますからーっ！ しますからーっ！ むやみやたらに大声で自己主張したくなりましたネっ！

何人が先に順番を待つてるので、私の番はまだこなそうだ。ぼんやりと待合室にあるテレビを見ていて、「そういえば」とふと思いついた。

「力チョー、あの三つ田の条件つてなんdeスか？」

一つの条件はもう聞いた。あまりの傍若無人っぷりに慄きすぎて三つ田を聞きそびれていたのだ。そりゃー聞くのはあつかない！ けれど、心の準備つてーもんがあるでしょが！

「三つ田の、か」

な、なんデスかー！ その口の端でニヤリなオッソロシー笑みは
！ ややつ、これは自ら罠に入りマシたかっ！ 巻き戻し、巻き戻
しでーー！ ワタシ言わなかつた事になりませんか力チヨー！

「それは……そうだな、一ヶ月後に言ひ

まさかの放置プレーー！

流石ですね、流石のキャラですねつ！ 私を操るなど朝飯前デス
！ くつそー、うまい事躍らされちやいましたよつ！

一ヶ月後のメイド苦行が終わるその時に言われるのって、ナンダ
口？！

「滝浪さーん、お待たせしました」

私が頭の中で『俺様上司に放置される部下男子』という萌えを開
しようとしたそのタイミングで診察の呼び出しがかかつた。

またか！ またこいつタイミングでかつ……浸りたいよおお。
メモらせてええ。

火花が見えマスですっ！

診察室へ向かつたけれど、何故かカチヨーまで付いてきた。

「か、かちよお？」

「いいから」

いいからって、ナンデスカ？

とにかく二人で診察室に入ると、中には白い衣に身を包んだ美女が待ち構えていた……って、女医さんだけどねっ！

看護師さんに案内されるまま、診察机の横に備え付けられた椅子にちょこんと座る。そこには眼科によくある機材がある。名前なんか知りませんがね。

「あら、久し振りね？」

「ああ」

お知り合いデシタか！

田の前の女医さんはおおよそ三十台前半。知的美女で、おセレブですね間違いなく。シルバーフレームのオサレ眼鏡がとても絵になります。

「あなた……こんなチンチクリンと付き合つてるの？ それともペツト？」

い、い、い、イマドキそんなチンチクリンって言う人いるんだー

つ？！ そこに驚いちゃいまシたよ、食いついちゃいまシたよつ！

ああでも後半のペツト扱いはその通りと声をあげたい。なんせト

リミングされちゃいましたからねつ。

口をパクパクしてたら、カチョーが私の頭をポコソとグーで小突いた。

「俺の事はいいから仕事しろ」

カ、カチョーが『俺』つていいマシたよつ！ 俺？ 俺？！ 俺様カラガ言つとホントばつちり似合いますね俺様ー！

つて！ そうじやないよ私！ なにそのえと女医さんと何かカチョー、えええ？

「ほら、じつち向きなさい。そしてトロトロしてないで顎乗せなさい速やかに」

んな―――！ S女医デスか！ この方もデシタか！ くつそ、よつてたかつてええ。

私は前門の虎、後門の狼という状況の下何かできるはずもなく、黙つて眼鏡を外して名前がなんだかよく分からぬ医療機器に顎を乗せた。

いやいや、それにしてもこのシチュ使えますヨ？ 知的イケメン医師が、暗い密室で患者に言葉攻めデスよ。ゆづくりとシルバーフレームを外しながら患者の顎に手をかけ……。

「ゴスツ！」

「んぎゅっ！」

「顔に出てる、顔に」

力チョーの裏拳が私の頭のテッペニに落ちて来たでありますよつ
！ き、キビチー！

右目、左目調べ、何かを書き付けたＳ女医は「あら」と私の顔を見るなり声をあげた。そして不躾にもほどがあらうぞ！ という視線でじーろじーろと嘗め回した後、黙つて様子を見ていた力チョーをからかいだした。

「袴田君、そういう事なんだ？」

「……まあな」

挑戦的に見上げる女医の視線と、挑発的に見下ろす力チョーの視線がつ……視線がああつ！！

ひ、火花散つて見えマスよーー！ 誰か、誰かあああ！！ この竜虎の戦い、止めてえええ！！

ガクブルしちゃいまスよつ！ この間に挟まれている私を誰か助けてギブミーイ！！

しかし戦いは一瞬で収束をした。Ｓ女医がふい、と視線を逸らせたのだ。

「またいつか聞かせて。じゃ、後は視力測つて装着を習つておしまいよ」

じゃあね、と机に向かつて仕事を始めた。もうこれ以上話す気はなさそうで、机の上を見たままヒラヒラと左手をこぢりに向かつて振つた。

じょ、女医は戦いを放棄した

！！

ホラあるよね、動物で睨み合つて視線を逸らせたほうが負けと

！ 女医サマ、カチヨーに負けたのでありますかっ！

わかりますよー！ 私も負けっぱなしデスからーー！

全然知らない人だけれど、S選手権で敗北した女医サマに私はほのかな同情心が芽生えた。

そうデス……こういう時は『妄想』に浸るがヨロシイ！ 特にBしね！ ワタクシめは制服が一番萌えマスので、そんな禁断の関係がよろしければいくらでも紹介致しますデスよ！

「ああ、ひひひひひひひー！」

「元気やーーー！」

「世話になつたな」

カチヨー！ 私の耳はそんなに伸びませんでーー！

カチヨーは女医サマを振り返り返りもせず診察室を出た。あをを、氣まずい雰囲気よおお。

クラゲから執事へチェーンジ！　のおお！

どうやらカチヨーはワタクシめにソフトコントакトを着ける為に
つれて来た様だつた。初心者だから一日使い捨てタイプのソフトレ
ンズ。

むおおつ！ なんだここの柔らかい物体は！ まるでクラゲを相手にしているかのようなつ！

表だからよく分からぬけれど、それはなんとか取説読めばいいだろう。

「か、かちゅお。終わりマシタ……」

慣れない……。田の中にウロコ入れてよく平氣だなみんな。おお
お、ショボショボするう！

私が装着の説明を受けていた間、カチヨーは待合室で待っていた。ヨロヨロと辿りつけば、何故かじいいつと私を見る。

ん？ へ、変なのデスカ？！ ひょっとして「ンタクト」の表と裏間違えたかなつ？！（んなこたない）

「似合うぞ」

またかの褒め言葉を貰へ、猫の心臓またもヤドリギノハナ

ちよ、まつて下せえ旦那サマ！ オラ褒められるのに慣れてない

んデスよおおおおーー！

内心の大混乱など分かつてゐるのかいないのか、カチヨーは私の頭をぐりんとひと撫でして受付カウンターへと席を立つた。
なんてこいつたい、どういうことデスかーーー！そのまま放置プレーイコーーースウウ！

ん……あ！ そうそう、放置プレイと言つたら！

「BARA たいむ」のサークルにてそれを重点的に描く方がおるのデスよ！ あの方の書かれる得意なカッピングは教師×生徒モノ！ 息も絶え絶えになるほど攻めるのに、その一線は越えさせない！ 欲しがるまでは与えませんが、そこを飛び越えてからのが秀逸なのであります！ 攻めの鬼畜つぶりがもう……。

むににににに

「ひー（ひどつ）カコー（カチヨー）！ なにのぬぬんぬぬか（なにをするんですか）！」

「何を言つているか分からん」

「カコーがいつかるがあー（カチヨーが引っ張るから）ー！」

カチヨーは私の両頬を左右に引っ張りなすつて！ 伸びる、伸びるつ！ てか、カチヨー！ その手そろそろ離してくれませんか？！ 引っ張るの止めた後、何故ほっぺた擦るんデスかああ！

「次に行くぞ」

つてーー！ そこ触れずに次デスかつ！

次に着いたのは「デパートメントウ！ キラッキラと輝かしい」テス
ねー、デッカイですねー！

「デパートの契約する駐車場に止めると思いきや、裏口に回りまし
て……んなつ？！」

「お待ちしておりました。袴田様、こちらへ」

「車を頼む」

畏まりました、と後に控えた人が運転交代「テスよっ！ なにこの
おセレブ臭！」

車から降りた力チョーと私は、執事ちっくな案内人に先導されて
歩き出す。「えー、えー、えー！ ここで何するん「テスか、力チョー！
はっ、まさかここで執事プレイですか？！ 主従関係でGO」「テス
ねっ！ ナルホドそう來ましたか！」

「お電話でお伺いした内容は、そちらのお嬢様で？」

そのチラリと横目で失礼にならない程度に見る目線。

あああ、わかります、分かりマスよ！

『どんな関係だよお前そしてどこの山奥からタイムスリップして
きたサルなんだ』とおっしゃってますね？！
あら？ なんだろ既視感が……。

「よろしく頼む」

引き渡されたーつー！ 私、何されるんデスかー！ カチヨーオ
オオツー！

おセレブ＆アマゾネスでインパラなワタクシ

つてことで。

ここは「デパート最上階。ちょ、リー、関係者以外立ち入り禁止区
域？！」いや、それにしてはやけにハテハテでセレブマイスター（
？）が「利用しそうな……？」

「リー、ビニなんデスか……」

両腕をアマゾネス、もとい女性従業員に抱えられて逃げられない
よう連行された私は、とっくに戦意など喪失してマス。力なく疑問
を口に出せば、右のアマゾネスが答えてくれた。

「VIP専用ルームですよ」

「デパートにある部門の最高峰を集めた特別室です」

左のアマゾネスも答えてくれた。ちなみにこりいらは「お面デスカ
？」と聞きたくなるほど完璧メイク、その上営業スマイルが張り
付いていた。

おつかねーよー！ ママン！

「袴田様、では」ひらりでお待ち下さる

「ああ」

かちよお？ 私つ、私は一体つ？！

力チヨーはひと座りするだけでお金取られそうな重厚ソファーにゆつたりと腰を下ろし、その長いおみ足を組んで私に向かつて軽く手を振り目を細めた。

「行つてこい」

再びかましにと西脇を押され、隣接するエアヘッド連れて行かれました……。

ええ、ええ。とてもその時の様子を事細かに言える勇気はありません
せんテス。
ヒットポイントヤジックポイント
相当なHP・MP取られマシタね。

ちよ！ わ！ やめてええええ！

激安量販店、しかも三年前の服を早く脱いで下さい!!

——のブリヌムでござる、

「みんなでいい——！」

しかもデスよ？ しかもデスよ？

カチヨーが隣の部屋にいるというのに、採市をてしまいマシタ！

身長が一五一センチだけど……すごいわ、六十五の口で五十
八の八十一?

声！
声出てマス！

お椀型だしキュウッと締まつてゐるレモンにしてゐし！

いいいやあ――！

なんて羞恥プレイ！スリーサイズがダダ漏れデスよつ！個人情報保護法どこいった！

そしてあれよあれよと高そうな下着を着せられ（しかも上下お揃いデス！）、ナウなヤングにバカウケ必死でステキ女子ウフフな服を着せられ、お面アマゾネスに化粧の指導を受けた。

しかし、これは難なくクリアー！

だつてワタクシ、漫画描いてマスからつ！ ペンだ筆だなんて得意だもんねふふーん！ つまり自分の顔に彩色すればいいんでしょーが！

初心者向け六センチヒールのパンプスを履いてドアを開け、フラフラしながらカチヨーのいるソファーへと歩いていった。

「か、かちよおおお

「……」

半泣きな私にカチヨーは黙つて立ち上がり、ワタクシめの手を取りソファーへとエスコートをしてくれた。そして……あれ？ あ、あれ？

ななななに？ 手、離して下さ「よー ちょ、指、ゆびゆび、絡めないでええ！ 逃げられないーーいーー！

カチヨーは私の手を握り、指を絡めたままソファーへ座るので、必然的に私もすぐ隣へと座る事になった。

その距離感もアレだけど、カチヨーの目線が私を外れないでの非常に困る。

ライオンに追われるインバラの気持ちが良くなリマス……。

逃げたい度MAX！

カチヨーサマの手は黙ります！

「ではこちらの書面にサインをお願いします」

執事メンが、高級そうなカップに入れたコーヒーを並べ、そしてカチヨーに何らかの紙とペンを渡した。カチヨーがそれにサラサラと書きつけている間、私はやつと視線が外れてくれたのでホッとして、絡められた手とは反対の自由が利く手でコーヒーを一口啜った。

うーん、味は分からぬけど、ブルジョアな味だと思いまス！
しかし。それにしても。

私をすっぽりと覆い隠すカチヨーのこの手……。手……。大きい
デスネ……。

カチヨーはペンを一旦置いたけれど、「ああ」と何か思い出した
かの様に付け加えた。

「全てを十セツト。洋服は着まわし出来るようそれぞれ写真にと
つてファイリングしておいてくれ」

「疋まりました。後ほどお届けにあがります」

へ？

ほ？

ど、どういう事デスカー！！

流れるような一連の動きを、ただただボンヤリとそのまま流して
いた私には理解が追いつきませんっ！ はああっ！ いつこいつ時こ
その現実逃避デス！

『執事は禁断の想いを抱えていた。主人である彼にこの
様な思慕を持つことは許されないだろう。しかも自身は男だ。同性
であるが故越えられない壁がある。主人の女性遍歴はずつとの日
で見てきているから好みのタイプも熟知している。しかし
今日の前にいる無防備な主人の寝顔に、とうとう……』

「うわーうわーうわー」

「あだだだだだだだだだつ……！」

「帰るぞ」

力、力チョーッ！ グーの関節部分で頭を「ゴリゴリ抑えないでく
だサイツ！ 地味だけど痛みはハンパねえですからー
ししあわせカチョー……。

「あ、あの力チョー？」

「なんだ？」

「てつてつてつてつ」

「随分楽しそうな擬音だな」

「じゃなくーー！ 手ーー！」

「繋いでいるが、それがビリした」

どうした、それがどうしたデスとおお！ どうしたもこりしたもないデスヨッ！ なんてこつたいつ！ カチョーサマは離す氣サラサラなさそうですぜ親分！

もうワタクシめは何もかも言つ氣分は失せ、カチョーのおつきな手に繋がれたまま黙つて歩きますデス。

しつかし私はヒールのある靴など普段全く履きませんから、六センチといえども中ボス級にやつかいデス。ヨタヨタと生まれたての小鹿ぱりに歩くと、カチョーが急に立ち止まり。

そして歩きやすいように気を使つてくれたのか、手を離してくれた と思つたら！

「しつかり掴まれよ」

私の手を、カチョーの腕へと掴まされマシタ！

ちょ、までまで、これはアレだろ、これでは『カポーシルエットウ』だつ！ ラブなカポーが周りみんなに見せ付けるように練り歩く構図だらおお！ 無理無理ムーリムリツ！！

あたしゃー言つなれば専属従業員つすよ？！ ジ主人様、お止めくだせええつつ！

「ジ主人様か それも悪くない」

ぎゃああああつー！ うつかり口に出してマシターーーー！

カチョーサマは一ヤつと口の端を歪め、暗黒のドリ笑顔で私の腕

をガツチリと腕と手で絡めとい、逃げられないようにしながら私を連行シマシタ。……………嗚呼……………。

力チョー！ それは忘れてええっ！！

裏口に置かれた車に乗る頃には、とつぱりと口が暮れてマシタ…

そらモーデスヨツ！ アレしてコレしてイヤーーっとしてたから
ねつ！（つまり色々）

執事メンはじめ、アマゾネス達や従業員の深々とした礼を後に車
を発進させたした力チョーは、高そうな腕時計をチラ見して軽く溜
息を吐いた。

「夕飯、何か食べたいものあるか？」

「へつ？」

力、力チョーが私に希望を聞くなど初めてーーっ！
何？ 何？ 最後の晚餐系？ 裏に何かあるに違いない！ 怖す
ぎて言えねえでヤンス！

「たたた食べたい者をワタクシめが選ぶなど、めめめ滅相も、」ぞ
いませんデス、はいーい

「いいから。お前は何が好きなんだ？」

「いえいえいえいえ……」

力チョーはそんな私にイラッとしたのか、握るハンドルを指でト

ントンしながら語りだした。

「……『始まりは、ただの先輩と後輩だった。大学出たての若造の俺に仕事を教えてくれた先輩は、今では上司として俺に仕事の引き継ぎ、つまり係長のノウハウを教えてくれて……』」

「やあああああつー・ダメえええつー・」

そ、そりは『BARA たいむ』投稿作、私の渾身の作品『課長、深夜に愛を』じゃないですかーーっ！ 力チヨーめ！ なに覚えてやがるんですねくわーーーっ！！

一人語りモノローグ的な所をそれこそ平坦な声で語りだした力チ
ヨー。ちょいちょい！ ちょい待つてよ！ その顔で、その声で、
B-L語っちゃいマスかっ！

ムニシピアル

「ひよつほ（ちよつと）ー カキョー（カチョー）ー はわしけ
くわはいつ（離してぐだせいつ）ー」

内心大混乱など見透かしているカチョーサマは、私の片方のほつぺたをみよーんと伸ばしなすつた！

イタイイタイってホントもう痛いって！
だから。

「ほくんははい」（「じめんなさい」）

あつさりと降参テス！ もうビリやつたつて敵いませんてマジで
トホホーン。

「で？」

「……で？」

「……反対の頬をこちらへ差し出せ」

「ああっ！『めんなさい』！ラーメン、ラーメンがいいデスッ！」

そう、何を隠そう（隠してないけど）私はラーメン大好きっ子！一人だって行けちゃうのだ！女子的に『一人』ってのは、冒険に近いのデスよね。一人ファミレスだって、一人カラオケだって出来るけど、まだ一人焼肉と一人居酒屋は未経験デス。経験値をじわりじわりと溜めて、いつか挑戦してやるのドウワーグ！

「トンコツ！ トンコツがいいデスッ！ 翌日の肌のもっちりプリンプrynはありえない程デス！ あああ、あの店のトンコツにきくらげたっぷり入れて食べたひ……」

「ど二だ」

うつとりといつも行く店のトンコツラーメンを思い浮かべていたら、カチヨーが「場所を言え」と私の好きなお店へと車を向かわせました……。

つてえつ！

までまでまでーい！ よく考えれば、その店むっちゃホームグランドオ！！

小さい頃から通い慣れた、まさに家族でお世話になつてゐる（現

在進行形) ひつさなラーメン屋ー まままか親兄弟来てないでし
ょうねー！

「こんな場面見られたら何と言われるかーーー！ つて、いやいや、
その前に店のおやつさんになーーー！」

私、ビビンチちゃん！ なに自分でこんな危機的状況をメークド
ラマッ！

「カチヨーッ！ やっぱ止めましょ？ 別のお店へー！」

「その心は？」

「やつ……！ え、えと。お店は古くて小さくて庶民的で。カチ
ヨーには似合わないといつか何といつか……。あと、ワタクシめの
家族がよく利用する店だからテス、……そんな所見られたらあつ！」

「問題ない」

「かちよおおおーーーー！」

却下デスカツ！ 却下なのデスカツ！！

聞くだけ聞くといって、却下デスカアアアアアツ！ なんといづく
レダマシ戦法！！

半分魂抜けながら、目的地へと運ばれマシタ……。

「じょ、情報修正をさせてくださいサイッ！」

「ひっしゃーーーって、ええ?ーーー」

「！」、こんばんは……『テス』

商店街共同駐車場に車を止め、そこからすぐ近くにあるワーメン屋の年季の入った暖簾をくぐり店内に入れば、おやつさんのダニ声が出迎えた。

「……まさかとは思うが、コリナちゃんかい？」

「あー、はい！」

おやつさんが驚くのも無理はない。私の今の姿は、『春風と共にアナタを惑わす魔法プリンセス』『ぱりな格好をしてるん『テス。髪はしょーとぼふにして毛先をちょちょいと遊ばせ風味、眼鏡つ子からコンタクトウ！』に変えて、服といえばそれこそ『ちょいと！』。今月の給料全てブツ込みましたわつ！』っていう程ブルジョア臭ブンツブンですからねつ！（私の給料では絶対タリマセン）

一ついえるのは、中身がそれに伴わないというか似合わないというか、例えていうなら新入学一年生のランドセルでしょーかあつ！ああ……しかし更にあえて言つならば。今の私は『コスプレ』『デスツ！』原稿を人質（？）に取られてる哀れな子ー。いわばこれは『制服』なのですううう！

「ゴリちゃん、見間違えたなあ！　おにօい、コレのお陰かい？」

！」

そうじつておやつせんは親指をグッと突き出して見せた。いやー
——！　ちがうってーええ！！

両手を挙げ反論しかけた私の腕をぐいんと強制的に下ろし、そのまま、まるで腰を抱くようにした力チョー殿は実に爽やかな笑顔をおやつせんに向けた。

「ええ、まあ」

まあって！　ちょっと！　ちよちよいと！　誤解つ、誤解させますつてマジでつー！

そのまま奥のテーブルへと連行された私。何か言おうとすれば、上から降るいてつゝ波動がワタクシめの開けた口を、強制的に閉じさせるのデス……トホホー。

絶対、ゼーつたい、誤解は解かねばならんのデスよつ！　私のマイイフアーミリーに伝わつたら……。つをあおつ、あなたおそりしゃつ……！

油が染み付いた丸椅子に腰掛け、同じく油でベタベタするプラスチックに覆われたメニュー表を力チョーに渡す。ああ、なんといふことでしょうー。力チョーはこんな店でも何となく絵になりますねつ！　銀行マンの様にも見えますが、黒いオーラを書き足したら間違いなく『立ち退きを迫る人』デス！

ああ、そのシチュもいいデスなつ！　おやつせんがビジュアル残念。しかし！　しかしデスヨ？　これをおやつせんの息子で当てはめればああ……！

『　いい加減、手打ちにしまじゅうよ』「だめだー。」
「お母さ

んの思い出が詰まつた大事な店なんだ！」「そんな大事な店なのに、経営の方は？」「……」「仕方ないです……体で分からせましょう」「な、何を！……』

スコンツ！

「んじゃっ！」

「現世に帰つて來い」

カチヨオオオツ！ メニュー表の角は痛いデスつ！！

「俺はお前と同じでいい

「へつ？ ああ、はいー、ワッカリマシター！ おやつさん！
いつもの二人前！」

「あいよつ！」

厨房の方で忙しく立ち回るおやつさん。たまにチラ見するのは止めて欲しいデス。そんな視線を知らん振りで決め込もうとテーブル傍の本棚から週間漫画雑誌を取り出した。

「ひー！ おやつさん！ 一週前のじゃないデスカ！

もうとっくに読んでしまった内容なので諦めて席に戻る。カチヨーはと見れば、携帯を取り出してメールを読んでいる。……あれ、器用に片眉上げて。不快そうなその内容はナンデショネー？

黄金のトコオ de いわこマスッ！！

「コリちゃんお待たせつ！ ほら、彼氏もたんと食えよつー！」

ダンダンダンッヒテーブルに並べるおやつさん。い——え、彼氏じゃありませんカラッ！ そこは全力で否定したいデス……でも。

力を込めておやつさんに言いたい所ですが、カチヨーの『黙つてろ』視線がこええええええつ！

「い、イタダキマス……」

私が今この時点で出来る事は、『彼氏』単語をスルーするのみでアリマス……。手を合わせペコリとしてから割り箸をパチーンと割つて早速大好物のトンコツラーメンへと箸を伸ばした。

ちょい固めに茹でた真っ直ぐな細麺、濃厚なスープ、軽く炙ったチャーシュー！ どれも最高つ！

まずは一口！ ちゅるっと啜れば鼻から抜けるトンコツの味が堪らなく美味しい。おやつさん、今日もいい仕事してマスねつ！

ウツトリと残り香を堪能してたら、カチヨーと目が合つた。

……なんデスカ？ ちょっと。なんで私をじつと見てるんデスカ
？？

「美味そうに食べるな」

「ええ！ 私、食べるの大好きデスからつー！」

「……しかし」の量をいつも？」「

「ハイ。え、なにか？」

「いつものセットは。

きくらげトンコツラーメン、餃子、白い飯。
完璧じやないデスカツ！ 素晴らしいトライアングルを描いてマ
スよつ！ まずはラーメンを食し、餃子 + 白い飯。白い飯が残つた
らラーメンスープに入れてスープ」とペロリと頂くのデスツ！！

「ほらつ、カチョーも冷めない内に早く！」

「あ、ああ」

そしてカチョードノも割り箸を割つて、ラーメンを啜る。

「うまいな」

「つでしょおおおーーー おやつわんと店はアレですが、とても美
味しいのデスツ！」

自分が好きな味を褒められた事でテンショントン上がりマシタツ！
つい大声でカチョーに返事をしたら、おやつさんに怒られちゃいま
シタ……。「アレつてなんだ！」ひいいつー！

あつという間に平らげた私とカチョー。 つてえええつ！
これまたご馳走して下さりまして何だかもう餌付けされてるんじ
やないデスカ私！ と思いつつ、あつさりとお言葉に甘えた。今月

は画材や参考資料（大きな声で言えませんがB-L関係デスー）買い漁った為に財布がとても寂しいのだ。

「おつと、ゴツねやんのテート記念で金はこいらねえよ

「しかし

会計で、カチヨーが代金を支払う段でおやつさんのが満面の笑みで「いじつてことよ」と断る。だめだそれじゃおやつをーんつ！

「駄目デス！ 受け取つてトセコおやつさん！」

「ゴリちゃん？」

「またお金取つてくれないんじやないかと、私たち次に来にくくなつちや「づじやないデスかあつ！」

「……そつかい。分かつた、じゃあ貰うな？」

「そうしてくだサイ。大体そつこう」とぱつかりしてくるから利益でないんデスヨ！ 愚子さんがいつもガミガミ言つてるの、聞こえてマスからつ……」

すまんすまんと、おやつさんは正規料金を受け取り、「また来てくれよな、彼氏とー」と最後まで誤解したまま笑顔で送り出してくれた。

あ、しまつた！ 口止めするの忘れてマシタ！ マーイフアアミリイイイーッ！！ ノーウ！

しかしすでに駐車場に止めた車に乗り込んだ後デシタ。いまからここを脱出する言い訳が見つかりません……。レ、レニに脱出ボタ

ン的なもの、ついてませんかー??

「帰るぞ」

そういう自宅方面へと車を走らせるカチヨー。

ん? なにやら機嫌がよろしいデスネ? イジワルな口角の上が
り方でなく、こう……なんちゅーか自然な笑み……笑み?!
笑ってるのデスカー! カチヨーオオ! 逆に、逆に怖いデスッ
!!

とても上機嫌の理由を聞く気になれなくて、ビクビクしたままカ
チヨー様の自宅へと戻リマシタ。

妄想センサー、恐るべしテスツ！

白里の城（私にはそう見えマス、はい）に着き、『やれやれ疲れ
たよホント今日一日で色々詰め込み過ぎだつてーー。』という疲労感
がどつしつと全身にキりますねつ！

ぎこちなく履きなれないパンプスを脱ぎ、玄関のたたきの端っこ
へと寄せる。……ってさ、おつかしーな。

フツーのお宅つてもうちよい砂とか埃とか端っこに溜まりマセン
力？？

「何をしている、早く入れ」

「はつ、はひーつー！」

玄関から真っ直ぐ伸びる廊下。途中には一階に続く階段があり、
私が初めてこの家に来たときはすぐに一階に上がった為、他の部屋
は見ていないのテス。

カチヨーが開けたドアから続いて入る

。

「か、かちよお……？」

「何だ

「あの……」

あまりの光景に絶句テスコツー！

「あのね……腐海の森はいいわ！」…………『スカ』

イメージはあの『ナウイ鹿』に現れる森のような、それとも「モンスターなどでたまに取り上げられる「ハリ屋敷」的な。そんなイメージを持つてマシタ……ツー

「力チヨーツ！ 私は何の家事をすればつつつ…！」

辛うじてあるのはカー・テンとソファとリビングテーブル。つて、
おいおいテスヨッ！ まあ待て。ちょっと待て。一回深呼吸だよワ
タシ。一回目を閉じてみればいいじゃない？ 見間違いかもしれ
なくつてよつ？！

ス――ツ　ハ――ツ。よし！

「……変わりません」

「何やつてるんだ」

「いえ、ファンタジーはやつぱり一次元なんだなと自覚した所デス」

「意味が分からん」

「それでワタクシめは一体何をするんデスカ？」
「こんなステキハ
ウスに掃除が必要だとは思えませんデスけど」

カチヨーは本当にここに生息していたのか？　とは思えないほどキレイ。モデルハウスの方がよっぽど住み心地がよさそうテス。そんな疑問満載な私の手に、ポンと財布が置かれた。

「明日からすることを言ひ。家具や生活用具などをこれで揃えてくれ

「……へ？」

「それから掃除、洗濯、料理を任せる

「……なつ？」

「私は明日の日曜日、どうしてもやらねばならない仕事が入った。朝はいつも食べないから問題ないが、夕飯を楽しみにしている」

なんてこつたああ！　カチヨー——ツ！！
いち、いちから揃えるとおおつ？！

ああでもそれはまず置いておこう。私にまじつしても確認しなければならないことが一つある。

「かちよお？」

「なんだ」

「あの、ワタクシはメイド服着たほうがよろしくトスカ？」

バチコーン！

「ギャツ！」

カチヨーテコピン、クリティカルヒット…。

「阿呆！ 普通でいい、普通で！」

そう言つて風呂に行くと言い、サッサと服を取りに一階へ上がってしまった。

うわーん！ ほんの出来心なのにつ！

家事といえばメイド。メイドと言つたらコスプレ。よし、着よう！ とやる気スイッチの為に持つて来たのにMOTTAINAIテス よ全く！

いやほらあの……鬼畜主人に新人のオトコノコがメイド服着せられてとか、萌えません？ その衣装の着心地とかフリル具合を繪にするため、参考用に買つたのがあつたのでつい……。

『「「」」主人様つ！ 僕は男です！』「知つているが何か問題でも？」「大アリですつて！」「ほう……その割には」「わわつ、ダ、ダメですつて！」……』

パカーーン！

「カチヨー——オオツ！ スリッパは反則デス——ツ！」

いつの間にカリビングへ戻ってきたカチヨーに、スリッパで叩かれました……。あつたんだ、スリッパ。 つてかなんで妄想してるタイミングが分かるかなつ？！ カチヨーの妄想センサーはかなり感度がいいデスネツ！

「午前中は荷物が届く。風呂は後で適当に入れ」

「りょーかいしまシタ……」

私はノロノロと二階のあてがわれた部屋に行き、今日書き損ねた妄想シチュをメモろうと手帳を取り出したまでは覚えてマスが、あまりに疲れてそのまま夢の世界へと旅立ちマシタ……。

現実逃避をさせてくださいサイッ！！

「…………んー、今なんじい…………？」

布団の中からこつも頭上有る田覚まし時計を手探りで探した。
ん？　ん？　アコマセンネ…………。

……。
……。

つてええつ！—！

ぱつせーーっと掛け布団を蹴り上げ飛び起きた私は…………。

「え、まさか異世界？」

とりあえず異世界トリップありがちなテンプレを呑いてみた。まさに見覚えのない部屋　　つて、あれ?
ぐるーーっと見渡せば、見覚えのあるステッカースが。ああ…………力
チョーの城か、ヒー。

……。
……。

つてええつ！—！—（一度田）

サスガに田が覚めマシタよつーー！　なんてこつたあつ！　ワタシ
昨日の夜そのまま寝ちゃったことおおおつ！　手帳にネタを書こう

と思つたところまでは覚えている。ええ、覚えてイマスよ？でも、
それは床の上での行き倒れ。

今いる、今座つてこむこの場所は、お・ふ・と・ん。
ナンデテシヨーカ。
あと一つ。ワタシ……なんで……なんで……。

「ぱ――――じゅ――――め――――あああん――」

肌触りの恐ろしく良い、上質の生地で作られたパジャマジャマですっ！ちよ、何で私コレ着てるんでしょうつかっ！！

暫し呆然と「」を見下ろしていたら、ガチャリとドアが開いた。

「朝から五月蠅い」

「かちゅおおおつ――！ ナン、ナン、ナン……」

「食べたいのか？」

「つて、ちつが―――つ！ 食べ物じゃないデスヨツ――！ あの
つ、私の今現在の状況は一体ナンでしょうか……」

「……寝て起きた所だな」

「見たまま――――つ――！」

『ふんとひっくり返り返りになりマシタよつ――そ、そんな力
チョーめ！ Tシャツにジャージズボン履いて少し生えたおヒゲら
しきモノをなぞるんじゃありまセソツ――！ ずるいぜコンチクショ
――！ あまりに無防備でもし私がメンズだったら襲つてる所デスツ
！』「寝起きのお前は、弄りがいがあるな」「よせよ」「ふん、ま

「んざりでもない顔だな」「構わなこり、お前なり」……『ふんつ、参ったか！……じゃなくてえつ……』

「私がひつして布団の中で？」

「床で寝てたから移しておいた」

「私がひつしてパジャマ着てるんデスカ？」

「わあな」

ソコ答えて—————つ……

出社の時間までまだあと一時間ばかりある早起きさん。私は力チョーに何度も聞こうと試みたのデスが、華麗にスルーされて未だに事の真相を知りえませんデス。

限りなく「着せられた」可能性が高いデス……。いやつ！ しかし！ でもデスヨ？？ 私が記憶ないだけで寝ぼけながら何らかの方法で着たという可能性 *if* 「ースも無きにしもアラーズ！ うん、よし、じゃあその方向で！ その方向でーえええ！

……頼むからお願ひ。

洗面所で身支度を整え、全く使い慣れそうにないクラゲちゃんを目に入れて（といふか、これも外してアリマシタ……謎だ）リビングへと足を踏み入れれば、コーヒーの香りがふわんと漂つていマス。

「カチョー？」

「飲むか？」

他の家電やら色々見当たらぬいくせに、『立派なコーヒーメーカーはあるんデスねつ！やたらいい香りがするんで私も貰いマスです。あー、（多分）美味しい。

「カチヨー、朝^{アサヒ}はん食べないんデスか？」

「朝は食欲がない」

「私はガツツリ派なんですケドね……」

なんかないかなーとキッチン（台所だけどオサレなんでキッチンと発音してみまシタ！）徘徊の許可を頂き、漁つてみましたが……なんでこんな何も無いんでショーカツ！！

家電に至つては、コーヒーメーカーと冷蔵庫しかないつて、ありえねえええええ！！！ 前妻よ、どうしたんだ！

冷蔵庫を開けたものの、ドアポケットに何も入っていないせいかパカーンと勢いよく開いてビビリ、冷凍庫もカラッケツ。野菜庫は……見るまでもないでショーネ。

その冷蔵庫の中にはビールの缶、ワインの瓶が一段に詰められ、あと一番下には何故か小さなペットボトルが。よく見たら

米？

「ああ、それは何かで貰つた米だ」

「何かつて、どんな時デスかつ！？」

貰うタイミングが分かりかねマスッ！ ともあれ食料ゲット。え

ーと、調理器具……にゃんですと？！　片手鍋一個ですと？！　む
しろ冗談だと思いたい。

それでも蓋付きでよかつた。米が炊けるぜヒヤツホウ！

しかしここで大問題がひとつ。

私、家庭科の実習以来料理したことありません……。

上書きが出来ません（泣）

「これは？」

「塩むすびデス」

ま、手に塩付けておひきにしただけなんですケド。

いやー……なんとかなるもんデスネ。『ご飯 片手鍋 炊き方』
つて携帯から検索う！ そんなこんなで片手鍋で炊き上げたご飯。
辛うじてあつた食卓塩（しかし砂糖は無いといつイッショクル
で出来上がりマシタ！

一合分の塩むすび。「うむ、真っ白に光り輝いてオリマス。白い
だけなんですね。ああ、昨日ガツツリ食べたはずの胃袋が自
己主張を始めマシタよつ！」

「では、イタダキマス！」

ソーリングテーブルの前で正座して、ぱちんと手を合わせて挨拶。
わーて食べようかと四個あるつの一つを取り、あーんと口を開けたら。

「うまうまだな

「かちよおーおおつー。」

手に持った塙むすびを、私の手」と掴んで力チョー殿が自らの口へとお運びなすつたあつ！　いーやーあああつ！　私のおむすびーいーいー！

あつとこづ間に一個分食べ終わり、最後に私の指についたご飯粒まで丁寧に力チョーはお口でキレイになすつたあつ！

むおおおおおつー！　その口、おーくーちいいいつ！　ありえねーーつー！

「じゃあ行つて来る」

私の頭をわしつと一回掴んで、力チョーは出勤なされマシタ。
私の口は、酸素不足の金魚の様にアワアワと動ぐのみで、全く抗議の一つも言えなかつたデス……。

くつ、力チョーめえ！　なんつーオツソロシーことしやがります
かつ！

私は只今、妄想の限りをメモすべく机に向かつてガシガシと書き連ねております。昨日からの妄想回数は約二十。私の妄想力舐めんなデスヨシ！

そしてさつきの力チョーの唇の感触を忘れないづちに記やうと…
クチビル……。

『僕の人差し指や親指についた米粒を、彼は手首を押されたまま一粒ずつその少し薄い唇で食んでいく。少し開いたその唇が皮膚の上を滑り、そこかしこに散らばる小さな米粒を捕まえる。その度に熱い吐息が僕の肌にかかり僕は指に心臓ができたのかと思うほど熱く高まつた。しかし、熱くなつたのはここだけではない。激しく自己主張を始めた自らを、気付かれないよう……』

駄目デスつ！『私』を『僕』に変換してみましたが、どうにもこうにも私の指に触れる力チヨーの唇、そして私をじつと見るその視線が全くもつて離れませんッ！！　あああ、こんなんじゅ腐女子の風上にも置けませんね。石が飛んで来マスよっ！！

ヤメたヤメたっ！！！ よし、後で書き直そう…

とはかく、田代のことは……荷物を受け取リ一の 買い揃え一の
デスね？ …… つて、私のセンスで力チヨー本氣で大丈夫だと思つ
ているんでシヨーカ。よしここは一つ腐女トモにヘルプしよう！
私にはナント『インテリアコーディネーター』を生業とするリア
ル友達がいる。中学校以来のツレなんですね、まあなんだ、見
た目と肩書きに騙されんなよオマエラ！ つてこの子の為にある言
葉だと思ひマス。

今日はアイツ休みで一田恋愛ショミーリングームを完徹でやると聞いていたので早速呼び出しましょう！ カモーン！

十五分とかからずやつて來た友達。ええ、実はここ近くにあるマソショーンに寂しい一人暮らししてやがるんデス。あつ、寂しくなかつた！ むしろ賑やかなんデス。あちらこちらに一次元モロ出しのポスターが貼り付けてあり、室内もそのグッズやら何やらで溢れていますからねつ！ かなりな充実つてもんデス。

『私に何かあつたら、親より先にアンタ呼ぶようにしてもらいつわつ！ 危険物処理班よろしく！』と頼まれているんデス。ええ、それは海よりも深い友情で固く結ばれておりマス。色々お互い爆弾抱えてマスからねつ！！

『ちよこれいとこ』といふ『ちよこれいとこ』というプレミアが付いたBL同人誌と引き換えテシタが（かなりの痛手デスが、背に腹は変えられまセンツ！）、イメージを伝え、採寸をして帰つていきました。仕事の鬼な彼女ならば手配は滞りなく進み、今日明日中には全て揃う事でしょう。持つべきものは友ですなつ！

ちなみにテーマとは……。

『「課長、お邪魔します」「ああ、その辺でゆつくりしてくれ」「あ、俺手伝いますよ。こう見えても料理が趣味なんです」「そうか？ 悪いな」「それでも課長、趣味がいいインテリアですね。こう……課長のクールなイメージにぴったりというか」「ははっ、クールか」「俺にはそう見えます。なんでも冷静にななす、頼りがないのある上司で」「……そうだな、普段はそうかもしけん」「課長？」「しかし今、とても堪えきれない想いを抱えているんだ」「待つて下さい。その先は……俺に言わせて下さい』

つて感じで！

『クールセの中に隠された情熱のインテリア』

キ・マ・リ

さ、そんなこんなで執事が来て、山のような衣類を置いて受け取りサインも致しまして。うをお……この量ナンナンダ！ ワタシサイズのピッタリな靴や下着や洋服アレコレ……。

つてか、ずっと考えない様にしてきマシタが、このお代金でどうなのさ。

私、新卒で初任給ちょっとアレなんですけど……。流石にカチヨー御存知でしょーケド。これも聞かねばなりませんね。あとにかく色々やらなければ！ 急げええつ！

「あ、カチヨー。お帰りなさい」

「……」

「……飯にしマスか？ お風呂にしマスか？ それとも……」

「……風呂。それからその服着替えて来い」

「……なり、ネクタイ緩めながらカチヨーは風呂場へ直行しマシタ。なるほどなるほど、外出先から帰つたら風呂直行するタイプなんデスネッ！

しかしながら、折角の機会なんで駄目だと言われました
が……メイド服着て、ご主人様のお迎えをしてみたかったんですね。
意味夢が叶ったというか！

しかしこのメイド服は、『嫌がる年若い男の子にわざと着させて
羞恥を煽る』というシーンの為に購入したのであり、チンチクリン
な私が（根に持つてマス！）着た所でどうという事はない。まあ目
的達成したから着替えるとしまスか。

夕食は実家の母親に聞いて作りマシタ。

「おかーちゃん！ 『』飯の作り方教えてーっ！」
「アンタ何やぶからぼつに！ それに合宿じゃ無かつたの？」
「う……え、えーと。そう！ 食事は交代制で作るの！」
「そう？ まあいいわ。で、何を作りたいわけ？」
「えーとね」

そして出来上がったのがコチラ。

「親子丢、ワカメと豆腐の味噌汁、ワカメとキュウリの酢の物、
か」

「すみません、私が食べたい物選んだらこいつなりマシタ」

ワカメ率多いデスつ！ しかしワタシが包丁握るのなんて約四年
振り（調理実習以来）ですカラ、逆に自分を褒めたいデスネッ！

「誰かの為に料理作るなんて初めてなので……」

味とか大丈夫デスカ？ と聞こうとしたら、あらら、なんデスカ
？ 目元緩んでマスヨ？ ？

「初めてか。美味しいぞ」

「ふおつ、ありがと「ひやこ」マスッ！」

褒められて、なんだかめちゃくちや嬉しくて、「ひやつほう！」と叫びたくなりましたが、ここが住宅街といつ事を思い出してグッと我慢しまシタ。「ワタシが作った物を食べてくれて、褒められるつて、嬉しい事この上ないデス。

よし、メモるつ！

このシチュを、次回『BARA　たいむ』に投稿するときに使うと、心に固く誓いましたデス。

観察記録開始テスッ！

「おはよー、じびこマスッ！」

「ああ、おはよう

本日は出勤日で、朝食作りは三回目。まあ何とかなるもんデスね。

夜疲れすぎて寝るのが早い もれなく早起き 色々家事が出来る。くつ……創作活動がちつとも出来ていませんッ……。日課のBL「本『』のシーンがツボ！」を拾い読みするとか、思いついたシチュを書き連ねたりとか、原稿描いたりとか……。

むおおおおおおつ！！

早くこの一ヶ月が終わる事を願いマスねっ！

いや、しかーしつ！ 人質取られていますが、ワタクシもタダでは転びまセンッ！ ふふふ……カチヨーのね、カチヨーのあんなんやこんなんを充分観察させてイタダクのデスヨ……ククク。ネタよ、カモーーーンッ！！

朝食は「」飯と昨日さみに作っておいた味噌汁の残り、塩もみキユウリ、さんまのミニコン干し。焼くだけなので簡単デス。

実家の母親が作る朝食を参考に作りマシタ。料理初心者でも何とかなるもんデスねっ！

「」の味噌汁美味しいな

「ダシ入り味噌ですケド、仕上げにイワシ粉入れるとそれっぽくなるんですよ。実家はいつもそうしてマス」

「……そうか」

カチヨー、そのふわんと田元緩めるの反則デスヨ？ ゆっくりと味噌汁の入ったお椀を置き、どこか遠くを見る目をしたカチヨー。ううむ、一体何を考えているのでショーカ？

はつ！ ひょっとしたら前妻つ？ 前妻の事でも思い出しましたかつ？！ 逃げられたとの噂の……ああそうデスネそうデスネ、絶対これ地雷デスよ？！ 危うきに近寄らず、デースッ！！ 早く食べ終えて逃げまショー——ツ！

「そうだ、いい忘れていたが……」

ふと何か思い出したように、カチヨーが私にひたと田を据えて話しかける。

……つ！！ いけない、これはいけないデスヨ？！ 警戒音が最大に鳴り響いてマス……ハーベンジャー非常事態発生！ハーベンジャー非常事態発生！ 直ちに脱出セヨ！！

私は行儀悪いと知つてはいるけど、味噌汁の中に半分ほど食べたご飯を入れてかっ込んだ。お茶を淹れてカチヨーの前にターニンと音を立てて置き、「ではっ！」と消えようと思つたらガツチリ腕を取られてしまいマシタ。……素早い動きデスネ、カチヨー。脱出不可能がびょーん。

「今日の服は八番で」

「……ナンデスト？」

「じゃあ先に行く。戻りしていけよ」

カチヨーは言つなりお茶を『クリと飲み干して、『テキる男は』レーチ』なビジネスバッグを持つて出て行つてしまつた。

八番……八番……はつ！ マサカあのステキ衣装ファイルに入つてゐる、『コーディネート番号』ハの事でしょうかつ！！ いつそのファイル調べたよカチヨー！ そしてなぜその番号なんデスか、カチヨーッ！！

自分の今の姿は、『いつものスース』姿にエプロンを装備。もちろんプリプリレースの付いたね！ これもまたワタシコレクションの一つでアリマス。

今この姿……気に食わないのデスカ、カチヨー殿。

後片付けを終え、一階の部屋のクローゼットを開ける。

何度も開けても慣れませんね……。デパートメントウード購入したステキ女子服達がずらりと並んでおりマス。目がチカチカいたしますデスヨツ！

衣装ファイルを開きいくつもの写真が並ぶ中、ハと書かれたページを開く。そこには『キラリ 風がそよぐ春色コーデ』と書かれた付箋が付いた、薄ピンクのニットにふんわりしたタックスカート、それに白のスプリングコートだつた。ベージュのストッキングは少し柄が入つたもの必須！ とまで注釈付きで……。

バッグもパンプスも指定アリで、どんだけ丁寧なんだよ！ とビックリしちゃいマスネ！

書いたのはあのアマゾネスかつ！ オマエどんだけファンシーな世界に行つてるんだ！ 戻つてこーいつ！ と言つてみたい気もしたが、お前はどうなんだと聞かれれば上手く答える自信がないデス。基本同じ一オイを感じる文章なのデス……。

それに。私、センス無いのは自覚あるんデスヨ。ええホントにつ。だからこの機会に色々学ばせていただこうかと思いマス！ タダでは転びませんッ！！ ええ、呪文のよじに繰り返しマスよつ！

出勤まで時間がまだ少しある。いいデスね～会社近いと家を出る時間もゆっくりで。折角あるこの時間、妄想タイムに当てまつショウ！ イエーイ！！

とりあえず、忘れないうちに書かねばならぬ観察記録でも。

メモ……カチヨーはボクサー・パンツ派だった。ちつ。俺様Sキヤラならばそれなりに下着だつて攻撃的に行つて欲しいデスヨッ！ 真っ黒〇＼真っ赤なブーメランパンツに変えてやりたい所デスが、それやつたら確実に死亡フラグ立つのデス。悔しいデスが、勇気あら撤退をするのデス。

それから、ワタクシめの人生初（調理実習除く）料理に文句を言わなかつた、むしろ褒められた！ ナントイウコトデショウ！ 多分力チヨーの味覚はおかしいに違ひない。あのような料理でおセレブ力チヨーは満足なされるのでしょうか。嫌な予感としては、今年の給料ヤバイのではないかといつリアル心配のみデスね。

あとは、会社から帰つてすぐにお風呂へ入る、と。これはまあ本人の趣味だから構いませんが。

おつとお！ 時間デスッ！！

玄関前の全身鏡で一応身だしなみをチェック。……うん、アマゾネス達が用意した服はピッタリ体に合つています。合つてないのは私の性格ですな！ コスプレなら演じられマスが、リアル実寸大。まんま私。

フルモデルチェンジしたこの姿。……会社に行くのがちょっと躊躇われマス……。

会社でオモチャにされマシたつ！

「わっ！ ユリ子ちゃん……だよね？ どしたの？？」

「ぎやっ！ さすがマメ橋先輩つスね！ 一番最初に見つかったY O！」

私は「ツソリと社内に入り、マイ机に座つてとにかく小さく小さくしていたが、マメさが売りのマメ橋、もとい高橋先輩に声をかけられてしまった。

「『J'J'J'J'J'』めんなさい！ ほんの出来心でっ！」

「それじゃ悪い事したみたいじゃん！ 違うよ、すっげー可愛くなってる！ あ、百合一、こいつ来て」

そういうて、マメ橋先輩は給湯室から出てくる百合先輩を呼んだ。うをお……百合先輩だああつ！

百合先輩は、私と同じ名前だけ外見真逆の超レンジャー美人な二十七歳！ マメ橋先輩と同期なのデス！ 綺麗系の顔でタイトスカートがめちゃ似合つ……そうデスね、例えていうならば『女教師モノ』が似合うお方です。とても本人には言えませんがねつ！

社内では百合先輩、ユリ子ちゃんと呼び分けられていますデス。

B-L好きなくせに名前がユリとは皮肉なもんデスネ。ふふ……リアル腐女子仲間には良くからかわれたもんデス。

「ユリ子ちゃん！ かわいい！」

綺麗なおねーさまの田舎先輩はワタクシめをぎゅうつと抱き締めて頬ずりなされマス……。ちよ、ね、まつて、まつておねーたま！ 私そんな趣味なくともびびりとかなるわう ペンチクショーッ！ うわああ、いいカホリがしまス……むつはー！ これでは近づくだけで欲情モノですヨッ！ 気をつけなはれママ橋先輩！

「何なに？！ やつだコロ子ちゃん可愛すぎつー！」

田舎先輩からぐいんと引き剥がされて横から抱き付いてきたのは

……

「わよわつー… みどりちゃんぱいつ… ひーーーつー…

「じーしたのよ？ 春だからって変わりすげー。」

みどり先輩は二十三歳の一個上。しかしどもシックカリとしたオヒトなのテス。つて、うをを……痛いテスよ？ 痛いテスよ？？ 体育会系な学生時代を過ごしたらしい力で、ぎゅうぎゅうに抱き締められて苦しいテスッ！

「みどりちゃん、コリ子ちゃんが辛そうよ～ わあ、本当に変わったのね、とつても可愛いー。」

私の死角から聞こえてきたこの声は……つー するりとみどり先輩の手を外しつわりと抱きかかえられたのは美穂先輩つー 短大卒で入社三年田だけどみどり先輩と同じ二十三歳。くおーつー やらかいつー… きゅうつと抱かれるこの感触… 女子、やらかー… ウツトリ。

あれ、私つてば実はその名の通りなのデスか？！

「デスか？！ ねえ今めっちゃモテモテでつすーーうう！
はわわ、こ、これはまさにハーレム！ 萌えデス！ 超萌えデス
ツ！！ これは使えマスよおおお！！

『小柄な少年が男だらけの会社でイケナイ関係を……！ クールで知的な先輩、さわやかスポーツマンな先輩、守つてあげたい先輩に囲まれ、それぞれにラブイベントが発生』

うわ――――――！ 堪らんっ！ これだけで萌え死ねるっ――！

おいお前達始業時間だぞ、仕事にかかる

私達が輪になつてキアアキアアやつてゐる後から声が掛かつたのは。

地圖上沒有標示出來！

つて、あれ？？

力チヨーは私をスルーして、普段通りの『力チヨー』な顔して自分に向かう。

あれ……あれれ?
いつもの、デラヘルンとかガリガリ攻撃は無い
のデスね……。

力チヨーの声でみんなそれぞれ仕事に向かい、日常が戻った。

力チヨーの妄想センサーが反応しなかつた事に、なんだか私は物足りなさを感じてマス。

シンがテレなのか！

家に帰つてお帰りなさいをすれば、そこはいつもの力チョーだつた。

ただしブリブリエプロンは着けておけと謎の言葉を残し、お風呂に直行。むうう、謎のオヒトです。

では風呂に入っている間に、料理の仕上げでもいたしまひよ。作る時間が割とあつたので、ネット検索して作りマシタ。バンザイ文明の利器！

今夜はご飯、ジャガイモと玉葱の味噌汁、小松菜と油揚げの煮びたし、大根と手羽先の煮物、冷やしトマト。オサレな料理は分かりませんので、私が食べたい料理を作るだけデス。実家のママンが作る料理は、家を離れると食べたくなるモノです。

「……まだ食べてなかつたのか？ 待たなくともいいんだぞ」

風呂から上がつた力チョー。それにあわせてご飯や味噌汁をついで、一緒に席についてイタダキマスをした。そしたら力チョーは箸を持ちながら私に聞いてきた。

「いえ、私が一人で吃るのが嫌なだけデスから。実家ではいつもみんな揃つて『イタダキマス』だから、なんとなく私もそういうクセがついたというか……気にしないで下サイ」

それに、作る手間も洗う手間も一回で済みますからねつ！ そう言つて大根に箸を伸ばした。うむ、我ながら上手くできたんじゃないデスかね？ 煮込む時間もあつたしおつけーおつけー！

もぐもぐと口を動かしながらカチヨーに大根を勧めようと思つたら。カチヨーは私を見つめ……見つめてマシタツツー！ んぎょーつ！

駄目デスッ！ いいからつ、早くつ、食べる方に集中して――ええつ！

その視線、あれデスよー凶器デスよーつ！ 「田で『ロース』な、超ビームが出てマスッ！ とてもこう、なんか居心地悪くなるんだいつ！

はつ！ まさかこれつて……シンテレ要素来ちゃいマシタかつ？！ うわー、来た！ やばい、来た！！

会社での冷たい態度もあれはきっとシンの部分に違いないデスつ！ くうつ、やるなあカチヨー！ この私にリアル体験させてくれるとはああ！ 『シンテレ』の極意、しかと受け止めましたぜいつ！

ぎゅむ―――つ。

「ふが―――つ！」

「現世に戻れ」

「はがつ！ はがつ！ （鼻ー 鼻ー）」

カチヨーが私のちつさな鼻をぎゅいつと摘むので、フガフガ言いながら私はカチヨーの腕をタップ一回であつたりギブの意思表示をした。

「もおおつー！この鼻が可愛いと言つてくれる人がいるのに、ひん曲がつたらどうしてくれるんデスかっ！」

きつと赤くなっているだらつ鼻を擦つていて、途端冷氣が漂つた。

「誰に言われた？」

「ふあつ？」

「誰に？？」

うわあ、そこ気になるんデスかっ？！ 何でデスかっ！－－ ビうでもいい所に喰い付くんデスねつ！ しかし答えねば冷凍マグロにされちゃいそうデスッ！

「誰について、ハハに……」

「そうか」

あの冷氣は即座に氷解し、またぬるい空氣が漂つ。いーーーいやーーーああつ、怖いよママーッ！！

その変わりつぶりを私がガクブルしてゐる隙に、全て綺麗に食べ終えたカチヨーは「『馳走様。美味かつたぞ』と私の頭をわしわしき掴みして自室へ行つてしまつた。

かちよおおお、実践編はワタシいらないデス……。神経持ちませんがな！

それからはつつがなく（？）約一週間が過ぎた。
慣れない家事もソコソコこなせるようになり、ツンデレカチヨー
にも少しだけ慣れた。いや、慣れないデスネッ！ デレが一番慣れ
ないつ！ 帰宅後のカチヨーサマは、いつも何か上機嫌で超怖いデ
スツ！

本日は金曜日。朝食を食べながらカチョーにそういうえは、と切り出した。

「あ、力チヨー。今夜は私飲み会なので……」

「何？」

ひーつ！
きよわいい
いーーつ！

「」の冷氣でダイヤモンドダストが出来ちゃうじゃー!! イヤイヤヤでもこゝは何としても踏み留まらなければなりませぬつ! 頑張れワタシー。

「せ、先月からの約束がありましてつ！大事なのデスッ！」

言つてしまえば合コンだが、きっとその単語言つたら多分ワタシ滅される様な気配を感じマス。その上、今まで参加してきましたが、ネタ用観察記録つける為つてのも絶対言えませんねつ！――大体、私が声掛けられることなど「お代わりいる?」「会費集め

るよー」位しかないので、フツーにお夕飯を食べに行く並デスから。超安心飲み会！じつくりとB-L資料集めるのに超有効タームなのデス。

「会社の人も一緒に終電には間に合いますし、お夕飯も温めだけにしておきますのでっ！」

終電は地方駅なので田を跨ぐ事はまずあり得ない。そこで皆とバイバイして、力チョーの家は駅から十五分程度、徒歩帰宅となりマス。歩いて帰れるってス・テ・キ 実家だと駅から千五百円ほど掛かりマシタからねっ！

「……分かった。ただし」

「ただし？」

「店の名前を教える。あとは店を出る時に電話をすること」と

「了解デス！ 力チョー！」

ビシッと敬礼し、食後の茶を淹れた。

いつものように力チョーとは時間差で会社に着きました。いえ、力チョーはとにかく早く行くんデスよね。色々事前処理あるらしくて。スンマセン、新入社員の分際でギリ出社デス。

「ユリ子ちゃん、今夜大丈夫？」

「ハイツ！ じえんじえんおつけデス！ マメ橋先輩、ちなみに他に誰が行くんデスか？」

「んーと……手帳見るからちょっと待つて？」

『百合コンの神』と言っていたのはみどり先輩だつたか。色々な人脈があるらしく、そして自分自身も企画するのが好きだという事で独身者集めての百合コンを良く開催する。

百合先輩と付き合うようになつてから回数は減つたらしいけど、面倒見のいいマメ橋先輩は恋愛を求める人達に場を提供してくれるのだ。流石マメ橋とアダ名されるだけあってマメデスネ……。

ワタシはそれこそネタの為と言っちゃーなんデスが、マメ橋先輩の揃える男性陣は『超』が付くほど粒揃いのイケメン達で……それはそれは垂涎モノですよっ！！ むつふー、妄想が暴走してしまいマス！！

「ステッキ男子……うおお！ さうにプラスしてその細身のシルバーフレーム、いつちゃう？！ どうわああつ！ ちょ、まつて、ネクタイ軽く緩めちゃうイベント発生でございマスか？！ つまり、オッケーですかっ！！」

『入数合わせに借り出された俺たち。このメンバーには言つていなが、こいつは俺の物だ。人当たりがいいから女と話が弾んでいるようだが、これは……俺にわざと嫉妬させる為の演技に違いない。その手に乗るものかと気にしない振りをしていた俺の視界の隅で。あいつはネクタイを軽く捻りながら緩めた 今夜は覚悟しておけ……そのサインだと気付いた俺は……』

「んぎょー！ たまりまへんっ！！ このステッキ男子しかも眼鏡付きというのは実の所女子に大人気！ ちなみに細身でクールな、が

枕詞になつマスケジねつ！　BL本といつのは腐女子の萌えが詰まつためくるめく愛の世界なのですっ！－

つて、やつぱりカチョーのシッコ!!あつません……。いのデスかね、暴走行くとこまでいつちやいます田??　ま、自分でちょっとストップかけておきましょ。ふー、落ち着け落ち着け冷静につ！

「……さん、かな？　あれ、聞いてた？」

「うをおつ！　アワワすみませんつーー！」

「高橋、ちょっと」

妄想ガツツリしてて、自ら静止しようとしたら全く聞いてませんデシタ！　慌てていたら、マメ橋先輩がカチョーに呼ばれてしまい、結局ワタシは誰が参加するのか良く分かりませんデシタ。

……暫くカチョーと部屋の片隅で小さな声で話し合っていたマメ橋先輩。およよよ？？　みるみる顔が青くなつて……。ちょ、なに、何しちゃつたんデスか先輩いいーー！！
仕事でかなりヤバいことしかしちゃつたのでしょーかつー！！

口元に手を当てて、顔色の戻らないまま私のそばに来たマメ橋先輩は、軽く「はー……」と溜息を吐いた。

う、うん……何か分からぬけれどとりあえず「頑張つて下さい」といったら変な顔されちゃいまシタ。

ハンティング女子おつかねえ！

メンバー、我社からは私とマメ橋先輩だけデシタ。つて、マメ橋先輩は幹事だし、百合おねーたまという美人彼女いるから人数に含まれてなかつたりしちゃうんだなつ！

ビルを同じくする会社の女性四人と、私は年の頃は似たり寄つたりで、何度かそういうえば会つた事がありマス。ワタクシめはいつもご飯に夢中だし、コレといつて誰も注意を向けないし、印象薄いのも頷けますね。大体私が目的とするのはネタですからーっ！

しかし、会つた途端色々と詮索されマシタよ……。そらメタモルフォーゼ的な姿になつてマシタからねつ！ 私でも多分きっと恐らくビッククリして聞いちやうゾ！

髪切つたら「失恋？」なんてそんな生易しい質問なんてされませんッ！

「わつ！ 誰かと思ったわ」

「滝浪さん、どうしちやつたの？！」

「え？ 特殊メイク？？」

「実は双子の姉妹だつたとか？」

「し、しちゅれいな！」

あわわ、動搖して囁んじゃいまシタッ！ チビッ子の私がブンブン怒つても「はいはい」と軽くあしらわれる。コドモ扱いせんでいただこうー、あたしゃ立派なとうえんていーつーう！

抗議しようつと息を整えていたら合コン相手の男性陣も到着したようで、女性達の意識もアッサリとそちらへ向かいまして……きょわああっ！ ハンターがいるつ！ 肉 食 獣！！ おつかねええええ×！

そりやーマメ橋先輩の連れてくる相手といつのは本当に優良すぎて、この合コンに参加できるのが女子達の一種のステータスにもなっているのだ。

優良相手を連れてくる、つまり自分も優良物件だと言われてるようなものだからねっ！

しつかしそのギラついた狩人の目は止めた方がいいと思いまスが……。マイナス判定です！ どん引かれますゼ皆の衆！！

駅近くの居酒屋に入り、それぞれ五対五で向かい合って座る。マメ橋先輩はいわゆるお誕生席に座り、私はその斜向かいに通された。うーん、ワタクシとしたらマメ橋先輩のすぐ傍は視線が集まりやすいから避けたかったし、反対側のすみつちよで料理食べながらメモりたいんデスけどね。

マメ橋先輩がすみつちよに座る私の所に後から座ったから、今更移動しにくいデス。

「滝浪……ユリ子ちゃんだったよね？ ユリ子ちゃんは大学ビニだつた？」

「あー、 大デス」

「一人暮らし？」

「実家に住んでマス（たつた今は期間限定で某所にある城に住んでマス）」

「休みの日は何してるの？」

「好きな作家さんの本を買いに行つたり読んだりしてマス（ハハ）
ケに行つたり、B-LINE本買い漁つて読み耽つてマスッ！」

流石に分別あるオットナーな私なので、ぽかしながらも答えてますが……こりゃ一体ナンナノダ？！今まで一度も経験した事のない質問の嵐。うをおおお、ご飯、ご飯食べさせてええっ！妄想を、妄想させて！ ドップリ浸りたいし、ネタを頂戴～～～！ ウォンチュー～ウ～～！

その上、同席している肉食獣かのじょたちの視線が痛いデスっ！ 勘弁して下せえお代官様っ！ おら別にラブい相手を見つける為に参加したじゃないんデスよー！！

しかし聞かれて黙るのも態度悪いし、半泣きで答えていたら更に喰い付かれました。ちょ、なんでええ！

「あーそりゃ、曾根さんて最近ジムに通つてるんだっけ？あの駅傍にできた新しいビルの

「へえ！ 僕もあそこ氣になつてたんだ。どんな様子？」

店の人に呼ばれて席を外していたマメ橋先輩が私と反対に座る彼女に話を振ると、その話題に皆がわっと話に花が咲いてやつと解放されたワタクシ。ああ疲れマシタ……。

妄想の一つも出来やしないよー

最近の私のネタ帳はちつとも進まないので「ザイマス。とほほー

つ
!

私に静かな妄想タイムを下せえなー！

お店の人のご好意で、結局終電間近まで同じ店で過ごしまシタ。五対五の男女はそれぞれ座席を入れ替わったり、連絡先の交換などをして楽しく過ごしたみたいデス。……みたい、つていうのは。

「コリ子ちゃんて彼氏いないんだし、この後……」「え？」

「ああ、ちょっと持ち帰りの仕事あるんだよねコリ子ちゃん！新人だからしようがないけど、早く仕事覚えられるといいね！」

「メルアド教えてよー」

「メルアド、ですか？」
「やだな、俺の先聞いてよー。あ、皆そろそろオーダーストップだけど、注文ある？」

私に聞かれる質問はこと』とくマメ橋先輩が絶妙のタイミングで遮り、別の話題へと振つていぐ。なんとかお見事デス。あまり不審に思われない程度に会話に参加することもあり、この辺が本当に『マメ』なんだなと体験中なのデス！！ つーか、話よりも私はただ黙つて妄想して萌えていたかつたんデス。

話しかけられるなど想定外なによだ。

一つ位は考えたいな……よしつ、店員で妄想スタート…！

『いつも合図』といつて僕の働く店に来る彼。僕はカウンター越しに、店内の座敷で賑わうグループを盗み見る。ムードメーカーなんか、話題を均等に振つて全ての人に出番を作るその手腕はとても見事だ。一見すると陽気な彼だけど……僕は知つている。トイrena

どで離席したときに見せる一瞬の影。そのギャップに僕はハートを打ち抜かれてしまったのだ。素の彼を知る僕は、もつと深く彼を知りたくなった。そう、このカウンターを越えて……』

……イマイチですかね。うつむ、ちょっとほりきらうないテス。おつかしーなー！

そんなこんなでとうとう終電の時間になり、一応約束通りにカチヨーに一本電話を入れておきマシタ。店を出で、駅に向かいマス。何故か歩くときもマメ橋先輩は私の傍を歩き、私へと向かう会話を攫つていや……。

「ねえユリ子ちゃんは実家どこなの？ 一緒に帰ろ？」

「あ、えっと」

「ユリ子ちゃんちは俺の彼女んちの近くだからついでに送る約束なんだ。おーい皆気をつけて帰つてね！」

最後まで私マトモに合コン相手と喋つてませんネ。いや、喋らないのはいつもの事ですけど、聞かれて答えないというのは初めてのことなので、一体これはどういう事なんでしょうーかつてね！ なんだよ聞くなよ！ 飯とネタだけギブミーですよー！

改札で電車組とサヨナラして、タクシー乗る人たちもサヨナラしました。今私の傍にいるのはマメ橋先輩デス。

「ユリ子ちゃんお疲れ様ー。さ、帰ろつか

「へ？ あの、そりゃええ先輩つて電車組じゃないんデスか？？」

「あー……、うん、うん。いつもはそうだけじねー」

歯切れが悪く答え、こめかみをポリポリと搔くマメ橋先輩。一体なんでデスかね？ その先輩の携帯から着信音が響いた。

「あ、ちょっと待つてて」

携帯電話の通話ボタンを押して応答した先輩は、なんか言つながら『大変恐縮します！』といった様子デス。相手は一体誰ですかね？？ はっ！ 百合おねーたまデスかつ？！ ラブリー彼氏の心配デスか？！ ゴメンナサイおねーたま！ 私マメ橋先輩よりも百合おねーたまの方が大好きすぎるでのご心配無用つすよ！ 大丈夫、ワタクシこつから走つて帰りますので、先輩とラブラブ週末お過ごし下さいなつ！

「じゃ！ お休みなさいーつー！」

小声で電話中のマメ橋先輩に伝え、駅の出口へと走るのですつー！

「つて、ええええつ！ まつて、まつてえコリ子ちゃんつー！」

遠くでマメ橋先輩の声が聞こえましたが、無問題デス！ 早く百合おねーたまの元に行つてさしあげてー！ という気持ちで、小走りをダッシュへと切り替えマシタつ！

そう、私はお酒が入ると走りたくなるのデスッ！

駅南の大通りの交差点を左へと渡り週末の夜を楽しむ人たちの喧騒から離れ、段々と街灯も間隔が広がつてきました。んをー、所詮地方駅！ ちょっと駅離れるところだよ！ 暗いよつー！

大きなビルが立ち並ぶゾーンを抜け、住宅街の雰囲気が出てきマ

シタね。はー……ちょっと歩いづかな。テンションアゲアゲで走つたので流石に疲れましたヨ!

ハアハア息が上がつてますけど、ふと思う。逆に私の方が不審者と間違われないかと！ 大丈夫かいもしかしたらこの付近にいるお嬢様たち！ 安心したまえ私は單なる息を切らした二次元をこよなく愛する女子デスよ——つ！

「止まれ」

「ひつ」

「落ち着け、こつちを見ろ」

「はわあ……そ、そんな！」廊下を開いて下のムスコが「んー
チハ！ ありや違つた、いま夜ですからコンバンハつてしないで下
さいよおおお！ つて、……か、かちゅお？」

建物の壁に背を預け、声をかけてきたのはカチヨーでした！
がりにいたので全く気付きませんデシタよつ！－

やつくつと私に近づき、「ほら帰るわ」と手を差し出した。その意味が全く分からずに立っていたら、痺れを切らしたのか強引に私の手を繋ぎ、歩き出した。

「ちょ、ま、力！ え？！（ちょっと、まつてよ、力チヨー！）

カチョーの手はとても大きく、私の手などすっぽり隠してしまうほど。ぎゅうっと握られたその強さと、私の手よりほんの少しの冷たい体温が直に伝わってキマス。

引っ張られるようにしてカチョーについて歩き、その後姿からは全く表情を窺い知る事は出来ませんが……ひょっとしたら。いや、ほんとにひょっとしたらデスけども。勘違いだつたら超恥ずかしいのでとてもじゃないけど聞けませんが。

私を、迎えに来てくれたのでしょうか……。

手と手を繋いでただいまデスッ！

手を繋いだまま、カチヨーの城へと戻リマス。
夜風がひんやりと頬を撫でるのに、一向に体温が下がらないのは
ナゼでしょーか。

特に、特に、あの、カチヨーと繋がっている手から熱が発生して
マス。ふ、ふおおーー、変デスッ！ 変デスッ！ 何デスかーーっ
？！ 調子狂いますヨ全くもつて！
ただし……このシチュは使えマスよ？？

『告白じてからもう三ヶ月。 俺たちは同棲を始めた。世
の中には様々な愛の形はあるが、男同士というものはどうにも風當
たりが強い。俺は在宅の仕事が出来るが、彼は世間に出ている。男
と同棲といわれて仕事がしにくくなるのは彼だから、それなりの建
前は必要だった。

今夜、彼は取引先との接待で遅くなると言つていた。しかし彼は
……非常に怖がりだつたりする。出会つてから暫くして、暗がりや
恐怖映画を徹底的に避けているのを知った。背も高くスポーツマン
体型の見た目に反し、怯えてこちらを頼る姿に……たまらなく可愛
く感じたんだ。

駅からの夜道、きっと半泣きで出来るだけ明るい道を歩いている
事だろう。俺は椅子にかけてある上着をさっと羽織り、玄関を出る。
迎えに行くためだ……

いやいや、この場合コツチですかね？

『僕は接待で遅くなると彼に伝えてある。もう寝ている頃だろうか。それとも起きて待つてくれているのだろうか。

小走りになるのは彼に早く会いたいから。いや、それもあるけれど……僕はオバケが怖いんだ。怖くて怖くて泣きそうだ！ 暗い影から「わっ」と出てこられたら、間違いなく悲鳴を上げて腰を抜かす自信がある。風で揺れる垣根に怯える自分を心の片隅では鼻でフンと笑い飛ばしているけれど、その片隅にいる心だけではどうこうできるもんじやない。ぎゅうっとカバンを胸に抱えて足を速めると……。「お帰り」「つきやあつ！」「バカ、俺だよ」「えつ」「心配で……迎えに来た」「有難う。ほんとうと、迎えに来てくれるんじやないかつてどこかで期待してた」「俺はお前のためなり……

1

卷之三

『正統御文庫』卷之二十一

「浸るな飛ばすな戻れ阿呆」

「ほつへたー！ ほつへたー！」

片頬を引っ張られ痛い痛いむつちやいたい——いい！

いつの間にか玄関目の前で、うをう！ まさかのワープ？ いや
いや、妄想に夢中だったのデスネ私つてば！ だから力チヨーが私
のほっぺた摘みあげたんデスネ！ わーお痛いってのまぢで！

力チヨーが玄関の鍵を開けて中に入り、私はそれに続きマシテ。

「ただいまー」

と帰宅の挨拶をしたら、カチヨーがぎょっとした顔で私を振り向いた！

「ぬわつ！ なんデスかカチヨー！」

「いや……挨拶するんだな、と思つて」

「あれ？ しないもんデスか？ 帰つてきたら言つもんだと思つてマシタ。この二十二年間実家ですつと言つてたからクセなんデスよ。そうですか、そうですね、ここはカチヨーのおうちデス！ 改めまして、おじゃまし……」

「いや、ただいまいい」

ふいと横を向いて素つ氣無く言い残し、先に玄関を上がりて行つてしまいマシタ。

わわつ、今、すつゞいの見ちゃつたよおーーん！

ほんの少し、ほんの少しデスヨ？ ほっぺたがうつすら赤く染まつていたような？！ うわー！ レア！ 超レアもの！！ 心の力メラバツチリ記録保存！！

会社では先輩方に『鬼畜軍曹』とコツソリ言われているあのカチヨーがあああつ！ 一体、何キッカケでそんなデレが出たのですか？！ 私全く分かりましぇん！！

まさか！ んなこたーないだろ！ 的な。

水を一杯飲もうと台所でコップに水を注ぐ。いやー、やつぱり水はウマシですな！

タンシとコップを流しに置くと、そこからと皿に入るものが。あれー？ ……タバコ？

換気扇の下に見覚えの無い灰皿が。それにはこんもりと吸殻が鎮座なされておりマス！ あら、あらら？ これってカチヨーですかね？ いやでもカチヨーってタバコ吸っている所、私見たことありますんケド。

「カチヨー、タバコ吸われるんデスカ？」

台所に来て冷蔵庫を開けるカチヨーに聞くと、口をへの字に曲げた。

「……やめたのをやめた」

えーと。タバコをやめたのを、やめたつて」とデスカね？

カチヨーは冷えた缶ビールを一本取り出すと、その場でカシュッと音を立ててプルタブを開け、ぐいとあおる。

むほ、いいデスネその喉仏。私に喉仏ちょーだい。

はっ！ 喉仏フェチのサークル仲間に、是非この『ゴクリ』と飲むたび動く喉仏を差し上げたい！ いやでも流石にカチヨーのをもぎたてフレッシュ するわけにもいかぬデスしき！」は一つ心中でスケッチをば……。

じ～。
じ～。

じ～～～……「カツ！！

「ギョウ わつ！」

「目が怖い」

力チヨーの缶ビール攻撃がオーデコにヒット！ 冷たいし角で痛い
つてええー！

しかしそれよりも喉仮ガン見してたから目が乾いてシバシバする
う！ うわー、目が、目がああーっ！ 痛がりながらもこのセリフ
が使えたのは満足デスつ！

つてえ、そうじゃなくて！

ダッシュで洗面所に飛び込んで、使い捨てのコンタクトレンズを
むによんむによんと両目から摘んで取り出した。

使い捨てソフトコンタクトレンズを使い始めて丁度一週間。大分
慣れましたが、どうにも乾きやすいデスネ。萌え対象をじっくり観
察するときなど何度カピカピしたことか！ そりや瞬きすればいい
だけの話ですケドねーっ！ ついガン見しちゃうのデスヨ！

おおっ、そうだ丁度いいから風呂入りますかっ！ 居酒屋という
のはどうにもこうにも髪の毛や服にタバコの臭いがついてイカンの
デス！ 洗面所にはマイパジャマとか入れていい袋があるので、イ
チイチ二階へ取りに行かずにすむのだ。

サーモンピンクのアンサンブルに白いふわふわのフレアスカート
を、ぽぼーいと脱ぎ捨ててさあ風呂場へれつづらりー！ と、扉へ
手を伸ばしたとき

ガラツ。

洗面所と廊下を隔てる引き戸が開いた。

「……ああ、風呂か。ならいい」

ガラガラ、ドン。

- 6 -

「力チヨー！ 何するんデスカーツ！」

風呂場にびよいと入り、ドアの隙間から顔を出して猛烈抗議テス！

「洗面所に駆け込んだから、どうしたかと思つただけだ」

— 一 論 文 集 の て こ と —

「 して言えは色氣が足りない」

一
ち
こ
か
う
！
！

まさかの「注意テスヨ！ 謝罪じゃなくて、足りない所を指摘してくるとはなんたること！」

だけの頼りない現状は、どう考へても駄目テス不利テス無力テス。引き戸には鍵がついてないので、ガラッと開けられてしまえばオシマイですっ！

わーお、じうじつたドッキリビックリハプニングってベタだと思つてましたが、あるんですね本当に！まさか自分に発生するとは思いませんデシタ！

色々言いたい所でした가、私がアレコレ考へている間にカチヨーの足音が遠ざかつていきました……。くつ、後で見てるよっ！！

髪をガシガシ洗つて、メイク落として、体を洗つて。
湯船にとぶんつと体を沈めてやつとひとじうちテス。はー、きんもぢええくな。

……。

あ。

不意に先ほどの手を繋いで帰つたのを思い出しまシタ。

二つ妄想したシチュエーション。どちらも「心配して迎えに来る」というもの。だつてカチヨーが帰り道にいたんだもん。いたから……。

……。

ほら帰るぞ

帰るぞ……？ という事は、やつぱり？ まさかもしかしてひょつとして？

手を繋がれた時も、ちょっとぴりそう思つたんですけど。カチヨーつてば私の為にわざわざ迎えに来てくれたのでしょうか。夜道を心配してくれたのでしょうか。

いやいや、今まで。単に悪い違いかもシレマセヌ！ 早計は禁

物デス！ きっと何かのついでに外に出て、たまたまワタクシめを見かけただけかもシレマセヌ！

でも、あの繋いだ手があまりにも。

あまりにも、心地良くて。

ぐーるぐーると弾はずせて、すっかりのぼせてしまこマシタ……。

まさか！ んなこたーないだろ！ 的な。（後書き）

お待たせしました！ そしてお知らせトス！

只今「妄想部」活動中。コラボ作品が出来上がりました。

私がある意味全て絡んでますけどw

力チヨーと腐子が出演（？）しているのは「動物捕獲大作戦」！

1~5まであるコラボ作品、順番に読んでいくのがオススメですw

こちらからどうぞ

<http://mypage.syosetu.com/1445>

26 /

寂しい朝はイモムシでっ！

朝。

起きて一階に降りたらそこにカチヨーは居ませんデシタ。

あれ？ 何かあつたのでしょーか。今日は土曜日。どこか外出するとは特に聞いておりません。ああつ、でも昨晩ワタシはのぼせてしまい、ぽやんぽやんしたまま「おやすみなさい」と寝ちゃつたので、聞かなかつただけなのかもしけまセンが……。

しんと静まり返つた部屋は、妙に居心地が悪いというか、居ると思つていた人がいないと、こつも……広く寂しく感じるものでしょーか。

はつ！ ひ、これはもしかして、『カチヨーが元妻に出て行かれた氣分』というやつを今まさに味わつてゐるのではないかあつ！ ソウデスネ、ソウデスネ、カチヨーはこんな氣分でずっと過ごしていだのデスネーーー！ なんてカワイソウなのでしょーーーかつ！ つてえ、までまで、までーーーつ！ ワタシ別に妻じゃねえし！ 単なる人質^{ゲンコト}盾^{シモズ}に取られた僕なだけデスカラーハーーーッ！

ふと湧いた変な気持ちがむず痒くて、払拭するためリビングをイモムシの「ごとく、いやいやイモムシ転がりませんがともかく」ロロロ転がつてアツチにぼーいと追い払いマショーハウウ！ うおりやああつ！

往復すること一十回。流石に息があがりマス。ふう、でもなんだ

かスッキリー！

とりあえず茶でも飲むかと台所に行つたら、そこに書置きが。な
になに？ 本日休日出勤デスカ、なるほどなるほど。そら朝いない
わけデスネ。つーか朝起きれなくてスンマセンでした……。
はー、相変わらず達筆デスネ！ 賢そうに見えますよ！ カチヨ
ー充分賢いだろうになに達筆オプションまであるんデスカねつ！
ああやだやだ能力チートつて！ あ、でもバツ一で三十一歳だつ
た。アハハハ。私からしたら九つ上などオヂサマですーん。

おおっ、でも若手を可愛がる年の差系のBしならば萌えマスねつ
！ 新人バイトをアレコレ教えるうちに……？

妄想を開拓しようとしたら、携帯のメール着信音がテンテレテ
ンと聞こえてきた。うむ、これは乙ゲー、つまり『乙女の為のゲー
ムで、逆ハーレムになる展開が訪れるイケメンだらけの恋愛シユミ
レー・ショングーム』その着メロなのデスッ！ この着メロのカテゴ
リは萌え友。つまり私が所属するサークル『BARA たいむ』関
連なのデスよー。

ぱかーんと携帯を開けてみればそこに表示されたのは、ぬわんと
……リーダー！ きやああーっ怖いいいいつ！

い、いやいや。締め切りは確かに来月アタマだつたデスヨ？！ そ
して仕上がりマスから、こんな怯えるこたあないのデスつ！！
恐る恐るメールフォルダを開けると。

『パラメイターりりい 様、お疲れ様ー。ゲンコーデう、順調
？ ちょっと頼みたいことがあるから時間いいときに電話下さい。
ばーい 愁堂 芙妃都』

ちょっと頼みたい事……むっちゃ怪しいい！ イヤな予感ビ
ンビンですよつ！ この人の頼みつて今まで良かつたこと一つもあ

りましょんっ！！

しかし返信しないと、より恐ろしい目に合いますので……。あ、
そうだ！ 見た目ビューリホで、普段病院受付業務をしている彼女
ならば、今私が置かれている状況を相談できるかもデス！

早速電話をしたら午後駅に用事があるとか言つてましたので、会
う約束を致しまシター！ いつもしちゃいられない、洗濯などなど家
事をこなして出発デス！

寂しい朝はイモムシだつ！（後書き）

妄想部

http://m y p a g e . s y o s e t u . c o m / 1 4 4 5
2 6 /

「5」は腐子もカチヨーもでてますよ

バラメイターつい、リーダーから指令テス！

「……おひびいた！ りりいたんはいつからそんなメタモルつたの？」

私を見たリーダーの第一声は、ぽかんと開いた口から発せられました。

メタモルつた、つまり変身したって仲間内の暗号^{メタモルフォーゼ}デス！（暗号と
いう程でもアリマセンが）

本日の私の服は、これまた『丁寧にあのメモに書かれていた番号『三』、『新緑がヤキモチ アナタにゾッコン』……という、若干年齢層が知れるコメント付きのコードティネートです。なんだよヤキモチするのか新緑が！ ウツカリ突っ込んでしまいマシタが、毎度こんな「メントに揺さぶられるのは何となく面白くない」デス。華麗にスルーするのが、社会人つーもののデスッ！

「いやあこれがまた深いワケがありまして……あつ、そうだ！ 電話で聞きそびれちゃつたんですけど、頼みたい事つてなんですか？」

ゴニョゴニョ誤魔化しつつ、先にそちらを言つてもらいまじょつ！ 何か気になつて仕方ないデスよ。

駅近くのファミレス。ケーキとドリンクバーのセットを頼み、コーヒーを取りに行って席に着く。サークルメンバーとの打ち合わせにもよく使うこのファミレスなので、勝手知つたるともいえマスね。一口ズズッとコーヒーを啜れば

ん？ まずいデスネ……。

うーん、まあいいか。

顔を顰めて飲む私に向かい、リーダーは話を切り出した。

「あのね、実は原稿の締め切りを早めたいのよ」

「ブブーッ！」

「わつ！ 汚いつ！！」

「なななんんでー！ なんで早まるんデスカーッ！」

「端的に言えば印刷所の都合、かな。表紙カラーの中身オフセット印刷で頼んでたんだけど、どうも大手サークルがねじ込んできたみたいなのよ。それによって、弱小な私たちがはじき出されたって感じね。でも早ければ充分間に合つし、どうかなと思つたんだけど……」

あわわ……あわわわ……！

無理ですよ、無理ー！ リーダー——アアアツ！

ワタシつてば遅筆だから、とってもとっても前から始めて、ようやく完成したんですものっ！ アレをもう一度書けと言われたつて無理ですし、手つ取り早い方法もありますが……。

「う……ううう……リーダー……うわあああんっ！」

半べそ書きながら、原稿は出来上がっている事、しかしそれを上

司に見られてしまった事……内容もまさにこの上司がモテルなのも痛いポイント。そしてそして、一ヶ月家事手伝いの住み込み条件で原稿の事は黙つていろし返却もしてくれると約束してしまった事……。

「ゲッゲッ……」

「ゲシゲゲシのザー？」

「ちっがーううつ！ ゲンローは、締め切り間に合つからいつかなーと思つてこマシタので、そのつ、締め切り早まると……！」

「落ちるわね」

「ノ――――――ウウウ――！」

私は頭を抱えてファミレスのテーブルにゴロゴロおでこを擦りつけた。傍から見たらさぞかし奇怪な行動ではあるけれど、そんなの気にしてられませんッ！ ああ、どうしようワタシのげええんこおおおお――！

「で、その課長とやらはイケメンなの？」

「はい。それはもうビックリするほどイケメンです

突然リーダーが身を乗り出して私に質問をしてきた。間違いのない事実に間髪いれずには返事をする。すると……せりひた体をこじり寄せてきマシタ……ななな、なこ、なこ？！

「属性は？」

「私の見立てでは俺様ドSかと……」

にやり。

リーダーの「角が それに見事に上かりましたよー！」
ヤーーー怖いーいいい！ キ

「それはそれは……。ねえりりいたん？ その締め切りなんだけ
ど、それなりにツテはあるから別の印刷所に回すという手もあるの
よ。りりいたんの原稿返却待つてあげてもいいわ。それには条件が
あるわ」

ひ――――――！ ここにも来たよ条件！ なんだよどういうこ

一人内心ガクブルしていると、リーダーの手が私の手をそつと握った。

「思いつきり観察記録つけて、私に頂戴」

「か、
観察記録……」

じ、
実はもう付けてますけどね！

「私、その課長に興味あるわ！ たまに指令もするからアロシクね、りりいたん！」

田をキラッキラしながら私の手をぎゅううつと掴むリーダー。ああっ！ そうテシタ……！ リーダーの好みは「俺様系」、書く漫画もま・さ・に・そのまま俺様がめくるめく愛の世界を築くのデスッ！ カチヨー、どんぴしゃじゃないでショーカツ！！ ぎや

ああああつー！

こうして、私は前門の虎後門の狼状態でミッションに励む事になつたのです……はあつ。

バラメイターつい 、リーダーから指令ナス！（後書き）

妄想部

http://mypage.syosetu.com/1445
26/

「5」は腐子もカチヨーもでてますよ

「お帰りなさいませご主人サマ」

「……………ど、うつた

どうしたもこうしたも。いえね、リーダーの指令はまず『三つ指突いてお出迎え！ 亭主関白な夫を迎える新婚妻初級編』ですので、フリフリエプロンも着けて玄関で正座してお帰りなさい！ のご挨拶デス！

カチヨーは玄関のドアを閉めることすら忘れたように私を見てましたが、そんな事は気にせず次のテンプレをば……。

「えーとなんでしたっけ？あ、そうやつー。『お食事になさいますか？お風呂になさいますか？それとも、ワ・タ……』」

「風呂」

途中で遮り、サッサと玄関上がりダンダンと足音立てながら風呂場に力チョーは直行つ！！

えー、ええーー！ 最後まで言わせてくださいサイーーーっ！！！
て、まあいつも会社帰りには先に風呂なんで織り込み済みではあり
ましたが。

エプロンからメモ帳を取り出すワタシ。ここには指令と共に、力チョーの行動を書き込むスペースがありマス！ 力チョーは最後ま

で聞かずに風呂場に行つた、とメモメモ。んでは次……食事の用意一。今夜は豚の冷しゃぶと、ナスとジャコとししどうの煮物、牛蒡と人参の金平デス。出来立てじやなくとも大丈夫なので……それは何故か！ 何故かっちゅーとーう！！

ノゾキ指令。

決して威張れる事ではありませんが、彼氏いない歴二十一歳でB
し描くのはつまりそういう場面を上手い事想像できないのデスよね
！ しかもおお！ 腐女子な先輩たちが進めてくださる『バツチリ
見えてますよ！』的な雑誌やビデオ類は……きょ、きょわいつ！
きょわいよーおつかさーん！！ 三次元はより一層イケナイ世界デ
ス——ウウツ！！

一瞬だけ見ちゃいましたが、目を回して正視できませんテシタ
。あひつ。

しかし……カチヨーのなら見てみたい。うん、カチヨーのなら『アリ』デスつ！

どうしてそう思えるのかは全くワカリマセンが、清水センパイでもなく、マメ橋センパイでもなく、力チヨーなら。

抜き足差し足忍び足……。

シャワーの音が聞こえるこちら洗面所の前一。洗面所前デース。
ふふん、奴さんは何の疑いもなく体を洗つてらつしやる！私は
正統派覗きとして、音も立てずに引き戸をスススと開けた。うむ、
練習したかいがあるつてもんデスね！

風呂場の扉はうすらシルエットがわかる程度のくもりタイプの樹脂パネル。そして下部には換気口がついておりまして（チェック済みデス！）そこから覗いてみようと思いむわっす！！

両膝付いて、顔を床にこすり付けるようにして換気口に視線を合わせようとしたその時

「祈りの時間にしては場所がおかしいな？」

僅かに扉が開き、カチヨーが顔だけをこちらに出した。いやもう出たつて言っちゃいまシタが、私はカチヨーがいるのわかつて來たんだから出たーつて言うのはおかしいじゃないかあーつ！ といふ血口ツツ「ミは即座にシマシタがつ！

つてか！ までまで、 ややや、 ヤバイ！ ヤバイデスヨー！！
私つてば視線を上に向けてカチヨーの顔に呑わせたから、 下に戻
しづらいデスううう！！ だつて、 だつて、 くもりタイプだから…

つむ、一ひは一つ腹を括つて！

「力チヨー！」

「なんだ」

「ぐり、と一度喉を鳴らす。ビチャビチャに濡れたままの力チョーの髪が、なんとも淫靡な雰囲気を醸し出してより一層ハアハアものテスよっ！！ よし、言つぞ！

「裸見せて下サイ！」

「いそ」

ほらやつぱり駄目デスよね、すぐ断るとおも……つてえええ！！
チヨチヨチヨイ待つてー待つてー！！ おつけーなのデスカーつ
！！

脳内大バーゲンなワタシ。あわあわしている内に扉が開き……。

「やつぱり無理——い——」
「あー——！」

田をギューッと瞑つたままワタシは立ち上がり、洗面所のドアを指して身を翻したら

ゴッチーーーン！

そこには壁がありまシタ……。

プリプリプリンセスの変身……エリエッシャねえテス！

パチッと目を開けたら辺りは薄暗く、天井らしきものが見え……えー、なんでしじう私寝てマシタ？ 仰向けのままぼーっとしていたらドアの音が。音を立てないように慎重に開いている様子が聞き取れますネ。私がそちらに顔を向けると、起きている事に気付いたのか音に気を配るのをやめ近づき、私の枕元で胡坐をかいた。

「痛みはどうだ」

「あつましょん、かちょお」

ああそうだ。私ってば洗面所で壁に激突したんですね！ テンパつて目を瞑つたまま勢いよく突進したからめっちゃ星飛んだわー！ オデコに手をやると、そこにはタオル地の少しヒンヤリとしたモノが当たられてました。

「こいら触るな。中を取り替えるぞ」

カチヨーは私のオデコに乗せていたものを取り上げ、なにやらガサガサやっている。ちょ、ねえナンデスカこれまつてー！ カチヨー、レジ袋へダイレクトにインしてますよ氷！（英語デキマス！）私はスーパーで貰つたレジ袋は一纏めにして台所の片隅に溜めている。多分それを使つたんだと思うのデスが……なんというか大胆！ なーんて思つちゃいまシタ。いやでもカチヨーが冷却シート持つてるとも思えないし、ある意味臨機応変と言つべきなのでしょうか。

「イタタタタタタッ！ カチヨー撫でないでええつ！！」

「こら動くな。たんこぶには冷やすのが一番なんだぞ……ククツ」

氷を入れ替えタオルに巻き私のオデコにそっと乗せたカチヨーは、私のオデコを見て小さく笑った。ちょ、まつて、私どんだけ？ どうだけレベルのタンゴブなわけデスカ？！

「カチヨー！」

「なんだ」

「そもそもカチヨーが見てもいっていうから悪いのデスッ！」

「そもそも、か。ではそもそも洗面所に入った理由は？ 土下座ポーズをしていた理由は？ 裸を見せろと言ったのは誰だ？ そして そもそもお前がこの家にいる理由はなんだつたかよく思い出せ」

「ギャー！ もうカチヨーなんて俺様じりであればいいんだコンチクシヨー！ だからごめんなさい！」

ガバッと布団を被り、イモムシに変化デス！ ああもう絶対敵うわけないのデスよカチヨーめ！ ……つてえ！ わああああっ！！

「カチヨー！」

ガバッと勢いよく布団をめくり、上半身を起し一すつ！ オデコに乗つてた冷たいのは左手で押さえてあります！

「なんだ」

「何で私パジャマ着てるんデスか？！」

「布団に入る時は着るものだからな」

私はバンバンと布団を叩きながら猛抗議デス！ 大体これで何度もシヨーカ！ 平日も寝オチしている事が二度ほどありますて、その時もパジャマに変身してました！！ うわー！ ワタシ魔法の少女になつたのねー！ プリプリ／＼プリンセス つてー！ んなわけあるかー いっつー！

「問題はそこじゃねえテスよつ！ 毎回不思議に思つてつていうかすぐ忘れるワタシも悪いのテスガつ！ 今日といつ今日は言わせてイタダキマス！！」

「ハイハイ」

うわー！ 明らかに適当返事——つづ——もつこいつなつたら分からせてやらねばならんのデスよつ！

私は身を乗り出して、カチヨーの眼前に迫った。何故かコントラクトも外されている為に視界がぼやけちゃうからねつ！ しつかり両目を合わせて言い聞かせましょう！

「カチヨー！ しつかりワタシの目を見て下サイ！」

10

「逸^{アハハ}りてひや駄目です。じつはワタシ全身服が変わっているのかつてこいつのを教えてトサイツー。」

「仕様だ」

「意味わかんないデスヨー。」

「じゃあこれなら…。」

「ふむ……？」

まず感じたのは柔らかさ。そして次にやってきたのは温かさ。

ナニ。

ナニマジ。

視界一杯に広がるカチヨーの顔。近い近い近い！って、近いどうろか……唇、当たつてますがな！！

ナニナニナニナニナニ？！ ちゅちゅみゅみゅみゅ？！

そつと顔を離し私のほっぺたをひと撫でしたカチヨーは、内心大恐慌のワタシに「堪えられなかつた、すまん」と言い残して部屋を出でいった。

な……！

ねえちよつヒー 誰か！ 誰かワタシにAI機能クダサイ！ 思考停止デスつ！！

「んなワタシでも眠れません！」

かんつぜんに寝れませんデシタ……。

深夜、とはすでにいえない朝の四時。外はまだスズメすら鳴かない真つ暗な窓の外、悶々とした頭を一つ振つて、いい加減寝るのを諦めた私は眼鏡をかけて……そもそもそと布団から出る。

つーか！ 寝られるわけねーデショガーーー！ 口の周りにある上下に分かれた少し厚くなつた皮膚、つまり唇が当たつたんデスよ？！ これつまり世間一般で言えば『接吻』というものじゃないのかーーー！ 接吻て、だからつまり唇同士がくっつく事デスよね？！ 口の皮膚……ああもういいや堂々巡りデス。ハツキリ認めればいいんだけども、まさかこいついう事が我が身に起じると考えていなかつたので。

Bレならばいくらでも妄想してますけどねー！ エーと、エーと、急いで走つた曲がり角でどしーんと誰かとぶつかつた拍子に唇が触れてしまふとか！ つて、あー！ もうっ！！ ダメダメ駄目デスよーーー！ ベタもベタでベツタベタしか思いつかないっ！！

頭をバリバリ搔き篭つて枕にパンチして掛け布団をばーーーーと放り投げて、窓を開けて「わーーーーー」とやりたいっ！ いや流石にまだ朝四時では近所迷惑なので最後だけはやりませんでしたけどもね。

そんなこんなあんなをやつても落ち着かない。どうせ元もこち落ち着かない。ああ駄目だ駄目だ！ よし、こんな時は声に出すより文字にするほうがいいと聞く！ 早速実践デス！ 紙を取り出しちゃう。

て、小さな机の上に思いついたままを書いていく。

* カチョーは「うして私にせつぶん（漢字難しいデス！）した
のでしょーか！

? ただ単にぶつかつた

? 私の口に「ヨミ」がついていて、カチョーは口で取るのに挑戦した

? イヤガラセ

? 罰

? 懲らしめる

? のののののののの

つだ――――――！ やめやめっ！―― 無理だよ無駄だよ無謀だ
よ！

こんな想定外なのは、私の脳みそキヤパ大きくはみ出して納まり
ませんカラーッ――！――

再び布団に突つ伏して顔にギューンと枕を押し付けた。うをを…
…黙だ耐えられそうにないデス……。

はつ！ そうだ！！ リーダーならばきつと……乙ゲー（乙女用
恋愛ゲームの略デス！）マスターのリーダーならば良いアドバイス
をいただけるかもしませんっ――！

この朝方でも絶対起きてマス！ それは何故かとおーいえばあ
つ！ 実はという事でもないのですが、リーダーは実家暮らし。家
族に邪魔されずに萌え萌えする為、完徹でゲームをやっているのが
彼女の休日スタイルなのデス！ サミシイとか言つたら彼女にシツ
レーなのデス！ だつて、画面の向こうで甘く囁く彼がいるから、
リーダーは幸せなのですカラーッ――！――

メールをポチポチ押して、こぞ送信！

ブホー、ブボー、ブホー……

早つ！返信早つ！！

マナーモードにしてた私の携帯が、ブルブル震えてメール着信をお知らせ。かばーんと開封すれば……

邪魔すんな 用は何

キヤ————！こわ——————いっ————！
めつちや機嫌悪——————っ————！
急いで返信デス！

力チョーと同士がくつきました！おそらく事故ですが相談をば！

そうしーん！……ブホー、ブホー、ブホー……
つて、早————！

至急 ファミレス 集合

まちっすか！いやほんとまちっすか！！
決断はええー！いやでもこのレスからしてソックー行かねば酷い目に合ひテスよ！
過去にコスプレさせられて、イベントの売り子せられたりね
！じつぱすかすい————！

しつかし、こんな朝からバタバタ音立てるのは寝ているであろう力チョーに申し訳ないデスね。静かに身支度を整え、そつと玄関を

。タシメ压

涙なくして語れましょんっ！

「で？ 何があつたわけ？ ほら、早く言いなさい！」

「せ、せめてカツ丼を！」

愁堂茉妃都、つまりワタシの所属するサークルリーダーは、睡眠不足のギラギラした目とやけに乗り気な相談内容にずいいーっと身を乗り出した。ちょ！ 「ええよリーダー！ これは何デスカ？！ 自白強要取調べデスカ？！」

ひいいつとのけぞりながら昨晩我が身に起こった出来事を、血液の温度が急上昇するのを感じながらリーダーに話した。

「ふうん？ 美味しいシチューね。ふつふふつふふふふ……」

キヤーー！ リーダーに火がついたあああーー！

私は上がった体温がひゅうつと冷えて、ガクガクしながら紅茶が入ったカップを持ち上げて飲み込む。いえ、コーヒーまずかったのでね！ なんだか力チョーの味に慣れてしまったのデスよ！

つてー！ リーダー、その手元スンゲー怖いですからつ！ 何といふか……あれば、自動書記の様に見ないでメモをとつていい姿、かなり通報モノです！！ ドン引きデスヨほんと、これじやテープル席で向かいに座っているにもかかわらず『ワタシ タニンデスマタタマ アイセキニ ナリマシタ』って態度取りたいですよ全くう！

一通り書き終えたリーダーは、ガシリと私の手を握る。

「なんて素晴らしい環境にいるのりりいたん！ 体を張つてこんな展開にもつていけるなんて……っ！！ ふふつ」

「体張つてませんし、わざと展開なんにしてしまえーーん！」

わーん泣きたいよおお。そもそもリーダーがノゾキ指令をするからじやにやいか！ んもうーつ！

カチヨーの行動の意味を、二次元でも三次元でも恋多きリーダーに早く解説してもらいたいのにー！ ぶーぶーふて腐っていた私を、ひとしきり書き終えて手帳を畳んだリーダーが「まあまあ」と宥める。

「私の見立てでは……あ、ちょっと『メンね？ んー、知らない番号だわ』

リーダーが着信を知らせる携帯電話を持ち、ファミレスの出入口付近に向かつた。リアル世界のリーダーは病院受付嬢であり、正直な所『腐女子』というのがありえない美しさの持ち主なのデス！ 中身あんな腐ってるなんて誰も信じませんで！

明け方のファミレスは客も私たちの他一組しかいないくて静か……なので、リーダーの電話の声がかすかに聞こえています。なになに？？

え？ あ、でも……なんつー！
はい。……では失礼します。

通話が終わり、席に戻ってきたリーダーは真っ青な顔色をしてい

た。うわ、ナンダどうしたのだ！ ひょええ！ 座つてからもじつと「コーヒーの入ったカップを両手で持つて、水面をじっと見ながら動かないリーダー。

「 つりい、アナタ恐ろしい子！」

そして、やつと口に出したのは有名なセリフだった。え、なに今 の電話つてもしかして私関係あるのデスカ？！ そう尋ねると、リーダーは「 いこと？」と幾分血の気が戻ってきた顔を上げる。

「 齧が当たった いえ、それはもうキスと認めればいいの よ。 そう、 そのなのよー えーっと、 その課長さん？ バツイチつ て言つてたけど……」

と、リーダーは頬に手を当て指でトントンと叩く。その美しい眉を顰めていたけれど、急にパツと顔を輝かせて「 そつだっ！」となにやら思いついたようだ……。うひょー、嫌な予感ビンビンですよ？ じりやちゅいつとロクでもない事になりそーだよ？？

「 ねえ、 つりいたん。 課長さんからのキスつて気にしなくていい と思うわよ？」

「 へつ？ー」

気にしなくてつて！ アレ気にしないつて無茶じゃありませんか いーつ？！

「 そり、私の推測ではね

」

* * * * *

「 とこり聞よ

「グスッ……ひつ、ひつく……わ、ワカリマシタ。私、頑張りマ
ス」

リーダーの語る話に、あとから後から湧いてくる涙を止められない私。そうか、それならしようがないよ。

目と鼻を真っ赤にした私に、リーダーは優しく頭を撫でてくれた。

「ほら、早く家に戻りなさい？ 課長さんご黙つて出てきたんでしょう。きっと心配してこるわよ」

「そつ、そつテスネット！ 帰りまっす！ ああつ、本有難うござ
いマス！」

そう言つて持つてきたキャスター付きスージケースに本を詰め込む。次の回の同人本を出すための参考資料やリーダーお勧めの萌え本コレクションを借りた為、重くて手持ちバッグじゃ無理だわ。

「じゃあ、気を付けて帰るのよー。色々気をつけ……」

色々つてナンデシヨ？？

謎の言葉を残し、カチヨーのおうかくと戻りマシタ。

朝チョンパーーはキケンなカホリ、デス！

ゴロゴロ……とスースケースを転がしながら家に帰還！ うわあ
やけに朝日が眩しいデス！ スズメがチュンチュン鳴いて……
はつ！ こ、これはまさに朝チョン？！ って違うな、アレは布団
もしくはベッドの中で情事の後気付いたら朝だつたというくだけが
あつてこそだ！ いや今の私は『朝帰り』状態デスネ！ キヤー、
ちょっと待つて！ そうだよ何かおかしいよ私！
ふー、一回落ち着こひ。待て自分。落ち着け自分。すー、はー、
すー、はー。よしつ！

時間を見ようと携帯を開いてみたら……きゃ！

着信

六件……！
ちょ、まつてー！ 全部カチヨーからですううううつ……なな
ななにーーーーー！
あれあれ？ 気付かなかつた……つてー！ そうだ私マナーモー
ドにして、バッグに放り込んでいたから分からなかつたんだわー
あああつ！

えーと、待て待て。何でこんな電話してくることがあつたのか?
確かに夜、カチヨーにキスされて眠れず、朝コツソリ家を出た。
うん、確かに心配になるか？ えーと……あー やつべ、やつべ、やつべ、
やつばーーーーー！あのメモ、机の上に置きっぱなしデスヨー！
あれひょつとして、書置きとか……勘違いされてません……よ、ね
？ いやいやまさか。まさか。ハハハ……。

ビクビクしながら玄関の鍵を取り出し、差し込むつかといつその

時

ガチャヤ、ゴチーーンッ！

「ニギヤああつ！」

内側からドアが開き、私のオデコにクリーンヒット！ ギャー、
ここ、ここ、昨日たんごぶ作ったトコロー！ オデコ押されて叫ぶ
私を力チョーが軽く目を見張り、やがてホツとした表情を見せた
つてえ！ ギヤああつ！ その顔反則一うう！ うつすら鬚が生
え、髪も整えていないからワイルドさがプラスされて、こう……よ
り一層男性的魅力が溢れて、溢れて、ダダ漏れで……！ わああつ
！ 無駄遣い禁止ーいいつ！（意味不明）
と、とにかく帰還の挨拶をば！

「力チョー！ ただいまです！」

「お帰り」

おおお？ なんでしょう、やけに優しげな声デスヨ……！
家に入り、ひとまずスースイケースは玄関のたたきに置いておきま
して。

あ、そーだ！ ちょっと機嫌よさそうな力チョーにお願いしちゃ
おつかな！ ファミレスで違和感を感じてから、どうしても力チョ
ーに頼みたかったのだ。

「かちゅお、お願いがあるんですが

「何だ」

「『コーヒーが飲みたい』デス！ カチヨーの淹れてくれたコーヒー、一番美味しいですからつ！」

「……やうか

手をグーにして力説すると、カチヨーは「待つてろ」と私の頭をぐしゃっと撫でて台所へ向かった。私も作る所見てみたくて、その背中を追つていくる。

「わ、またタバコ…」

思わず豆を擦ったね！ デジャヴかと思つたわあつ！ お湯を沸かしつつミルで豆を挽くカチヨーはこちらに豆をやるともなく「気にするな」と、粉になつた豆をドリップしていく。

あー、いい香りデスネ……いい男、しかもちょっと『ワイルドエッセンス』がプラスされていて、むっちゃ色氣モレモレでコーヒーを淹れる姿つて……鼻血ブーものデスねつ！

つてえ！ そうじやない。いやタバコの山氣にするなつて言われてもー！ 止めるのヤメタにしても程度つてモンがあるでしょがつ！

「 でじや、ないんだな？」

「 へいっ？…」

カチヨーが、立ち上る湯気の向こうから私に尋ねた。聞き取れなかつたので変な声あげちゃいましたヨー。

「……家出じゃないんだな？」

今度はシッカリ聞こえましたとも！ イエース！

「やはり誤解されちゃいまシタかつ！ いやいや、ちょいとばかリデスね、完徹のリーダーに……いえリーダーとは私の所属するサークルのリーダーの事なんですケドも……お話がアリマシテ。カチヨー殿を起こすのはしのびないんで、コッソリと外出したのデスすんませんつ」

き、気遣い！ ザツツ 気遣い！ 日本の心は和の心デース！

ステキコーディネイトされたインテリアのこのお部屋。インテリアコーディネーターの友人ぐつじょぶ！ 四人掛けのダイニングテーブルに座っている私に、コーヒーを淹れてくれたカチヨーサマが二つマグカップを持つてテーブルに置いた。

いつもは対面に座るのに、何故か私の隣に座るカチヨー。私のほうへ横座りしてながーい脚を組む。

「あのスーツケースは？」

「えつ？」

カチヨーの質問は、恐らく玄関に置いたあのスーツケースを何故に家から持ち出したかつて事なんじょーけども。

「あのスーツケースは？」

「じ、尋問つ？！」

「あのスーツケースは？」

……くつ、質問に回答しない限り同じセリフが延々繰り返す気配
ツブンだああつ！

「あ……あは……」

「あれば？」

「趣味……の本を借りる為なの、デス……おおお重くて」

なんデシヨ……敗北感がはんぱねえ……。

色氣大臣となつたカチヨーを、ワタシは脳内でアレコレしてやる
う！と密かに反逆を試みたら、脳内ですらコテンパンに言い負か
されていた。ダメじゃんワタシ！頑張れ踏ん張れ、れつづらう！

「いやほらあのですねカチヨー、これは私の心のアンネイの為とい
いマスか……」

「心の安寧、か

そう言つて、カチヨーは私の顎を指でクイッと持ち上げた。

「ちよちよちよつ！ カチヨー？！」

「……心配した

田を眇め小さく呟かれたそれは、心から私を案じてくれていたんだ
と今更ながらに気付かされた。そりやそーデスよね。チューして
翌朝私イナーアジヤ……。

あれ？

ちょ、待つてよ。

まるで 力チヨーが
みたいじやないか、ソレ。

いやいやいや、まさかマサカありえんて。だつて力チヨーは……。

「わ……ゴホン。あのですね力チヨー！　ひ、人質、ん？　あれ
モノだと何ていうんだ？　まあイイデスヨ。とにかくゲンコ返し
てもう一ヶ月の間は出て行きませんでホント。あと約三週間、デス
が、まあ一つよろしくお願ひシマス」

そもそものキッカケなのデスヨこれがまた！

それに、生きたイケメンモデルとして私の妄想力の役に立つても
らいたいつ！　流石にこれはいえませんから心中で呴くだけに留
めマッスル！

「そ、うか」

私の顎を掴んでいた指を離したかと思つたら、そのまま鼻をパチ
つと弾いた。

ナニしやがるんですかいっ！ という私の抗議もむなしく全くの涼しい顔に戻つていい力チヨーは、私の鼻を打ちつけた指で今度はマグカップを持ち一口啜り、そして腕時計にチラリと視線を落とした。私はヒリヒリする鼻を擦りながらその様子を見て……。

ん?
時計?

「そろそろか」

「ほ？」

「いくぞ」

「は？」

言つなりカチヨーは私の腕を取り玄関へと向かう。

「ちよちよちよ、なななつ！？

どこへ連れてかかるの、ワタシつ！？

神な本を頂いたので「サライマスッ！ ひゅつほつー！」

家の外に出て車庫に置いてある車の助手席にポイと放り込まれ、「カチヨー！」と抗議の声をあげるワタシに、運転席に乗り込みながら無言でカチヨーは何かを差し出した。

ハテ、こりゃなんだ……。……う。

「~~~~~！」

ちょ、これっ、ね、わっ！！

声にならない叫びが口腔内にギリ留まりマシタッ！ う、うわああああっ！！

「幻の『平成男子校生制服 征服図鑑』じゃないデスカッフ！！」

マニア垂涎、萌えが詰まったステキ写真集なのですよコリヤ！

全国人気ランキング順に男子学生の制服を一冊の写真集に纏めたこれはすでに廃盤になつており、オークションでも数十倍の価格がつくほど超人気本デス！

B.L.同人本描くにあたり、参考に……っていうか、単に趣味でじっくり舐め回すように萌え萌えしたくて憧れの一品だつたのに、どうしてこれをカチヨーが！

「これでも見てろ」

「はあう……つー

どつして」これを、とかワタシに下さるんですか、とかもうそんな
小さこ事はまるつと銀河宇宙の彼方まで投げつけ、早速ページを捲
る。……「おお……た、まら、んつ……。

ページをガン見する私をよそにカチョーは車を走らせ、どこかし
らの建物の地下駐車場に車を多分止めた。そしてページから田を逸
らさないワタシの肩を引き寄せ、どこかしらに向かつて歩く。
どこだ、ここは？　なんて思いながらも私は全くページから田を
離せない。だ、だつて……若さ^{若さ}進る純情少年達がちょっととテレなが
らのポーポー、そしてさらに某有名私立高校の夏服冬服そして体
育着とステキなラインナップが並ぶのテス。目を離す隙なんてナッ
スイニング！

「袴田様、お待ちしておりました」

「ああ、頼む」

「異まりました」

ほつほづ、Jの制服はあの姉妹校と……！

「Jの制服」

「……一五一セントね、それから……」

「肩幅」うん、そこに書いておいて

途中椅子に座られ、なにやらアチコチ女性りしき人に触られ、
なんだか指も触られなんのJつちや分からぬいけれど私はそれど
ろじやない。

むつは！　やはり詰襟はいいな！　一切無駄を省きまたに集

団行動を意識した黒のそれは、ちょっと腕まくりなんかしちゃつたら若い張りのある肌がちょっと筋張つてたりして、そして日焼けなんかしちゃって……んぎやー！

「それでしたらラインは……」

「小さくて可愛らしいので、裾はボリュームを……

「卓上はこの様な……？」

「お田にちは……はい、畏まりました」

そして何やら周囲が静かになり、私は全てのページを捲り終えた。はあ、余は満足じや。

これは是非ともリーダーに萌えのおすそ分けせねばなりませんっ！ うむうむと一人頷き写真集を大事に胸に抱える。

「 出るぞ」

「 ほ？」

ていうか、ここドコでしょーか。

キヨロキヨロと首をめぐらせて、何の変哲もない……部屋？

私とカチヨー二人きりのこの部屋には壁一面の鏡が張られ、ハンガーラックが二つほど置かれていた。私の座る椅子の目の前にはテーブルがあり、ひとつは手付かずの、もうひとつは空になつたティーカップが置かれていた。

「あの、カチヨー？」

「ちょっと早いが昼飯だ」

「おつ！ 『飯テスカ！ 朝』はん食べてないしペコペコなので

すつ！」

ドアに向かうカチヨーに追いつくべく、いやその前にすっかりと
冷めた紅茶ではありますが一気に飲み干し、私もドアへと小走りに
向かいま　　おお？

カチヨーがまさにキヨトンとした顔で私を見ていました。

「かちよお？」

「いや、飲むんだなと思つただけだ」

「私は出されたものは平らげる主義デスカラ！」

両親に口すつぱく躊躇られたのですよ。おもてなしを受けたのに
それを蔑ろにするのは大変失礼であると。アレルギーでもない限り、
例え嫌いな食材でもありがたく頂きなさい　　。私の住む田舎で
は、隣近所が親戚以上のお付き合いがある為お呼ばれも多い。冠婚
葬祭関わる為田舎に嫁いだ母は最初からこの土地で生まれ暮らしま
したという顔をしているけど、ヨソから嫁いできた人だ。マナーに
関しては人一倍注意を払っていた。

なので、小さい頃から出された物はキッチンと食べきる。例え苦手
なシイタケだけの澄まし汁が出たとしても！（涙）

「そうか。いい主義だな」

「はいっ！　あ、でもカチヨーだつていつも私の料理、綺麗に食
べて下さるじやないデスカ」

食後の食器は、『飯粒一つ残らず綺麗に平らげてくれる。』たと
え少し失敗しちゃつた！　テヘ』みたいな料理でも。そんなお皿

を見るとメッチャ嬉しいのデスヨ。喜んで食べてくれる姿を想像しながら作る料理は、作りがいがあるのデス！

「……まあな。ほら行くぞ」

なんでしょ最初の妙な間は。まーとにかく飯！飯！

お皿いり飯はおふれんぢタシタ！

大事に大事に『平成男子校生制服 征服図鑑』を胸に抱えて歩いて、エレベーターに乗って、歩いて、歩いて……。

広くないデスカ？　ヒー……。

ふかふかの絨毯が敷き詰められて、少し慣れたとはいえヒールのあるパンプスを履く私はウツカリ転びそうになりながらもカチヨーに付いていく。

ようやく立ち止まつたと思つたらわーお、おふらんす料理デスカ！　やつほーい！…………ん？　まで、まで。ちょいとまで。

建物の中にこんなお店があるなんて何だか不思議デスネ？！　しつかも妙にピカピカしなすつた調度品、そしてやけに色々隙のない動きをする偉そうな人がカチヨーに挨拶をした。

「お待ちしておりました袴田様。それではこちらに」

じちらにと言つて案内を、これまたロボットみたいな動きでスマートに先導するお店の人引き継いだ。うを…………なんつーか私こんな世界シリマセン！

正直生まれて初めてなおふらんす料理。ててててーぶるまなあつて？！

ガクガクふしげな踊りをしながらテーブルにようやくたどり着き、椅子を引こうとしたらスマート男子がさりげなく引いてくれた。

ほつほう！ 「リヤ悪いねっ！」

そうありがたく思いながら、しかし座るタイミングがイマイチつかめず、中腰で固まっていたらカチヨーが私の両肩を持つてドンと下に押した。そしてすとんとこれまた絶妙なタイミングで椅子が押される。

なーいすポジション つてえ！ ちょ、カチヨー！ 強引だなおいつ！

カチヨーは私の向かいの席にそれはそれは自然と座り、差し出されたメニュー表？ を見て私からすると宇宙語を言いなすって、それから私にもメニュー表を見せてくれた。

読めにやいし！

何らかの文字といつのは分かるし、ここがおふらんす料理のお店つてことでフランス語なのかなとかその程度は分かりますがね！ 無茶振りするなってんデスヨ…！

早々放棄した私を、カチヨーは「ああ、読めないのか」とわざわざ傷口に塩塗つて下さった！ キー！！

「牛と豚と鳥、どれがいい？」

「ちょ！ カチヨー、いくらなんでもレベル低くしそぎじゃないデスカツ？！ 牛で！」

「ローストビーフかフィレ肉のポワレ、どっちがいいか？」

「ローストビーフで！ 大体ポワレってなんデスカ？」

「焼いたものだ。蟹の冷製スープかコンソメスープのパイ包み、どっちだ？」

「ね、ちょっと答えにしては簡潔すぎまセンカツ？！ パイ包み

！ 絶対つ！」

「デザートは生ケーキの他に……ブッフェがいいか？」

「え、一杯食べたいデス！」

思いました、とお店の人気が去つていったところでハッと思付けば、どうやら反射的にメニューを選んでいたらしいワタシ……おおつかしいなあ？！

首を捻っている私をヨソに、カチヨーは最初のやけに威厳のあるおっさんと何やら書類っぽいのを見ながら会話をしている。

「いや好都合テスネ！ 私は実は気になつてますよ、あのスマート男子！ 妄想力がじわじわキテますよ？！」

『 』 今夜、貴方を料理して差し上げます

僕を閉店後の店内で待つように指示を出したのは、若くしてこのフレンチレストランの料理長となつた彼だつた。その彼は何故か僕のタイを緩め、冒頭の言葉を囁いたのだ。

「ちょっと待ってください！ 一体何が？！」

分かりませんか？ とでも言つようて彼は片眉を綺麗に上げて、硬直している僕のブラックカラーシャツのボタンを上から順に外していった。

「私はね、貴方が面接に来たその日から目をつけっていたんです。そうですね、俗な言い方をすれば一目惚れとでもいいますか

「ひ……とめ？」

呆然と成り行きに任せていた僕は、ゆっくりと鎖骨辺りに唇を這わしながら見上げる彼の目に釘付けになつた。ギラギラと情欲に溢れるその目はやけにはっきりと僕を映している。ああ……僕は……』

『 』

「も、つつ……」

「顔が溶けてる。妄想から戻れ阿呆」

「ちよ、神本かみほん……つ！」

力チョーは脇においておいた『平成男子校生制服 征服図鑑』の、背表紙じやなく角で私の頭を打ち付けた ってええええつ！ あ、ありえないっ！！

「ひよわあああつ！ 本がああつ！！ その上力チョー！ 私の頭が陥没したらどうしてくれるんデスカツ！」

「一五一センチが一センチ減った所で誤差の範囲だ」

「くうつ！ 一センチを笑うものは一センチに泣くのデスよつ？！」

「俺は別に困らん」

「うわああんつ！」

ぜつて一敵わないつ！ 全く歯が立たないつ！

くそ、いつか反撃してやるうううつ！

そう心のメモ帳に油性マジックで裏移りしながら書きとめたところで、前菜が並べられた。

「わあああつ美味しそう！ いつただきまーす力チョー！」

たつた今思つていた事などぽーーーいつとつちやり、いそいそと食べ始める私を、力チョーがうつすら笑つて眺めてたなんてじえんじえん知りませんデシタ。オサレ料理うまし。

掌で転がされたる気がシマスー（今頃?）

最後に出てきた生ケーキや、ワゴンで運ばれてきた数々のデザートに昇天している間、奥から出てきた恰幅のいい料理長一つといつ見た目そのものな人が（ちつ）カチョーと談笑をしていた。ソースが少し甘めでしたね、とかなんか言つてゐるけど、私にやさっぱりワカリマセン。美味しいか不味いかの一択デスつ！ええ、とりあえず一回ニコ笑つて聞き流しの術デスヨ。

「お嬢様、お口に合いましたか？」

「うをつけ！ 私に振るなックコート熊！」

「ハイ、トテモ オイシカツタデス！」

ギクシャクと裏声で返事しちゃつたー！ わああテンパリすぎだろ自分ーつ！！

だけど美味しいのは本当。

ナイフとフォークをわたわたしながらカチョーの真似して何とか口に運んでいたけれど、もつと食べたいーつ！ と思う美味しさで進むため、苦手なナイフとフォークも苦にならなかつた。

「それはそれは。本日は試食で御座いますが、またいつでもいらして下さい」

そういう残し熊は去つた。

えーと。試食？ なんの？

「……かちよお？」

「やあ帰るか」

なんの「ひちや」と聞きたかったけど、カチヨーは立ち上がって私の肩を抱き寄せ（おいいい）お店を後にした。

威厳おどきとスマート男子のステキ角度のお辞儀に見送られながら。

そもそも、デスヨ？

「カチヨー、iji-jidu-nan-desu ka?」

「お前……今聞くかそれを」

地下駐車場にある車に乗り込んでからカチヨーに尋ねたら、バチンと「コピンされた。いいっ！ もおおおー、手が早いなコンチクシヨー！」

車を発進させ、地下から地上へ。おお……見覚えありますね……ん？ ほつほう、ひょつとして「これは駅そばの豪華ホテルじゃございませんこと？」

地元に住まう身としては宿泊なんてするわけがなく、会社のおねーさま方と一緒にランチブッフェに来た位の馴染みのなさ。そら中見たつてどこかわからんわー！ つていうかここに何しに来たんだカチヨー。美味しい「飯の為なのかな？ まあいいや」と馳走様！

そのまま自宅へと帰る前に、せつかく車だからと重たい米など買に行くためスーパーへ。おおお、じぇるめんカチヨーが色々持つ

て下すつてありがてえ！ やはりこりやカチヨーとはいえ男子デスネ！ 力があるんデスネ！ 私ではフラフランの五キロの米袋、カチヨーはセカンドバッグの様にラップラッピングしていらっしゃる。なんか生意氣つ！ もつと持たせようかと思いましたが、醤油も酒も味醂もビールも充分にある。よし、ここは一つ……。

「カチヨー、これも！」

ふふふ、単なる嫌がらせデス！ 『長ネギ・大根』は、レジ袋から覗く姿そのものが所帯くさい代名詞！ 普段かつちよい一カチヨーサマにはかーなーり不釣合いデスヨツ！

しかしカチヨーは何も言わず持つ。むしろ何かこつちの背筋がぞわぞわする笑みを浮かべてデスネ……。いやいやいや、ちょ、喜んでらっしゃるのか？！ ワタシ大失敗デスカ！！

そして自宅に戻り夕飯までの時間、リビングに置いたふかふかのソファで本読んだりゴロゴロしたり。とにかくのんびりと過ごした。カチヨーも持ち帰りの仕事があつたようで、同じソファに座りリビングテーブルの上でノートパソコンを使う。そのカタカタとキーボードを叩く音がやけに耳に心地良くて、ソファに座っていた私はウツカリ寝てしまいマシタ……。

* * * * *

タタ、タタタッ……

お？

相変わらずの心地良いリズムで音が聞こえる。

「うをー、ワタシ寝てましたか！　いま何時だ？？　てか、てか、てゆーか。なんだろなんか……左耳が、あつたかい。

くわっと田を見開くと、田の前にはノートパソコンの画面、そして手。手？

いやまた、向きおかしいでそ？　平行じゃなくて垂直に見えますがな！　イヤイヤ、そういうじゃない、ひょっとしてワタシが横向きスカ？！

するつてーと……。

何かに思い当たり、ギギギ……と油の切れた玩具みたいに顔を右に動かしたら。

「起きたか」

「か……つ……」

ワタシの視界に広がるそれは、カチョー様の下からのアングル！
わーおー！

「……かちよお？」

「なんだ」

「なぜにワタシ、こんな格好してるんですかい？」

「田の前にあるからだろ」

「なぜにワタシ、こんな格好してるんですかい？」

「寝たからだろ」

そこにはないテス！

レギュラーナンバーケード!!

おいおいなんだワタシ、リラックスしそうでしょーーーー！ しか
も相手はカチヨーでしょーーーー！ そりやちょっとはさ、なんか
寝心地いいなーとかさ、カチヨーの匂いイイナとかさ、声がめつち
やゾクゾクするねーんとかさ、思っちゃつてさ……。

「力チヨー！」

「なんだ」

「お腹すきマシタ！」

「……そ、うか」

お昼ご飯はすっかり消化して、胃袋がタイミングよくキュウウッと鳴った。それを聞いたカチヨーは、少し目を見張った後、破顔して「すごい腹の虫飼っているんだな」と私の頭をくしゃつと撫でた。

私の胃袋とは違う場所が、キュウッと締め付けられました。

今週のお話をまとめてみたのトス！

月×日 月曜日。

今日も力チョーは通常営業デス。作ったご飯は毎回綺麗に食べて下さりマッスが、特に和食……というか、家庭料理が好きっぽいデス。畏まつた料理よりも、まあワタシには作れませんがねそういうのは、ママンの作る料理を思い出しつつ、わからないときは電話して『めにひ』考えてマッス。

月×日 火曜日。

力チョー、会社では本当にただの上司ですな！ 私に指示を出す以外半径一メートル以内なんて絶対近づきマセン！ 徹底してるなこのおーっ！

とか思つてたら、携帯にメールが。

『明日弁当よろしく』

な・ん・で・す・とー！ 初弁当キタコレー！！ と、ひとしきり脳内のみで騒いだ後ふと思つ出しまシタ。

力チョーは原稿を人質（？）に、私を住み込み家政婦としていますが、私の為の服とか外食とか逆にお金使いすぎてね？ なんてハラハラしてゐるのです。いつぺん『払いマスーっ！』つて主張してみたものの、「新人の給料などたかが知れてる。家事の差額だと思えばそれでいい」なんてデコピン付きでいいなすつたよ力チョー！ まあいいならいいんですケドね。流石に心苦しいつちゅーか桁違ひ過ぎだらうソレエッ！ ので、弁当くらい作りますつてんだ！ 帰りにスーパーで色々仕入れて（弁当箱もね！）明日の朝に備えまつス！

月×日 水曜日。

朝から頑張りマシタ！！ カチヨーは朝早く出勤なさるので、ソレに間に合つようとにかく自分時間で逆算したら朝五時に起きねばならんと……いやいやいや、時間で敵前逃亡とはオンナがするつてもんデスよつ！ 学生時代にママンが作つてくれたお弁当を思い出しながら詰め詰め。

いや流石に自分の分は無理でそ。同じ内容の弁当、そして普段外食組のカチヨーも私もだなんてモロバレもいいところつすね！ マメ橋先輩が間違いなく嗅ぎ付けるつてもんデスヨ！

珍しく八時台に帰つてきたカチヨーは、「美味かつた。ありがとうな」とワタシめの頭をぐしゃぐしゃっと撫でて笑顔を寄越しなすつた！ わーお極上……つてえええ！ そうじやないデスヨもう…！ むやみやたらにそんなん連発されたらワタシの心臓もたにゃいし！

月×日 木曜日。

朝、目を覚ましてすぐ氣付いた事。

昨日早起きしたのでついウトウトしてソファーで寝てしまいまシタ……ので、もう何度目でしょーかね。自分の部屋で、ちやんとパジャマ着て、コンタクトも外されて、寝てこりのつて……。わあああ、慣れてきた自分がこわいっす！

月×日 金曜日。

つてことで週末デス。

ドキドキハラハラわんだほー満載なカチヨーの観察記録をばリーダーに渡すので、ちょいと会社帰りに駅前コーヒーショップで待ち合わせシマシタ。

リーダーの住んでる周辺には画材など売つてないらしいので、こちらまで足を伸ばすついでにってことで。

「コーヒー・ショップで紅茶を頼み、リーダーは本日のお勧め「コーヒー」を注文。そして封筒に入れた資料をば渡しマシタ。ふふん、これはデスネ、風呂上りの全裸は流石にワタシにはハードル高かつたのデスが、上半身ハダカは見る事が叶いましたのでそれを絵にしてみましたの一つ！ 網膜にバツチリ 焼きついているのデスヨ！」

「ほつ、ほそまつちよ……つふふふふふつーー！」

珍妙な笑いを浮かべるリーダー。乙ゲーラブなリーダーの好みは『俊介』というキャラで、細マッチョのクールガイなのデス。力チヨーの顔は好みとはちょっと違つらしいのデスが、観賞用にはとてもいいわねと、とても病院の美人受付嬢とは思えない、『ヤヴァイ』顔で溶けてマシタ。

だれか！ モザイク貼つて！ ヒリーダーの名誉の為に願いました。願つただけデスがねつ。

その後リーダーはまだ予定があるといつことで、細かい質問はまたチャットでーと言い残し忙しそうに帰つていき、私は買い足りない物だけ帰宅途中に買って帰宅シマシタ。

ううむ、私の平日つてこんな物デスカ……。

リーダー御所望の觀察記録を書き付けてますが、実際の所朝早く出社、そんで帰宅は深夜の事もあるので、平日は淡々と過ぎて行きマスネー。

弁当だつて、取引先との電話待ちの為デス。丁度皆出払つから弁当持ち込みもバレる事はないつて言つてマシタが。豚の生姜焼きにインゲンの胡麻和え、ブロッコリーのチーズ焼きに甘い甘い卵焼き。それから……赤いワインナーのタマさんをコツソリ忍ばせた。力チ

ヨー』かわいいもの。ちょっとしたイタズラだつたのですが、やけに喜ばれて何かまた失敗した気がシマス。……。おおう。

「お帰りなさいませー』主人サマあ

「またか」

いい加減力チョーも慣れたのか、扱いがぞんざいになつてキター！ 『うむ、来週からはアレンジを加えるべきでしょーか。ややしょんぼり加減についてつかり口が滑りマシタ。

「やはり裸エプロンが王道デスカ……」

「じゃあそれで」

「ちよおつ！ ななな何が『じゃあ』デスカーつー！」

「楽しみだな」

「うわああああつ！ カチヨーまつてええええつー！」

いつものようにサッサと風呂へ向かうカチヨー。その背中へ誤解を解こうと追っかけたら急にピタッと止まるので、勢いそのままドシーンとぶつかって転がりかけた。……かけた？

「『あやー！ カチヨーの顔が田の前えええつー！』

「失礼なやつだ。落とすぞ」

「『』めんなさーい——！」

後にひっくり返そうな私を抱きとめてくれたのは力チョー。何ぞの早業！ つてかこの体勢はいかんだろう！ いかんいかん！！

「力チョー！」

「今度はなんだ」

「まさに萌えポージングですね！」

「……はあ？」

「『』のポーズ！ いやー、リーダーの大好きな乙ゲー登場キャラの一次創作なんすけどね！ それこそ俊介さんが鉄次郎に『俺を知るのは……お前だけだ』とかなんとか言って、ぶつちゅー！ と熱い……あつ……」

萌え萌えシチュエーションを立て水が流れるように語りだした私の口……あれ？ また、またまた！ どうなの最後、最後おかしくないデスカ？！

「熱い、なんだ？」

『や————！ ついにや私が力チョーにキスされたんぢゃん！ 『堪えられなかつたすまん事件』ついこの間だし！ 萌えシチュに夢中で語るタイミングなんぞ全く考えてなかつたわ！ 力チョーの手が私の肩を支えてくれ、お互いの顔は向かい合っているとか、そんなちょっと状況確認する自分がもうヤバイでっす！

しかしそく見ると、カチヨーは何か辛そうに顔を顰めてイマス…。

はつ！ そつか、そづまつ！』とですね、リーダー…！

「カチヨー！ 聞いてくだサイつ！」

「また突然に……」

「いいからつ！ ここに座つてくだサイつ！」

「ここに？」

私はカチヨーの腕から抜け出し、廊下に正座してその向かい側を指差した。カチヨーは『明らかに面倒くさい事を言いそうだが、このまま渋つた所で長引く一方だから一応聞いておいてやろつ』って顔にバツチリ書きながら（失礼な！）ドカリと腰を下ろした。

「で、言いたい事はなんだ」

大丈夫、大丈夫。やれば出来る子よ、りりい！

私は膝立ちになり、カチヨーのほつぺたをガツシリと両手でホールドして。

ちう。

ただ、唇の皮膚同士を合わせた行為をした。

今週のお話をおひめでめたのトスー（後書き）

タ「やんワインナー、いいでやつと出せましたw

「妄想部」隣の世界にトリップ

*動物捕獲大作戦*にて、喜んで食べてるカチヨーがいます。

<http://ncode.syosetu.com/n8811>

s /

そんでもって、7月1日～8時に「妄想部」にて
また企画モノをUPしますのでよろしくー！

虎馬改善計画トス　いやでもモリナヒれー

まだ感触の残る唇を離しながらワタシを凝視するカチヨーの視線を外して、恥ずかしさを紛らわせるように口を開いた。

「ああああのですね、あのっ、そ、う、トラウマ改善計画なのですよ『アゴノルー！』

「トラウマ？」

ワタシの行為に固まっていたカチヨーが、少し掠れた色気のある声で聞き返す。

「ほ、ほら過去に傷心のカチヨーはなんかもう色々あって、そのチューだなんだという行為にトラウマを抱えているんじやないかと！だからこないだ……ワタシにチューしたのだってカチヨーがつい何らかの深層心理が働いての所業であつて別にそこに感情どうこうじやなくて単にトラウマ克服の為のキッカケとなつたのならば私もちつた協力できるというかお返しになるというかネタに出来るといふかあわわわわ……」

「うわー、何言つてんだもーおお！」

膝立ちだった私はぺたりと床に座り、高々的にカチヨーを見上げ

。ついに言葉も出なくなり、自分から『かました』とはいえ、そして一回田とはいえ、イケメンカチヨーへのキスはメチャメチャに恥

ずかしい。体温ぐいんぐいん上昇して顔が火照り、じんわりと涙まで浮かんできちゃった。うをおおなんじやーりゅー……。

「それはお前が考えたのか?」

「へつ? 考えた? いや考えたってまあよく分かんないですけど、リーダーがこないだの日曜日、きっとそうに違いないっ! と熱く語っていたので私もそりゃないかと思に至ったのデ、ス……ス……」

語尾が段々細くなるのは致し方ないつてもんデスヨ! なんか力チヨーの雰囲気が、徐々に黒いモノに変わってきてますから……きやー! こわいいいいいい!!

「それなら……」

黒い笑みを口の端に浮かべカチヨーは私に手を伸ばし、後頭部をガツと掴んだかと思つたら一気に私を引き寄せて。

『あやあやと叫ぶ間もなく唇が塞がれた。

私がらしたのと大違ひの、優しい優しいキス。かかる吐息がやけに艶めや、密着した体からは温かさが伝わり、やけに生々しい『男の匂い』を感じた。

何デスカこれ何デスカ。
ナニコトなのですか一体!

角度を何度も何度も変え、よつやく離された時にはワタシはもう……。

「つふお、お、ねおひ、ふおひ——つ——」

「情緒が無いな

「いっ、いきつー、懲、は、ビードツ?—、ブレ、ス、タマニン、
グーウ!—」

「まあ落ち着け」

ゼーゼー酸素を求める私に、カチョーは一つの間にか私の背中に回した手で擦りながら「慣れひ」と宥める。いやいや慣れひじゃないかあー。いやいや宥めるんじやなくしてあー。

「かちゅおおおおお!—」

「なんだ

「トライアマではなかつたのデスカあつ?—!」

一瞬黙ったカチョーだけ。

「ああ、トライアマだ。だから泣してくれ

もう三つで、再びカチョーは私に顔を近づけて……。

のわああああああああつ!—!

なんだもつコレー（一回度）

* * * * *

風呂行つてくる。

ボーゼンと座り込む私をそのままに、サッサと行つてしまふカチ
ミー。

おおお……腰が碎け散りマシタ……粉碎骨折（ゆさん）デス……。

しかしそこで腹の虫が収まらないのが私たる所以。

ぐう。

あれ？ …… つてえええつ…… いつの腹の虫鳴つてどうす
んのさーつ！

……まあいいや、とりあえず食べよつ。腹が減つては戦ができる
ヌ。カチョーに勝つには満腹が一番（ゆさん）デス！

それにさ大体ワタシつて難しい事考えるのはめつと苦手なのよね。
きっとお腹空いてるからこんなわけの分からない展開になつたにち
げーねえのデスよ。とりあえず一旦ポーライと投げ捨て台所へ。

今夜はスズキの塩焼き、ジャガイモと玉葱の味噌汁、ねぎぬた、
白菜と豚バラポン酢かけ、きゅうりの醤油漬け、あとはソラマメ茹
でたのデス。なんかもうさ、飲もうよ今夜はみたいな。

グラスは冷凍庫で、ビールは冷蔵庫で冷やしてありマッス！

そりゃーなんか適温つてありますがね、いやいや、グラスは凍ら

せてキンキンになつたの飲みたいよねつ！

……でもさ。いや、あんなのされた後つてどうこう顔してつやいこの「スカね？」
いつも向かい合わせで食べてマスが、いやいや……は、はずかちー！

そ、そ.ua。やうデス、うふ、そうス！ ほら、私には妄想といづ心強い味方がつ！

『「ほら、お前」「レ好きだろ」「なんつ……」「お前の好みなんて知り尽くしてこゐれ」「ビヒヒしてそこまで」「聞きたいのか？俺は……』』

あ――――――

でででで出来ないつ―――じえんじえん黙田デスつ――
脳内プリンになつてる私はどう考えてもどう捻り出してもこれ以上は全く浮かびませンつ――

食卓に並び終えてからウンウンと頭を捻りながら、一人掛けソファの背もたれの上（細長くて狭いデス――）につつ伏せでグデツとなつてた。

「ひいやあああつっ！」

首筋につめつたイモノが当たり、飛び上がる代わりにドサッと座面に落下一。うをわああつ――

「ひよー（ちよつとー）なつー（何しやがるんデスカつー）だつ

！（大体ここはソファーの上でもし反対側に落ちていたら大怪我だ
スよ？！）

「……言いたい事は大体分かった。ほら、飲むぞ」

カチヨーは零れるような色氣を醸し出した風呂上りのお姿で、ビ
ールの缶を持っていた。

おおおお……眼福でござる。

カチヨーはドライヤーを使わないので、ザッと拭き上げた濡れ髪
が……これがまたそそるんデスヨ！え？もうヤ、写真イイツ
か？！これ次回の『BARA』たいむにさ、特典としてプロマ
イド付けちゃうつてアリっすよね！私の『課長、深夜に愛を』物
語……リアルカチヨー……ククク……。

ふつ……。

あれ。

なんか目の前に何か……つてえええええつ！

「カチヨー！ それ、それ、いやあああああああ——つ——！」

座面にひっくり返つてた私の顔の真上で、カチヨーがビールの缶
を指だけで摘んでいた。

それ落としたら危ない——つ——！（私が）

酔っ払いチャットでチュー

どんな顔で『飯食べたら……なんてことはすっかり忘れて、いつもよーに食べてましたね気付いたら。ついついついついお酒も進み、週末つてことでもいいじゃないかとか自分に言い訳もしつつ。なによりカチヨーがいつもより楽しげだったんだデス！ そうつ、いつも正面で見ている私が言つんだから間違いない！

だつて……『普段より口角が一度上がつていた』のデッス。ええ、そりや観察してマスからねつ！

食事も終わり、カチヨーはまだ食卓で飲んでいましたが、私はリーダーとのチャットの約束があるのでとカチヨーのノートパソコンを借りてリビングテーブルを陣取り、いつものサイトにインしましたの一ほほほ。

あーなんか飲みすぎマシタね……。

まあ私、お酒はそこそこイケるクチなので大丈夫ですけども。ふわつふわしながらログインして、待ち合せ場所まで行くと

でに待つてたわリーダー。

ちわっす！ リーダー！！
りりいたん、待つてたわ

(ていうか、リーダーのタイピングは神レベルなので、私が十文字打つとしたらその時間でリーダーは五十文字は固いデス。そして今夜はいつもよりもがつついた感じがシマス！ こええよリーダー！！)

で、どうなの？ 課長さんの態度、少しは変化あつた？

そうですね、割と機嫌ヨロシイと思いマッス！

よろしこ、と。へえ、りりいたんてば課長さんに何かしたの？

えー……。

何よ聞えないの？

えー……。

何よ聞えないの？

……。

何よ聞えないの？

ちよ

何よ聞えないの？

ぎやー！ じえすモードキケンー！！

「つ・ま・り？」

はい、メンナサイ降参です。トライアウト治ればいいなと思つて
私からチューしちゃいました！

まあー まあまあまあ……ふふつ、まあいいわ。その後の反
応の方が私の楽しみでもあるし。

りーだー？？

でも、りりいたんて……キスするの課長さんが初めてだつた
んじゃないの？ 彼氏できたことないんだし。

そ

そ？

それ厳密には違いまス……。

ちよつと…… それ初耳なんですがどー 詳しく！ そこ詳
しく話して？！

てこうかちよつと眠くなつてきたんですねどー

ダメ！ 先に話して！ じゃないと、りりいたんのアレをア
レするわよー

わー——————。 ここまことにますほんと「めんな

わいー！

で、一度田のはいつ？

はあ……ま、正直あまり覚えていませんが、中学一年の頃だ
つたでしょ‘うか？

流石に覚えていないと困る記憶レベルだわ……。

しうがないじやないですかつ！ 私、家の縁側で寝てたん
ですよ。気付いたらされてたよ‘うな？ つていう。

それが初キスなのね？

カウントに加えるのならば、そ‘うなのですよ。うをあ……ね
む……

相手の人は？ カツコイイ？ ひょ‘つとして初恋?
だれかわかりませんか？ こいいたぶんはつこいいいい
いいいいいい
りりいたん？
りりいたん？

ああダメだわ寝オチ？ しうがないわね。これきっと課長
さんログみるわよね？ なら……

そこまで読んだ記憶は、あります。

ええ。

気付いたらいつもの様に朝でした。
なんとまあ爽やかな朝の光一つ！

……。

ええ。

私の姿もいつもの様デシタ。

つていいますかね、ソフトコントラクト剥がされてる位流石に気付ひうよ自分！ て思いますわね。アレどう取るか着けた事ない人見たら衝撃デスヨ？？

田玉に張り付いた薄い膜を直接指で摘んで剥がすんですカラーハー！ ハー！ ハー！

そして相変わらずのパジャマ姿……。おかしいおかしい思いながらも結局流されてそのままになつてしまマスがね。ブラ着けてないのはどうことだ！ と、こればっかりは激しく問い合わせたい。

もういや……パソそのままで寝オチしちゃいまシタね……。

階下に下りて見ると、ノートパソコンはそのままの姿で鎮座しておりました。自動で電源が落とされたのならいいけども。

私つてば、酔つ払つと口が軽くなる……痛いクセがあるんですね。

いやいや、絡んだり泣いたり記憶無くしたりなどの粗相はアリマセンが、これはつまり自爆とゆーか。気を許した相手ほどついつい緩んじやうんデスネ……いや、デスネじゃねーし！

もつかいP C ばちーんと立ち上げ…………ああ…………。

あのサイトはログが残らなかつた……。リーダーがあの後何か言つてたつぽかつたのデスが、肝心のそこが全くわかりましぇん。

まあ……知られたかといつて困る話ではアリマセンがねー。単に初キスは力チョーではないとかそんな感じ？ 中一の頃の淡い思い出デス。淡すぎて覚えていないというなんとも惜しい思い出。カウントに入れていいものかどうか……。

パジャマ姿のまま、パソコンの前でその相手の顔をどうだつたかと広告の裏にゴリゴリ描いてみる。私は十三歳だつたけど……？？　そのときトントンと音を立てて力チョーが階段を下りてきた。あー、いつもより遅いけど、今日は土曜日で休日出勤もないと言つてマシタね。

私も身支度しようと立ち上がり、洗面所へ行こうと廊下に出た所で力チョーにご挨拶。

「おせちー！」……おひるー。」

.....

軽く指で顎を持ち上げられ、カチヨーの顔が近づいたと思ったらあつという間に唇を塞がれた。あああ挨拶の途中なのにーいいい！

「アガハナのアガハナアガハナ——ウーッ。」

「ウツラハシ」

たつふりウン十秒ちゅうつとされて、解放された口を開けば爽やかな挨拶が返ってきた。おいおいおい爽やかたあどうにうひちゃほんの少し髭が伸びてジョリジョリ感がいかにもな男の人デスヨ！思わず掌で力チヨーの顎をゴシゴシしてやつたわ！

「力チヨー！ 私の顔が卸されちゃいマス！」

「ああ悪い。
痛かつたか？」

「そりや痛いデス！ いやいや、そうじゃなくてデスねカチヨー

! ! L

「今度はなんだ」

「今度はというか今度もデスよ！ 大体ちゅーって、実は力チヨーぜんつぜん平氣じやないデスカツ？！」

「辛い。今にも震えだしそうだ」

「ヤアヤーー、嘘くせこつ……」

「嘘くさいとは失礼だな」

えーえー、全くデスよ！ こんなチューちューしてくるなんてトラウマも何もねえデス！ と田で力いつぱい睨みつけたハズですが、おりよりよりよりよ？ カチヨー……？

カチヨーは背が高い。

それを見上げる私は、ほんの少し苦いものを堪えるような感情が力チヨーの瞳によぎつた気がした。

途端、自分の中になつた腹の虫がシュンと大人しくなつてしまつた。

ひょつとして本氣のトラウマだつたのかな、とか。ひょつとして未だに癒えてないのかな、とか。私にまで拒否されて、傷ついたのかな、とか。

「 かちよお？」

「なんだ？」

「……ワタシでよかつたら……ビヤ、デス」

バツイチとなつたのもそのせいだろ？、とはリーダーの弁デス。
私はなんか罰のはずの住み込みでメタモルつたり服買つてもらつた
り、家事……はそんなに苦でもないしむしろ将来的に役立ちマスよ
ね。

そんなワタシがカチョーに返せるものといつたら。
少しでもその心の傷を楽にできればいいかな、なんて思つちまつ
たのテス。

「そ、うか」

そういうてカチョーは。
再び唇を寄せできまし つ！-

ちょ！

ねえ、なんでそんな黒い笑みを見せてるのねえねえカチョー？！

酔っ払いチャットでチュー（後書き）

7月1日18時 妄想部「梅雨」
http://mypage.syosetu.com/1445
26/

頭に白タオルはイケナイスイッチが入りマックス

「じゃあ、庭の草取り行つてきまつす！」

「……まで」

軍手を嵌めてゴミ袋片手に庭へ行こうとしたら、ガシッと肩を掴まれた。ちょ、折角やる気になつたのに！

朝から濃厚な……ええ、明らかに調子乗つてますよね？ な力チヨーのキスから離れ、朝ごはん食べて洗濯干して、ふと一階のベランダから庭を見下ろしたら いやいや、一瞬芝生かと思ったけど違うよね？ 明らかに雑草なんですケドーっ！

午前中のうちに草取りしようと動きやすい、そしてテンション上がる服に着替えたのデスよ。

「カチヨー、庭の雑草そのままでいいんデスカ？！ あと半月もしたら何かしらの用事があるんすよね？ かつちょいーカチヨーにステキなおうち、そして庭見てみたら草ボーボーっちょつといい男が隙を作るのも結構デスが、なにもそこじゃなくともーってズツ「ケま……つっ！！」

グリグリグリグリ……

「ふがががががつ！！！」

力チヨーのグーで両こめかみをグリグリ攻撃一つ！
見た目に反して地味にいてええええつ！！

「まあその服を着替えろ阿呆！」

「えー」

いかにもお手伝いな感じが出ていいと想つのに。いわば作業着なのに。

「メイド服、可愛いじゃないテスカ」

「五秒以内に着替えなければここで剥ぐ！」

「ぎゃーーー何その秒数！」

そんな時間、魔法少女アニメの変身は間に合わないつすよ絶対！
マスク被った男の変身ならギリか？？ いやいやそれどころじゃ
ない、力チヨーはやるといつたらやる。猛ダッシュで二階に駆け
上がり、前のTシャツと短パンに着替えて階段を駆け下りた。

「……っ

「へ？」

「白は駄目だ」

「ほ？」

「あと足をあまり見せるな」

「いや？」

ダメ出し、キター！

えーなんでー？？ 抗議の声を上げよつにも、「五・四・三……」
とカウントダウンが始まったのでまたも猛ダッシュで一階へ…に
わあああー！

なぜにいいつ…！

え、白じゃダメって事なのかな？ Tシャツは問題ナシなのかな
？？

ふと窓ガラスが反射した自分の姿を見て……ちょっと納得しちゃ
いまシタ。うほー、透けてるザマス！ こりゃこいつぱずかしー！
力チョー教えてくれてせんきづべー！

「これでどうですか？」

「いいだらう。ほら、俺にもよこせ！」

「軍手？」

「片手もあれば足りるだらう」

黄色のTシャツと深緑のジャージクオーターパンツに着替え、帽子を被りいざ外へ出ようとしたら力チョーも一緒に草取りする、と…
いつの間にやら力チョーも黒Tシャツに黒のハーフパンツとラフ
な格好に着替え、頭には白タオル巻いちやつてやる気マンマンです

よ！ そして色氣もムンムンですよー。 おかげで——んん！ タシ、生きててよかったです——！

あああ……いいよね、頭にタオル巻いちやう系の。

文字に出来ない何かしらの展開

うへへ……と脳内ピンクで妄想していたら、カチヨーの『軍手じゃ
ない左手が私の頭を撫でに……！

ギチギチギチ
ひつ、アイアンクローー？！

「かあああちよおおおお——つ。」

『政治小説』

「あい」

心
計
二

ぶ
ち
つ。

「……地味だな」

「草取りに地味も派手もありませンよ」

それでもカチヨーは力強く根っこを引き抜いていく。几帳面に端つこから段々と。え、私は大きなのをバシバシ抜いていきマスよ？

「あ、カチヨー、それ抜かないでくださいーい」

「これか？ 雑草だろ？」

「いいえ、ネジバナって言つんデス」

小さなピンクの花が、茎にそつてネジ山のようにくるりと巻いて咲いている可憐な花。これは可愛いので取つておきたい。あと二ワゼキショウと、ハナーリと、ヒメオウギ。

「これはデスネ、なんと一株三百円は固いデスヨ？ 私の家には群生しますけど、土のない都会ではなかなかお目にかかるない一品なのデス」

ただ二ワゼキショウは半端なく増える。少しだけ取つておき、後は引っこ抜いちゃいまスがねー。

「私の住んでる所は田舎なんで、えびばで草取りなんデス。むしろ草と暮らしてゐみたいな？ そんな中にも可愛い花が沢山あるので、つい集めて咲かせてーつてやつてマシタね」

ていうか、娯楽ないんだもの。

一時間に一本あればマシ状態の、バスのみ通る山に囲まれた超過疎地。コンビニ？ 商店？ なにそれどこの都會？ 都會に繋がる交差点に一台だけポツンとある自動販売機が逆に違和感といつ……。

ちなみに自宅から徒歩十分あります。

電話ボックスもなく、街灯は集落のメインストリート（といっていいのか？）に五十メートル間隔でほんのり灯る。一本道を入れば、夜など全く見えず、本物の暗闇が体験できるのだ。このカチヨー宅と同じ市内とは思えない……デス。

「そうか、あの地域だからな」

「おー、カチヨーワタシの住む田舎、御存知なのデスカ？ うちはじーちゃんが山持つてて、農業してて。私も繁忙期はお手伝いするのデスヨ」

田植えも、山菜取りも、色々。イノシシ、クマ、鴨。鰻に沢蟹にスッポンなんてのも捕れる超田舎。隣組はもちろんだし、集落で固まって墓地もあり、何かありやこ近所こと集まりがあつて。いわゆるヨソモンには辛い土地柄かもしけないけど、少しでも関わりがある者には村全体で受け入れてもらえる、そんな所なのだ。

相変わらずぶちぶちと匍匐性のある根っここの厳しい雑草をてりや一つと引っこ抜きながら、口は動かすワタシ。大事なのは隅っこに植えなおし、ぶちぶちぶち……。

「ま、今日はここの位にしてやろうではないか！」

「阿呆。素直に疲れたといえ

拳の裏でコツンと頭を小突かれた。存外優しいので、ちょっとは労わってくれているのかのう。あたしゃ一腰と足がボキボキよ。

「マダラハゲの様な草のむしり方するんじゃない！ 少しほー寧
さを覚える」

「細かい事いいつこナシテス！」

「いいつこじやなくて一方通行だろ？が

大きなゴミ袋三つ分にもなったのをぎゅうぎゅうと口を縛つてい
たら、カチヨーが私の後ろの方でボソッと。まるで聞きとれなかっ
たら、それはそれでいい。そんな声色で呟いた。

「お前の家族は……皆元気か？」

あれ、普通の事聞いてるんだよね？ 誰でもどこでも知らない人
でも聞くような、単なる質問。でもなんで？ デジしてそんな切な
そうな声を出すのデスか？

後にいるから、表情が読めない。

だけど、振り返ってその姿を見る気にほどもなれなかつたのデ
ス。

頭に白タオルはイケナイスイッチが入りマッス（後書き）

今夜18時 妄想部更新でつす！

テーマ「梅雨」

<http://mypage.syosetu.com/1445>

26 /

魔の手から死守せねばなりません！

「で、何故に……」

「へいお待たつー。ソコかやんこつものヤシトだー。」

ダンダーンと荒々しく（接客業にあるまじき勢い）「トスよね？！」
テーブルに並べられたのは、カレーパン、ラーメン、餃子、白
ご飯。

「ほら、伸びるわ」

「ああ、はこはこはこー。」

「すぞー。もぐもぐもぐ。」

……。

あれひ、今ワタシ流されましたよね、逸らされましたよね。いや、私だつてね、うん、この私だつても、貰付くんですわ！
あのナゾな台詞のあと急に思いついたかの様にカチヨーは「ラーメン食べたい」とか言つちやつてー！ 言つちやつてーー（よく分からぬいけど一回言つてみた）またもこのおやつさんのラーメン屋に来ちゃったので、『や』マスるよ。

相変わらず油でべたついた床と丸椅子とメニュー表。前回来た時と同じ週間漫画雑誌がそのまま。ちょ、おやつさん、ここは更新しないよー。あの話のキャラの「なつ……お前は…」の後が気に

なつて仕方がないデス！ 恐らく行方不明になつてた主人公のライバルが登場したんだろうシルエットでしたが、だからといって買うほどではないのがまたなんか悔しい。

『お前の家族は……皆元気か？』

手と口を一生懸命動かしながら、『ラーメン餃子白い』飯と二角食べをする……んだけど、どうしてもどうしてもさつきのカチョーの声が耳に付いてはなれないのデス。

どうして私の家族の事を？

聞きたいけど、こちらからの質問じゃなくて返事だけを待っている気がしたので。

『家族、みんな元気デスよ？』

『六人家族だつたか』

『そうですケド、え、何故に御存知……』

『 そつか』

で、ラーメンかいな。意味わからんにやい。

目の前ただ黙々とラーメンを食べるカチョーをこそっと盗み見る。普段ですら仏頂面なのにより一層。いやいや寡黙な男というかそういうお姿もステキなのですがね。いかんせんちょっと怖い。何故か怖い。怒ってるわけではないのに、ウツカリなにか地雷を踏みかねないような危うさを感じてしまうのデス。

ほ、ほら、私ってば敏感で纖細ですしいー？ ちょっとの変化に聰いのデス！

「コリちゃんよお、すまねえな今日飯がちょっと柔らかえり?」

「え、いつも通りじゃないの?スカ……」

「いやーそれにしても入れ違ひだつたな! つこむりまでコリちゃんちの家族も食べてたんだぜ?」

ギヤー! オヤツさんタイミング悪いし!

一つ地雷踏みやがつたぜおやつせん! 今まわりのタイミングでそれ言つなあー!

ぎぎつと睨んだのを、おやつさんは何を勘違いしたのかベラベラ喋りだす。

「今日は珍しく五人で来ててなあ

「え、葵兄^{あおい}いも?」

「おう、珍しいよな! いつ帰国したのか知らねえが。コリちゃん聞いてねーのか?」

ちよ、マズイマズイ。あいつ帰つてるなら隠して置かねばなるまいよ! 私のお宝たちー!

「兄貴が帰つて來たのか」

おいおいなんでワタシに兄がいるのを御存知なの?スカ?! ちよーいお待ちなすってえ!

いやでもその前に色々……おおおお宝! 動搖する私にカチヨーはなんだと田で促した。

「葵兄いがいるつてこたあデスよ？ 私の大事な大事な大事な……」

「大事なはもういい」

「大切な貴重な珠玉な珍重な虎の子の……」

「分かつた分かつた」

「とにかくキケンなのデエツス！……」

両手で丼を持ち上げスープをグイッと飲み干した私は、ターンとテーブルに置いて立ち上がり拳を突き上げる！

「死守せねば！ 力チョー、私ちょっと家に行つてきマス！」

「どうやつて」

「はつ！」

そうデシター！ 力チョーの車で三十分かけてやつてきたこのお店。店から近いっちゃ近いケド、ここから大きな川に架かる橋を越え、更に奥にいつたのが私の家……。

（こ）こらで『近い』つてのは、車でつて意味なのデス。一家に一台じゃなくて、田舎では一人一台。それがなくてはどうにもならんのですからね。

私も一応免許を持つてマスが……ええ、身分証明書に成り下がつて……。いやいやでも行かねばなるまいよ、兄の魔の手から逃れる為に！

「カチョー！」

「なんだ」

「止めないでくだサイツー！」

「まだ何も言つてないだらう」

「じゃあ行つてきまーす！」

「接続詞も何もかもすべてがおかしい。まあ待て」

そう言つてカチョーはおやつさんに代金を支払い（またも「カチソーに！」）おやつさんの「ありやとやしたーー！」とのダミ声を背に店を出たカチョーは。

「こいつだ。

それはそれは綺麗な笑顔で言いやがりマシタ。

「家に送つてやる」

「あわ――！ なんか怖いいいい！！

家族総出で「」挨拶、「テス！」（超予定外涙編）

「で、何故に……」

「ハハハハハ、そうですか課長殿課長殿。それでコリ子はしつかり仕事していますかね？」

「ええ、まだ新人ではありますが業務内容をいち早く覚え、与えられた仕事もきちんとこなす努力家だと私は思つております。他同僚達の評価も高いですよ」

「おおー、かあさん聞いたかオイ」

「まあまあー。こんなコリ子ですが社内の方に失礼していませんか？」

「ええ、社の者もユリ子さんの明るさに元気られております。特に女性からは可愛いがられていますね」

「アホユリも会社じゅう何枚猫の皮被つてんだかわからんねーな」

「「」れ葵ー そんな事いうでねえよ」

「まーんず、この葵はおだつぐいだけえな」

「どー！」

アハハ……アハハ……

ナニこの拷問。

私以外力チヨー含めて和やかに歓談してイマス……。
なぜこいつなつた……。

いやいや、まあ最初が悪かったの『テスよね？！』 まあそつから『テスよね？！

力チヨーが『送つていいく』との有無を言わせぬ発言にうづかりハイと頷いたが最後、あれよあれよと教えてもいらない自宅への道のりを運転しなすつてだね？ ハラハラしている間に自宅前に到着してだね？ 丁度自宅前の畠で収穫作業してたじーちゃんばーちゃんが「おやおやコリ子じやにやあだか。それと……」言いながら力チヨーに畠をやると、何故か一人とも一ヶ口笑つて。「ほ一つ、あのユリ子が『上司さん』と一緒になあ。ほいだったら、ちいつとうちでお茶飲んでつてやあ」なーんて、力チヨーをぐいぐい引っ張つて自宅へと連れてつてしまいマシテ……。おおお？？ ま、まさかの展開『テス！』 ちょ、お氣遣いしなくていいいのおおお（タスケテー）

日本家屋そのものの建築様式で平屋の我が家。玄関脇には縁側があり、引き戸の玄関を開ければ土間がある。土間からやや高い段差を昇れば和室があつてそこにちやぶ台が置いてあるのだ。ちょっとした応接間に使う部屋なの『テス』。

昔は囲炉裏があつたらしいけど、葵兄いが扇風機を灰に当てるらしい惨状になつたらしく封印された……といつ歴史が私の産まれる前にあつたと聞いた事がある。

その力チヨーを、じーちゃんばーちゃん、そして声を聞きつけておとーさんと葵兄いが取り囲むかのよつにずらりと座つた。いえ、その時までは私一緒にいたん『テス』けどね。おかーさんと炊

事場（土間続きでしかも土足でしかもガス台あるけど竈まであるつてんですから、キッチンみたいなハイカラームは言えにやいのデス！）にてお茶の支度とお茶請けの用意をしていたのでねつ！

ああ……それより前にお宝ををを……。しかしおかーさんにも極秘ですからね、なるべく平静を装い、隙を見て部屋に駆け込まねば！

「コリ子。湯のみ用意してね」

「う、うーつす！ あ、ねえおかーさん。葵兄いはいつ帰国したの？」

「今日よ。ついに着いたのは……一時間ほど前かしり」

「じょおつ！ ついさっきじゃん！ とんと音沙汰なかつたのにいきなり帰国つてなにさー！」

葵兄いはヨーロッパ辺りでなんかやつている。いえね、私聞いても興味なくてデスネ。ていうかあの兄貴がまさか海外で仕事するなんて……こんな田舎からだとそんな都会風を考えにくくて馬耳東風してたんすよね。

しかし海外だと滅多に帰国する事も無く。

これ幸いとお宝を好き放題バラダイス帝国ルームを築いていたのが……油断大敵なのデツス！

「カチヨーお待たせ致しましたのデス」

まずカチヨーへお茶を置き、後はお菓子の入つた籠とお漬物を盛つた皿など盆」とテーブルの真ん中に置いといた。みんな好き勝手に手を伸ばし、自分専用の湯飲みを手に取りずずつと飲む。

「袴田さんや、このおじいちゃんがオラが漬けたでね。たんと食べてな」

「はい、頂きます」

「昼飯は食べていねえなら、」やめるけどが？

「先ほど、コリ子さんとあのラーメン屋さんに行つて食べて来た所ですよ。一度監さん帰つてしまつたばかりだと店主が言つてありました。」ちらりと顛願にされてるだけあって、とても美味しかつたです」

「ほおかー、あの店はちいと汚なほつたいけが味はええら？」

「つい間を置かず行きたくなりますね」

かあちよおおお！ 何その爽やか笑顔風味！ ベ・ツ・ズい・ん！！ いえね、一緒に生活していてふと浮かぶ黒い笑顔を見慣れてきた私としづやあ、今すぐ土下座して謝つてハダシで山に駆け込みタヌキと暮らしたくなるような、まさにそんな一枚目笑顔なんデス！

元々かなり作りのいい面立ちをしていて、更にその笑顔というオプションつけたら破壊力抜群デスヨ！

見目もよく姿勢も美しい。これはなにか？ 銀行マンとその顧客、または道に迷った都会のお坊ちゃんが一晩の宿を求めて、またはここも再開発の為立ち退けとか最後通告に来た御曹司・続編っていう構図にも見えマスね！

おとーさんとじーちゃんはお茶で喉が潤つたらしく、よう一層話

に花が咲く。カチヨーは如才なく受け答えして、たまに質問も挟むなど会話上手なスキルを如何なく発揮し話が途切れない。むしろ私いなくてもいいよね、みたいな。

よつしゃあこの隙にい！ とばかりに「ソーッと場を離れ自分の部屋へと足音立てずに向かいマス……。

私の部屋は一階、といつてもここは平屋。屋根裏を改造して個室をげつちゅした我が城なのデス。狭いッちゃ狭いデスが、天井が高いのでそれほど窮屈さは感じません。

やや急な階段を上り、ドア代わりのカーテンを開ければ。おおう久し振りの我が城！ 皆無事でしたかーつ！！

お宝達の無事を一つ一つチェックしていたら、後から声がかかつた。

「おいコリ」

「んぎゃつ！ あ、葵兄い！ ちょお、れでいーの部屋に入るたあシツレージやないかああ！」

確実に十センチは飛べたと思いまスつ！ つひょおつ、心臓の鼓動止める氣か！

「ばーか！ レディーってタマガ！ 世界中のレディーに失礼だ！ 読びとして世界中の女性達に足向けて寝るな！」

「どうえつ！ 直立で寝ると?！」

「いや、それだとブラジル辺りの人々に失礼だ」

「地球突き抜けても許されないのかあつ！」

「逆立ちで」

「鬼…………つ……！」

くううつ、年齢が少し離れている一十七歳のこの兄に口で勝てた試しがないっ！ そして兄の意見は絶対として私の上に君臨している……ので会った瞬間敗北は決まったようなものデスが、なんとしてもお宝だけは死守せねばなりませンッ！！

過去に。

そう、この葵兄いは私の「コツコツと溜めてきたBL本（今、超おぶれみあ商品となつてますわよ？）を私の知らぬ間に処分したのだ！なんでも『BLありえねえ！』と個人的かつ勝手な言い分の元にバツサバツサと……！ ああああ……（涙）今回もその恐れがあつたので、魔の手が伸びる前になんとかしよう」と部屋に来たのデス。

「バカ兄い！ 私のお宝捨てないでえつ……！」

「うるせー！ この家に存在してるだけでありえねー……！」

ズカズカ入り込み、私の本棚を一瞥。うつ、葵兄いがいないから安心して普通に並べてたわあああ……！「こにはもう最終で最強のカードを切るしかあるまい！」兄の友人から聞いた、そして兄の本棚にある小説と漫画から推察された趣味思考をばつ！

「ちよつ！ 人の趣味どうこう語るのかその口で！ この貧乳口
リ顔好きめ！」

「…………っ！ な、なーぜーそれーをおおおお————！」

一瞬くわつと田を見開いたかと思つて、一気に掴みかかつてきた！

「やあやわー————！」

「ええー！ まぢこええー！！ まさかの正解ど真ん中だつた——！ ひいいつ、また巩固めか？ ノブラシイストか？！ 薦兄いの般若な形相に本氣で震え上がって、田をぎゅっとしぶつてしゃがみ込んで……で……。

あり？

来るものと思つていた攻撃がない？

おそるおそる見上げてみると、そこには。

薦兄いの手を押さえているカチヨーのお姿がありマシタ。

「妹とはいえ、女性に力で物言わすのはいただけないな」

「うをいカチヨー——！ アナタが言いますかつつ——！ でででで
こぴんとかつ！ アイアンクローとかつ！ 色々ワタシにかましま
したよねつ？！

思わずぽかんとカチヨーを見るが、どこ吹く風だ。全く自分の事
は顧みないらしい。ほんつとスバラシイ性格してますネ！

ガツチリとカチヨーにホールドされている薦兄いは、嘘くさい笑
顔を張り付かせたカチヨーに食つてかかつた。

「おいつ！ 放せよつ！ 大体俺が急に帰国しなきや行けなくな
つたのも、けいご……」

「ふむ。薦君にはまだ話が通つていなにようだ」

「ふいじいじ……！」

カチヨーは葵兄いの両頬を片手で抑えて、『口がブチュー』の形に固定した。うをー！ アホ面！

私は一人の会話を聞いてはいたものの、その葵兄いの顔が面白すぎてつい流してしまったヨ！ だ、だって、ブチューの口だよ？ 横から見たら『3』だよ？！ げつへつへつ！！

「ユリ子はどいへ あら袴田さん、こちらこちらしたのね」

騒ぎを聞きつけたのか、おかーさんがカーテンをヒョイと開けて顔を覗かせた。カチヨーはおかーさんに少し眉をひそめて苦笑交じりに頬をギューンと掴んでいた手を離した。

「すみません、葵君によろしくお伝え下さい」

「あ！ そうだったわおほほ、じゃあ先に下に降りて待っているから。ほら、葵行くわ、よつ！」

おかーさんは「よ」の所にドスの効いた声で威圧し、葵兄いの掴まれたほっぺたに動じることなく「あらゴメンナサイね」と余所行きの笑顔で兄の腕を強引に引っ張る……え、なんのこれ。何か言いたげに口を開こうとする葵兄いに「それは下でね」と睨みを利かせ黙らせるおかーさん。え、ちょ、ね、待つて待つてー。私の知らない所で何があるの？

でも取り残された私に、たつた今聞ける相手はカチヨーのみ。

うん、無理無理。絶対ナイ。これ聞かない方がいいと思う。うん。そうだよ。うん！（無理矢理納得しまシタ！）

四葉のクローバーとアレの反則技テス！

「……何か聞いたそうだな」

にやにーーっ！ せつかく、せつかく頑張つて押し込めたのに何故わざわざ振り返すかな！

そりゃー聞きたいことない三五〇あるわ！　え、え、と、なんだ
つけ。最初から全部聞きたいけど最初を思ひ出すのに……むと時間
がかかりマス。

「残念、時間切れだ」

一早（）！」

ちょっとー！ 聞いてから一秒つてびーゅーこと△スカーーーつ

「待つてください！ じゃじゃじゃあ、葵兄いとは知り合いだつたのデスカ？」

ついでつき……確かに葵兄いは「けい」」と口走っていた。それ、力チヨーの名前では?? 菩田圭吾 菩田課長とは私から言つたものの名前までは私言つてマセン。それにこちらの家族サイドからは、どうも『初めまして』の雰囲気じゃなかつたような…………??

「答える気分じゃない」

「ぬわんじやそりゃあああつ！ や、聞けといつたくせに——
いい」

「聞きたいのはお前の都合。答えないのは俺の都合で、俺がそれを優先させる。それのどこが悪いんだ」

「わー！ なんて滅茶苦茶な言い分！」

「ああー葵兄い以上に口で勝てにやいつ！ もう早々に白旗、デスとほほ……。

ショボーンと肩を落とした私をよそに、力チョーは私の部屋をぐるりと見渡して小さな机とセットになった椅子に座る。おおう、力チョーが座るとなんていうかギャグみたいデスネ。ワタシには丁度いいサイズの椅子は、力チョーの大きさにはかなりの不釣合い。寸での所で噴出すのを堪えた私エライーつ！

「……これは？」

力チョーが、私の机の上に飾つてあつたフォトスタンドをヒヨイと持ち上げた。それには昔の私が写った写真と四葉のクローバーが挟み込まれている。

「あ、この写真は……えーと、何歳だったデスかね？ 小学二年生の頃かなー？ まあいいじやないですか。大事なんデスから触つちや……」

手を伸ばし力チョーの持つフォトフレームを取り返そうとしたら、その手首をつかまれた。くいっと引っ張られ「んぎょおつ」と体勢を崩す。

ぎし、と椅子が悲鳴をあげた。

「あのぉ、カチヨー？」

「なんだ」

一
離してくだしやい」

一
せ
だ

やたこで！子供が力升三二！

今のはひどい！ ほんとに場所に乗っている様子は座る力チヨーの、上ー！ し・か・もー！ まるでしな垂れかかるかのように力チヨーの胸に頬当ちやつてー！ 当てちやつてーええつ！

モゾモゾと、どうにか離れようと動いてあるけれど、床から足も離れていいし手首も掴まれている為にどうにも……ん？あれ？

力チヨー?

「今度はなんだ」

なんか足に当たってマヌス

一 気にするな、生理現象だ！」

涼しい顔してやらうとすん]]の事書へてますよか舟三!!

確認するか？

「那樣的你————————————」

今度こそあらん限りの力を振り絞つてカチヨーから飛びのいた。いやいや、なになに、えをうをう。動搖を隠せないまま、とにかく何らかのフォローがいるだろうと口を開く私。

「カカカかちゅう、そうですよそいつ、そんなんデスヨ！ 私知つてますからー。自然になんてよくあることですよホラ毎朝とかおつ起つ……」

スコー——ーン

「にぎやああああつ！—！」

大事なフォトフレームの角を脳天に落とされた———つ！！
ぼ、暴力反対———！！！
ズキズキと痛む頭のテッペンを押さえながら非難の声を上げるが、
いつものようにカチヨーはどこ吹く風だ。

「少しは恥じらいを持て阿呆」

フンと鼻で笑いフォトフレームは元の位置へ戻したカチヨー。ガタツと音を立てながら椅子から立ち上がり、私の頭をワシリワシと片手で荒々しく撫でる。

ちょ、なに、えつ？！

ナニゴト！ と目を白黒している私に顔を近づけたかと思うと、ふわっと優しい口付けを残して「赤い顔色引いてから降りて来い」と階下に行ってしまった。

え、えええええ？ ちょ、ねえ。ねえねえ。キスへのハードル、随分下がってませんこと？？

部屋の隅にある姿見には、真っ赤に顔を染めた私がいた。うをあ

おおお、乙女か！ ワタシ、乙女かっ！！ カチヨーにキスされ、
カチヨーと抱き合い、カチヨーのアレがアレで……つておいおい
いー！

アレなんてBL本にてよーーーつく御存知ですわよワタシ！ いや
モノホン知らずですけどね。ぐつたりなつたり元気になつたりみ
たいな、それなりの知識はゴザイマスのよオホホホホ。しかーし！
いざ現物つて、どうなのさ。

足に当たつた感じ……「う、かた……ぎやああああああああ！」

再び頭が沸騰してジタバタ悶えて、暫く部屋から出られましょん
でした……。

四葉のクローバーとアレの反則技テス！（後書き）

「妄想部」

http://mypage.syosetu.com/1445

26/

8月1日18時投稿。

それからだーいぶ時間が経つ。

平静と思えるまで、部屋の中で随分色んなことシマシタよー。イモムシしたり、紙袋に空気入れてバーンって叩き潰してみたり、三百ページにも及ぶパラパラ漫画描いてみたりね！ 滑らかに縄跳びする糸人間。ちょっと達成感。

通常営業だとやつとこを思えるまでになつたので居間に下りると、そこにはおかーさんに葵兄いが膝詰めで説教されている所だった。え、ひょっとしてあれからずっと？ ここにはこの一人だけで、他の家族はどうやら野良仕事へと散つていつたらしい。

「あれ？ おかーさんカチョーは？」

私の声に顔をあげたおかーさんは「お散歩に出られたわ。ユリ子も行つてらつしゃい」と、満面の笑みを浮かべた。おおう？ なにか逆に怖いデスネ……。その横にいる葵兄いまでもがニタニタ笑つてて思わず「気持ち悪つ！」と零したら、ギロリと睨まれてしまいおつかないので慌てて外へと飛び出した。

車が一台も通らない細い農道を、ヒールの低いオサレ靴でコツコツ音を立て歩く。ふわふわのシフォンが風に揺れる小花柄のスカート。ピンクのかシュクールなブルオーバーの服を身に纏うワタシはちょっと違和感ある田舎道ですな！

髪もトコミングされてメタモルフワタシに、家族の皆は何故か
何も言わず……そこ、あえて触れずみたいな空気耐えられますえー
ん！ でしたよ（涙）

かるうじておかーさんが炊事場でお茶の支度しているときに「そ
れ、似合つわよ」と言つてくれたので救われマシタ。

それにしてもカチヨーはゼンまで散歩に……？ この集落のメイ
ンストリートともいえる道を歩いてみても、あの無駄に存在感溢れ
る存在は視界に入つてこない。うーむ、こうなつたら……。

「カチヨー！ ビツヒツすか――――！」

と、何度も大声上げながらウロウロしてたら、コシンと背中に石
……じゃなくてこれは……？

「茶の実？」

「大きな声で呼ぶな阿呆」

山の傍の木立からガサガサした音がしたと思つたら、カチヨーが
のつそりと現れた。おいおい何でこんな所から！ 散歩じゃねーえ、
探検だ！

「冬眠から寝坊したクマ……つ、ざわんつ――！」

おちやめにクマに例えたら、カチヨーは手に持つていたお茶の実
をバラバラつと私の背中に入れた！ ゲヤああ取れないいい！
ちょ、まつて、なんで下着の中まで……！
着ている服の下には滑りのよいキャミスリップを着ているので、
スカートのウエスト辺りで実がごーるごーると……カチヨー、子供か

!

「あ、ヘビがいるぞ」

茶の実に気をとられていたら、カチヨーがひよいと指をさしたその先に。波打ちながら滑らかに移動する細長い紐状のアイツが！！ぴょーーーんとカチヨーに飛びついて、とにかく地面から離れた。

「お前……まだヘビが苦手か」

「その名前出さないでくださいあああサイいいいつ！」

ほ、細長い、紐！ それで！
昔からダメなんデスよ紐が！ 苦手で怖くて。そう、例えていう
ならば……！

「タマが縮む思いデスつ！」

「付いてないだろ？」「

「あくまでも気分テス！」

は……と短い溜息を吐いたカチョー。その割に、抱きつく私を優しく抱き直して背中をさする。……うん、優しいなと思いつつ、たまにゴリゴリするのは茶の実^ゲスネ……どこまでも厄介な！

かチミーは私を抱っこしたまま集落の端の方へと歩き出す。あ、ここは。

「力チョー、降ろしてくださいサイ」

「どうした」

「お参りするからテス」

「！」のままいいだろつ。俺も挨拶しよづじやないか

「ちよ……！」

言葉通り、私がジタバタした所で力チョーの腕はガツシリとホールドされてて動けまちえん。くそ、なんなんだ力チョーめ！細い細い道を分け入り、たどり着いたのはこの集落の共同墓地。ここにはひいじいちゃんひいばあちゃんが納められているのだ。小さすぎでおぼろげな記憶だけれど、可愛がってくれたんだ。お彼岸だけじゃなくて、近くだから立ち寄りついでに挨拶したり、ちょいちょい家族で掃除したり。近所の皆そうだから、そう言うもんだと思つてたな。

非常に不本意なポーズでご挨拶……抱っこのままで、なんだか罰当たりな気がしないでもないけどもですね。

ユリ子来ましたよー。私の勤め先の上司の袴田力チョーですょー。こんな格好で「めんなさい」。

田を閉じ心の中で報告を済ませ、ふと視線を上げたら。力チョーはじつと滝浪家の墓を見つめていた。一瞬だけだけど、どこか辛そうな……そんな複雑な色をその目に滲ませて。だけど、あつという間に『力チョー』の表情に戻り、私を見下ろす。

「ああ、家に帰るか」

「……ほ？」

「お前の作る夕飯が食べたいんだ。行くぞ」

「……へつ？ はつ？ ひよつ？！」

そしてそのまま車に乗るまで、抱っこされたままテシタ……。
んなのやれの思わせぶりはーっ、カチヨー！
な

抱つこじら挨拶テキス（後書き）

お茶の実つて分かりますかね？
とある地方の田舎の畑では転がつてます。

それから本日公開！

「妄想部」

<http://ncode.syosetu.com/s3786>

気付いたけど気付かない「このオトナなワタシ

力チヨーの家に着いて、体力やら精神力やらなんかもう「口」に疲れ、「」飯食べ終わって片付けたあと座ったソファーにて寝才チしてましたネ……。

あの抱っこ状態で帰った時の、おかーさんと葵兄いの視線の温いこと温いこと。そんな空氣をえて読んでいないような力チヨーは「お邪魔致しました」と、私から見れば嘘くさいことこの上ない笑顔で挨拶を済ませ、わくわくと車に乗り込み帰宅したのだった。

「つていうか……」

嗚呼。もう何度目でしょーか。

パジャマに変身しますね。そして何故か……下着も変わつますね。ブラなしで。あと、やけに肌がサッパリしてますね。これは何か? 私、寝ぼけながら風呂入つて着替えて布団についたとでも?いや、しかし、まさか……! ダメ、それは……!

考えたら、負け。

「ふん、そうだよね。そつそつ。なかつたことに。見なかつた事にしましょーよ。
さて起きるかー。(平塙)

本日は日曜日なのです。どうやら快晴! カーテンの隙間から零れる日差しがこれからやってくる夏の気配がビンビンなのでつす。

「うむ……このカチヨーの家で過ごすようになつて二回田の日曜日のデス。なんだろうなあ、こんなどっぷり慣れちゃつててともへンテコな気持ちだわー。

仕事したり、家事したりで疲れてもれなく寝るのが早くなる。つまりそれは原稿描いたりBし本読んだりのニヤニヤ妄想タイムが減つているつづーことで。

でも何故かそれが耐えられないとは思わず……いや、好きは好きだけどもね？ 実家で暮らしていた頃のどっぷり妄想に浸つていた自分と同じ様にしなくて別段困らないという事実。

オトナのオトナに近づいた、つてことですかね？ ムフフ。

オトナはオンオフの切り替えが上手なのですヨ。余裕シャクシャクうそんな自分になれてきたんじょーねつ！ かえつてこの生活にさせて下さつた（脅迫ではあるけども）カチヨーに感謝デスね！ いやっぽい

そうそう、オトナのオトナといえばリーダー。できればリーダーの様になりたいツス！ あのすんばらしい一色氣溢れる『美女』っぷりに、いつも堪能させて頂いてあるのですよ。男同士の絡みは好きですが、リアルでの美しい女子を眺め倒すのも大好きなのです。そう、腰のくびれとか、下乳とか、うむうむ。温泉行つてガン見しこともありましたつけねー……。

いやいや、いい加減布団から出ないと。うおりやつと起き上がり、とりあえずおパンツとおそろいのブラジャーを装着。そして乙女趣味全開の下着姿のままクローゼットを開ける。ううむ、なかなか慣れる事のない陳列ですわね。いわゆるモテ服ふえみにくん群。アマゾネスが用意したファイルをペラペラ捲りながら、今日の予定を思い出しつつ着る服を選ぶ。

「しつかしホントーにふえみに〜ん デスネ。ふわふわのぼわぽ
わで、清楚なのか可愛いのかはたまたそのミックスなのか」

髪型もゆるふわパークで、こりや花畠や波打ち際をウフフアハハ
ではしゃいでいる違和感ねえなつていうビジュアルなのデス。顔除け
ばモテ女子になれるかもデスな！

「ユリ、入るぞ」

がちやつと何の前触れもなしに開いたドア。カチヨーがのつそりと入つて。

「ぎやあああつ！ 力、かちよおおうおうおう―――つ―――！」

「着替え中か」

私は開け放つたクローゼットの前で、パンツとブラだけ。そして
ファイルを正面に持つて仁王立ちしてたのですよ？ ちょあつ、ち
ょあつ、ちよおつとまでえいっ！

「力チヨー！」

「なんだ」

「減りますっ！」

減らない

だいぶ言葉を省略した私の抗議にも間髪いれず返事を入れる力チヨー。こ、このおおおつ！

「いやいやいや、なんか私に話す事あるじゃない『スカ』?！」

「似合つてゐるわ」

「ちつがーーーつ！ ちょ、バツチリ見てるじゃな『スカ』！
！ 下着『スカ』？ 下着褒めたんすか？！ ほほほ褒められても
嬉しくない『スカ』！」

確かにメタモる前の私だったら、上下色柄別つて良くある姿だつたけど！

「カチョー、その前に、いや、後でもビッチでもビツでもいいんですけビツ」

「つまりなにがいいたい」

「なま、な、名前……で呼びましたね？ 呼んじやいましたね？」

？

このような関係になる前、会社では『滝浪さん』と呼んでいたカチョー。しかしB-L本がバレた後は、おい、お前、あんな、ちょっと……が私を呼ぶときの言葉だった。

しかし、ここに来て名前呼び？ 『ココ』つてー！ 下着姿なのも忘れてカチョーに詰め寄る。

「何故名前で呼ぶの『スカ』？！」

「違う名前だったか？」

「いいえ合つてますケド……いや若干足りない字もありますが……」

…

「合つているなら問題ないだろ？」「…

「おしゃつ……」

なんデスかなんデスか。またいように言いくるめられた気がしまっす！確かに人の名前なのであつて呼ぶ呼ばないは自由であつて、更になんつーか家の名前ではなくて私個人を呼ぶに当たつて順当というか別に呼んでもかまわないのだけど、いやいや、なにか。そう、なにか一步踏み込まれた、一步私を覆つ枠の中に入り込んできた、そんな気がするのでゴザイマスですのよつ！

「とりあえず服着る」

それだけ言い残し、扉の向こうに消えた。

「とり、とりあえずつてー！ カチヨーが邪魔したんじょーがつー！」

今更ながら羞恥心が湧き上がり、体中カツカと燃え上がらんばかりに赤くなつて抗議の声を上げようと、息を吸い込んだその一瞬。私の心にひゅうっと凍て付かんばかりの現実が急に差し込む。

もう、三回目の日曜日。

こういつ時間がもてるのつて。カチヨーといついつ時間がもてるのつて。

あと半分で、このちょっと変わった同居が終わりになるんだよって現実を、いきなり目の前に突きつけられた気がした。

まつち、満喫

「…………。コリ、聞いてるか？」

「ほわっ！」

皿の前で手の平をヒラヒラ振られ、驚いた私は三センチ飛び上がった。おっと、全く聞いていませんでしたぜ！

さつき気付いたタイムリミットに、自分でも驚くほど喪失感を覚えた……の特斯。

「」の時間、「」の空間、「」の生活が　なくなる。

いえね、むしろそれが当然なのデスよ。ずっとずっと、普通にそうやって暮らしてきたんデスよ。この状態のほうが異常だつづーね。胃の中に漬物石が入り込んだかの様にズビーンと重くなり、食欲は失せましたが、茶碗によそしてしまった以上お残はしたくありません。機械的にぼそぼそと口に運ぶ。

「……コリ？」

流石に様子がおかしいと思つたのか、カチョーが心配そうな顔を私に向ける。だけどもや、こんな気持ちどうやって口にしたらいいのか　いやするべきじゃないのデスよ。だってこれペナルティからくる『三つの条件』の内の一つデスからねつ。

「、見た目を変えること。

一、家に住み込み、家事全てやること。

未だに謎のままの条件二は、この同居生活が終わるその日に伝えられるはずだけども。

その一、二が。更に、何故か力チョーと暮らすのがとてもとても居心地がいいんだなんて、いえない。

会社では単なる上司と部下。しかも私新人。

年齢だつてそうデスよ。力チョーは三十一歳、私二十一歳で九つ違うのデス。学生時代だつたら決して交わらない年齢差。オトナ過ぎてカツチヨ良くてステキ過ぎて……絶対に、こんな暮らしが送れるはずもない相手。

もつと、ここに、住みたいな……。

ん？ え？ いやいやいや。何考えるのワタシ！ 単にさ、力チョーモデルにしたBL本見つかっちゃって、それを脅迫材料として着せ替え人形代わりや家政婦代わりにされただけじゃないか。何を考えてるんだ全く！

「何でもありますよ？ ちょっと妄想してただけデス」

混乱する脳内を悟られたくない。ぎこちなく笑顔で応えれば、何故かいつもBLシチュ妄想でデヘデヘしてる私に、激しいツツコミをしてくる力チョーが……何もしてこなかつた。

ち、違い、分かるんつすか！？

「今日は用事があるから昼は要らない。夕方には戻る」

私の挙動不審さに気付いていないのか、力チョーはとっくに食べ終えた食器を前に新茶を啜る。昨日おかさんと持たせてくれたんだよね。力チョーさんと一緒に飲みなさいって。

一緒に？ んつ？ とは思つたものの、そつか合宿だからカチヨーもいると思つてゐるのかもしれないデスネ。

「はーい。了解つす！」

カラ元気なのは分かつていたけれど、落ち込んでも喜んでも過ぎる時間は一緒にだ。だつたら限られた時間、楽しく過ごしあうではないか。

無理矢理詰め込んだご飯をお茶で胃に流し込んだ私は、空になつた食器を流しへと運ぶ。

「つづーむ、今日は何をしようか。

基本ルーチンの家事は終えてるんで、折角の「ぼっち」休日。お昼もぼっちなので、たまにや街中にでもウロウロしましょーかね。駅北の本屋に行って好きな作家さんの新作BL小説の発掘したり、漫画発掘したりと久し振りに趣味に走りましょ。そうなのだ、私の普段の休日とはこういうものなのだー！

あと……そうだ。カチヨーに脅迫されてるのを差し置いても、どつぱりお世話になつてるので何かしらプレゼントをしたい。なにがいいか……。

うーん、うーんうー……そうだ！ 灰皿デスネ あのすぐに山盛りになつてしまつ灰皿は、どう見てもその場のやつつけ仕事的な灰皿デシタ。カチヨーには一時間サスペンスドラマでよくある、鈍器の様な物と言わしめる重厚なつくりの灰皿がよじざんす。おセレブ臭なカチヨーだけど。高級なのは買えないケド。お礼なのですよ、お礼。うん。

家の中の戸締りを確認して、玄関の鍵穴に合鍵を差し込む。カチヨーから渡された一本の鍵。そりや、同じ家に住むに当たつ

て持つていなきや不便でしょーケドも、カチヨーのいわばテリトリーの固まりの居場所の鍵を私に託すつて……信頼されてるつて事でいーのでしょうかね。ちょっと嬉しかったんだ。

合鍵……合鍵……合鍵シチュもいいですな……。

『チャリ……と音が、僕の田の前で鳴つた。

「これ？」

「ああ、持つてろ

若干ふて腐れたような態度をとるのは、彼が照れた時のクセだ。そんな些細な言動が、僕の心にざわりと撫で付ける。

「僕行かないよ？」

わざとそんな意に反する物言いをする。ふいっと横を向き、彼はどんな反応をするのか気配で窺うと、彼は……小さく息を吐いた。ああ、もう！ 僕は彼のしゅんと肩を落とす、まるで捨てられた子犬みたいな可愛い所が大好きなんだよ！ 意図的に言葉で攻撃するのは、それ見たさなんだからな。僕は彼の手首を握り、引き寄せ

……』

「ひつおおおおおお？…」

気付いたら、田の前は壁デシタ。あつぶねーデス！ あと三十分でおでこヒツトツすよー！

妄想していたらいつの間にやら田町での店前で。生活雑貨を扱うお店で、件の灰皿を物色する。

うーむ、重くて、手に持ちやすくて、重厚な見栄えで、いかにも鈍器っぽいのは？ おーう、これぴったりテース！

そう時間もからず見つけた一品はラッピングを頼み、ほくほくと紙袋を持って店を出る。カチヨー、喜んでくれるかな？ カチヨ

「は何と言つかな？ カチヨーは……つてええ！ 何で私、カチヨーの事ばかり考へてゐるのでしょうか？」
いかんよいかん。ぼっち満喫中なのに、なんでカチヨーが出てくるんだ。

気を取り直して丁度昼時という事もあり、エネルギー補充しようと、以前リーダーに教えてもらつた美味しいランチのお店に行く事にした。八百円でオムライスとサラダとドリンクと一口デザートが出てくるのはとても嬉しい。

大勢が行き交う目抜き通りに面したその店は、ガラス張りのとてもオサレな造りだ。店内の混み具合を外から窺つた時、目に飛び込んできた光景に私は小さく息を飲んだ。

「え。 かちょ、お？」

朝、出かけていつたカチヨーが店内にいる。そのテーブルを挟んで向かい合うその人は。

「……リーダー？」

なんで？

目標補足（前書き）

袴田圭吾課長目線

「」これがそのリストよ

「ああ、悪いな」

「その心にもない謝罪なんて止めていただきたいわ。だったらもつと早くできたんじゃないの？」

テーブルを挟んで向かい合つのは、コリの所属するサークルのリーダー、望月優実。むちづき ゆみ日曜日の昼に呼び出されたのがそんなにも気に食わないのか。きっと後者であろうが不機嫌さを顔に張り付かせたまま、隠すそぶりもせずアイスコーヒーを飲む。休日の繁華街はいつもの様に雑多で、歩行者天国となつた通りも人で埋め尽くされていた。昼飯ぐらい奢りなさいよと前もつて言っていたので構わないが、「あ、すいませんーん。ここの一一番高いランチセット、お願ひね」と遠慮せず、その態度は返つて好ましい。

俺は食事を頼まず、コーヒー一杯目を注文することじめた。

彼女がここなら、と指定してきたのは若い女性に人気のあるカフエだつた。昼時には安価で美味しいランチセットを提供するらしく、いつも人で溢れているのは知つていた。いかにも女性好みの店の造りをしたこの店は、俺にとって、いや、子供を除く男性すべてはかなり居心地が悪い。恐らく単純に俺への嫌がらせに違ひない。顔が利くのか、予約をしたうえテーブルも指定してあつた。

くそつ、これも嫌がらせのうちか。

通りから丸見えの、ガラス張りの位置。指定された時間に行けば、彼女はまだおらず、十分少々一人でじっと座る俺は好奇の目に晒される羽目になった。大多数は女性で、残りはカツプルの女性が上げる声と共に嫉妬の混じる男の視線だ。

若い頃ならまだしも 女の視線は今はただ煩わしい。

「端的に言えば、タイミングだ」

「タイミング？」

「それに 君はとても都合がいい」

「ふうん？ じついうのを頼むほどに、ね

コンコンとテーブルに置かれたA4サイズの茶封筒を指で示す。無言でそれを取り上げ、中に入った何枚かの用紙を確認する。ほぼ予想通りだったので再び封筒に戻す。俺が見てる間、携帯電話が鳴った彼女は「ちょっと失礼」と席をはずしていた。見るのはなしに表に視線を動かし、こうなったキッカケを思い返していた。

俺が最初に彼女を見つけたのは、一枚の書類だった。

『滝浪ユリ子』二十一歳。某大学卒業予定。資格は普通自動車免許。趣味は読書と絵画。

別段これと書いて特徴のない、新卒の入社面接予定者だった。しかし、俺はたったそれだけで歯車が回り始めたのを感じた。

こここの出身だつたら免許があるのも頷ける。それは彼女の現住所。俺が幼い頃を過ごした思い出の地だ。

本来ならば特に特徴もない新卒者など書類審査後に『残念ですが』と断りを入れるのだが、今回ばかりは引けなかつた。当時係長であつた俺だが、すでに課長業務も兼任するほど任されていた業務の一つなので、別段怪しまれる事もなく一時審査は通過した。

そして面接當日。

一言で言えば『野暮つたい』、そんな小さな彼女だつた。今時の店では到底売つてゐるとは思えない太枠黒縁眼鏡、染めた事など一度もないだろうその髪は大学生なのに幼く見える二つ縛り、化粧はここ一、三日で慌てて勉強しました、という有様だつた。普段の俺ならば絶対に採用しない。そう、普段の俺ならば。

ずっと待つっていた『彼女』だつたから。

それにしても不恰好にも程がある。これでよく高校時代、大学時代と過ごしてきたなといつそ感心する。しかし、よく見るとどうだろ。小さな背は小動物のようにみえて、庇護欲をくすぐる。元のつくりはいいので、見た目の野暮つたさなどどうにでも変えられるだろう。厚い化粧などしないその肌は透明感があり、ツルツルしていく触り心地が良さそうだ。

ぱてつとした唇と大きな瞳、襟足から覗く首の細さと共にうなじの白さが際立つ。リクルートスーツの上からでも分かるスタイルの良さ、引き締まつた足首。どれをとっても俺好みに育つていた。

逆に、野暮つたいからこそ悪い虫が付かない。これでマトモな格好をしていたら、それこそ誘蛾灯に集まるが如く五月蠅い小物が手を出していただろう。

面接内容は正直凡庸ではあるが、不合格という程でもなかつたの

でそこは権限を駆使して内定が決まり、配属先も俺の部署に回る手を回す。

さう、ここまでは完璧だった。

普段から彼女の視線を感じていた。特に部下の清水と話している時に、より強く意識する。

「袴田課長?」

「ああ、すまん。それで例の件だが」

「時間のなさは俺達よりも課長でしょう? 大丈夫ですか

「問題ない。そうだな……追つて連絡する」

清水に頼んでいた案件は、半年前なら全く想像すらしなかった。しかし。

「滝浪さん、あの会社に送る封筒はどこにあります?」

「あ、ハイ。こちらにあります!」

書類が山のように積まれた間から、ぴょこんと頭を出して元気良く返事をしたのは『彼女』だ。滝浪ユリ子。入社してさほど時間は経っていないが、一五一センチという小柄な所が先輩女子達のツボだつたらしく、随分可愛がられていた。

それは俺のだ、と何度も口から出そうになつたか。

同期の飲み会、女子会、合コンへとよく参加するようだ。そんな愛らしい姿で繁華街を歩くなど危険すぎる。すでに包囲網となる布陣は配置済みだが、どうにかして彼女を俺の手の届く範囲に置いておきたい。会社では九歳年の離れた課長という役付だ。軽く手を出せるものではない。じっくりと策を練り、徐々に近づくしかないのか。勿論彼女には心の準備というものがいるだろうが、俺は俺にはある期限が迫っていた。それまでには……。裏腹な思考が入り乱れて焦燥が胸を焦がす。

しかし転機が訪れた。そう、全く予想だにしない方向から。

彼女から渡された封筒の中身を改めるとそこには。

「なんだこれは？」

「え？ ひ、ひゃああああつ？！」

大きく目を見開いた彼女は、顔を真っ赤にして小さな口はパクパクと鯉の様に開いていた。

書類と思っていた中身は漫画の原稿で、その中身はおよそ一生目にすることが無いと思っていた男同士の絡みがあるものだった。

ありえない。

彼女はすべて俺好みに育つていたのに、想定外は中身だった。流石の俺もこの趣味までは把握していない。いや……履歴書を思い出す。『趣味は読書と絵画』……そうか、それか。

一瞬どこか自分が遠い所に魂を飛ばした気がしたが、いやまるで、と思い直す。

趣味は矯正可能。そしてこの好機は、最大限利用すべきだと。

「……滝浪さん？ 会議室まで来てくれるかな」

「……はい」

目元を潤ませて、悄然と肩を落として俺の後をついてくる彼女を見た時は、中身はどうであれこの腕に捶き抱きたい衝動を抑えるのに苦労した。

手段としては強引といつ自覚はもちろんある。

しかし多少力技でも利用しない事には、いつまでもスタートを切れないでいる己を良く知っているからこそその所業である。

更に言えば、期日が迫っていた。煩わしいばかりのそれに被せて、あこづらに意趣返しをしてやるつと想つたのだ。

そして原稿を取り上げた俺は三つの条件を提示した。

- 一、容姿の改善
- 二、家に住み込み家事をすること
- 三、……は、最後の日に

期間は一ヶ月。じまかその間に俺は俺の出来る全てをこなさなければならぬが、ただ拱こまねいているだけの日々を思えば容易い事だ。三つの条件を最後にしたのは、彼女が逃げだせる余地を作ったから。一ヶ月、いつでも自分の意思でこの奇妙な関係に終止符が打てるように。もしその様に切り出されたら、反論一つ言わずに原稿を返し、再び日常生活に戻る。その覚悟の上だった。

「つもう、嫌になるわ。しつこいのよ」

彼女の戻ってきた声で現実に引き戻される。苦虫を噛み潰したよ

うな表情でも絵になる彼女は、十人中十人美人だと答える容姿の持ち主だ。例え中身が腐女子だろうが、欠片も感じさせないのは大したものだ。

「コリから没収したあの封筒には、彼女の住所氏名が書かれていた。そこまで分かれば調べる事など容易い。望月優実二十九歳、総合病院の受付事務で 世間は狭いと思うが、自分の部下の望月美穂と従姉妹関係にあつた。

剣呑な色を視線に乗せて俺の真意を測るつとする彼女は、ぐっとテーブルに身を乗り出す。

「ねえ、リリーたん……コリ子ちゃんは……。あなたで本当に大丈夫なの？ 私、本当にあの子の事妹のように思つてているの。だからどうしてあなたがそこまであの子にこだわるのか、全然見えてこないのが私は怖いの。コリ子ちゃんはあなたの好きにしていい子じゃないのよ？」

「何を言つている。あいつは最初から俺のものだ」

「はあつ？！」

彼女が皿を吊り上げて反論しかけたそのタイミングで料理が運ばれてきた。意図せず声を上げたのを、周囲に対し決まりが悪いのか、半分浮かした腰を静かに下ろした。

そして声の調子を落とし、しかし攻撃的な口調は変わらずにその舌へ乗せる。

「ちよつと、それはどういふ意味？」

「俺が教える義務は無い」

「えーえー、そうですか。じゃあユリ子ちゃんに聞いて構わないのね?」

俺の言葉に含む意味を正確に聞き取れる彼女は、こくりと引き込んで正解だ。いい駒になる。俺はゆっくりと「一ヒーカップを持ち上げ、立ち上る香氣を味わいながら「構わん」と一言投げた。

ユリが言うのなら俺は構わない。それほどまでに俺はユリという存在に対して、俺の心全てを預けていいとさせ思つてこむ。ただし。

覚えているだろうか。

俺を救い上げたあの珠玉の記憶。それはいつまで経つても色褪せない。

覚えているだろうか。ユリは。

俺ばかりが大事に抱える思い出。少なくとも今のところユリは思い出したそぶり一つ見られない。だが、忘れていたとしても手に入れるのは覆しようも無い決定事項なのだが。あの日あの時交わした言葉は、たとえユリがこの包囲網を抜けたとしても、俺の心の中に一生居続けるだら。

俺が思考を巡らせている間に食べ終えた彼女は、カタツと皿の上にナイフとフォークを置き、アイスコーヒーを一口飲んだ。

「気に食わないといえば嘘になるけど、ユリ子ちゃんの為だったら協力はするわ。でも、例の報酬はキッチリお願いするわ」

「分かつていてる。手配済みだ」

「あら。ふふ、楽しみ」

単に書類の受け渡しと情報の統合の為であり、このような居心地悪い空間で昼飯を食う氣にもなれず、コーヒー一杯だけ飲み、用件が済んだので店を出た。

お互この用件だけ済ませれば用は無い。何の名残も無く店の前で別れ、俺は繁華街から少し離れたラーメン屋で一杯食べた。そこそこ客の入りもよく味も悪くは無いが、ユリがよく利用するあの店の味は忘れられない程に美味しい。ユリと二人で食べた付加価値を取り扱つても、だ。

ユリは、俺に色々な驚きをもたらした。

昔もそうだが、今も毎日新鮮な想いを抱かせる。このまま、ずっと続けて行けたら……。

条件提示（後書き）

望月美穂 11行の記憶

http://ncode.syosetu.com/n4863

r /

「ただいま」

今まで何の味気も無かつた我が家は、ユリがいるだけで温かみをもたらした。一度も帰宅時に声など上げた事のない俺が同居を始めてから自然と口にするのは、あの笑顔で「お帰りなさい」と言われるのを望んでいるからだ。

ああ、帰ってきたんだ。俺の帰る場所は、ここだ。

心からの安堵を浮かべることが出来る空間は、幼い頃からつい最近まで全く無いに等しかった。そう、一時期あの田舎で過ごした以外は。

「……」

暫く玄関で待つが、おかしい。普段であれば即座にリビングから迎えに来るのに反応が無い。

仕事の日は残業もあり時間がまちまちで、夕食の支度が間に合うようにと「帰る」メールを入れる。するとユリは帰宅時間を見計らつて玄関で俺を待ち構えている。残念な事に殆どが奇想天外な方法で、だが。

「お帰りなさい」 全開の笑顔で。

「お帰りなさい」 白いエプロンを着けて。

「お帰りなさいませ」主人さま「エプロン着けて三つ指突いて。

徐々にレベルが上がっているのは、俺の気のせいではないだろう。
一体何の拷問か。

俺好みに仕上げた外見。少しの動きでもフワッと揺れる髪、小さな彼女を可愛らしく彩る服。決してメイド服など……確かにそれはそれで非常に似合うが、仕事から帰つたばかりの俺には理性という名の籠を緩ませてしまつ兵器に過ぎない。毎回これでは俺の身が持たないので、帰るなり毎回すぐさま風呂に入り頭を冷やすのが恒例となつた。

風呂から出れば、出来立ての料理がテーブルを彩る。その献立は、俺が『家庭の味』として心の底から望んでいた数々だ。田舎の祖父母が作つてくれた、心の籠つた料理を思い起させる。

ユリは料理を作つた事が無いと言つていたが、親の作る姿は良く見ていたようで特別大きな失敗はなくこなしていつた。いや、一回だけあつたな。ヨーグルトに塩を入れていた。味はとても語れるものではなく、鼻から吹かなかつた自分を思い切り褒めたい。恐らく一生のうちで食べる不味い物の上位に食い込むことは間違いないだらう。

そして夜も遅い日があるといつて、俺と同じく食卓につき食事を始める。

『『いえ、私が一人で食べるのが嫌なだけデスから。実家ではいつもみんな揃つて『イタダキマス』だから、なんとなく私もそういうクセがついたといつか……気にしないで下サイ』と、何でもないようには眩しい笑顔を向けてユリは言つた。

駄目だ、可愛すぎる。

己に課した一ヶ月の期限を、我を忘れて破りたくなる。あの小柄な肢体をこの腕に掻き抱いたらどんなに心地いいだろうか。全てを剥き出し全てを刻みつけてしまいたい。それほどに俺は……ユリに心を奪われていた。

「……いないのか？」

どこか出かけるとは聞いていないが、といぶかしみながらリビングのドアを開き、すぐ傍の照明スイッチを入れるとそこには。

「 つー

いた。ユリが、いた。

いつもや見たように、ソファの背もたれの上にうつ伏せになつて、両手両足をだらりと垂らしていた。喉元まで出かかった声を辛うじて抑え、そろそろと近づく。

「おい

声をかけるとピクッと反応して、「……あー」と返事をしながら緩慢な動きで座席へと落ちた。

「あー……。お帰りなさい、テス」

いつも変だとは思つてゐるが、今はとりわけおかしい。怪訝に思いソファ正面に移動しユリをよく見る。特に体調が悪いようには見えないが、いつもテンションが高いとか高くないとかそんな言葉では表現できないほど感情豊かなユリが、ここまで大人しいと心配になる。

「どうした。調子が悪いのか

探るように顔を覗き込むと、途端バネ仕掛けのよつに飛び上がつてドアの外へ逃げた。

階段を駆け上がる音とともに叫ばれたそれは、確かに何事かあつ

そしてその意味とは……。

ユリの目が、まるで泣いたかの様に赤かつた理由に繋が

るのか？

状況変化（後書き）

9月1日 18時 妄想部
http://mypage.syosetu.com/1445
26/

「これ、ゼッタイ、心の汗だよおおおー！」

気付いたら家に帰つていて。

気付いたらソファの背もたれの上にうつ伏せになっていました。

あー……何やつてんでしょーね、私つてば。

ぼんやりと同じ場面が何度も何度も目に浮かぶ。カチヨーとリーダーが繁華街にあるカフェで、テーブルを挟み向かい合つて談笑している姿。

もの〔す〕いお似合〔テヌ〕三あの〔人〕

あー、そーですかそうですか。
ちおー一人さん何かしらを育んじやつてんの。なに、私キツカケで出
会つたつてことかいな。そんでもつて、私、蚊帳の外なんですかい。

なんだ。ワタシ……。

「おい」

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର ପାତା ପାତା ପାତା ପାତା ପାତା

盛大な悲鳴を上げてしまう所デシタが、ぎりつきりで飲み込み、しかし体の反応は抑えきれずまるで漫画のようにびくうううと跳ねて、いやでも返事返事と思つて「……あい」と自分の声でないようなく田へ言ひ答へる。

ちょいと、力チヨーいつの間に戻つてたのさ！

ちつとも気付かずいたけれど、そういえば辺りは薄暗く、帰つてから相当時間が経つたのが窺い知れる。のろのろと座面に移動してああそつこえればと思い出す。

「あー……。お帰りなさい、『テス』

お迎えの挨拶をしていませんデシタ。帰ってきたのを気付かぬ私でしたが、挨拶くらいは……。しかし全く力が出ない。どうしたんでしょうね。別に風邪を引いたわけじゃないのに。カラダに力が入らないつつーか、気持ちに力が入らないつつーか。

「どうした。調子が悪いのか

カチヨーの声が近くで聞こえたと思つたら、いつの間にか移動したカチヨーが私を覗き込もうとしていた所だった。

「ひいいーつ！ 何でもありませんから———つーつー！ ええつ、ほんとに何でも！ 『ご飯すみませんなんか適当に食べてください！』

ムリムリムリ！ いま顔なんて合わせられませんつてええ！！ 飛び起きてダッシュで一階の部屋へ駆け出し、ドアを開けて勢いよく締めた。息切れしたまま床へ大の字にじゅうと寝転がる。

なにやつてんだわたし。

家政婦代わりじゃなかつたの？ 『ご飯の支度すらしないなんて条件に……条件……。』 そうだよ、この同居生活つて元々カチヨーに原稿取り上げられたからじやないのぞ。

そもそも。そもそも言つてしまえば例え原稿取り上げられたからといって、こんな条件飲むことはないのだよ。外見オサレにしても

らつたり、服を買つてくれたり、美味しいものを食べに連れて行ってもらつたり……どちらかといつたら良い思いしかしていらない気もシマスが。

バツイチだらうが関係なしにモテモテ大人気　な力チョーの家に、残念の代名詞である私が一つ屋根の下に住むつてありえませんよね。むつちや馴染んでいた自分がコワイ。だつてとても居心地が良くて、自分の家かの様に過ごせて……。

いやいや、おかしいでしょ。待てまでマテ。

本当におかしい。普段奥底に引っ込んでいる常識人な自分がようやく「現実ヲ直視セヨ」と指令を下してきた。

そうだよ。

そなんだよ……。

私が、力チョーと、一緒に、いるのは。

期間限定の、家政婦。それだけだ。

ふわふわのかドロドロのかわからない気持ちの着地点がようやく見つかった気がした。そうだよ、超シンプルじゃないか。一ヶ月……いや、あと半円もしたらフツーの上司と部下としてまた田常が戻るだけだ。

それだけ、それだけ。

それだけの事なのに何でこんなにも胸が苦しいのか。

寝転がつたまま天井を見ていた私の目の脇から、温い感覚のものがどんどん下に落ちていく。何だこれ気持ち悪いなー、と思つて手で触ると。

「……なみだ、デスカ」

え、なんで私泣いてんの。意味分かんないんですけど。泣く意味分かんないんですけど。ひょっとして雨漏りしてそれ顔に当たつてんじやないのちょっとカチヨーここ欠陥住宅ー！

……つて考えたけどなんか超むなし。んな訳ないのはいくら私でも分かつてる。

さつきから堂々巡りで、結局答えが出ているのは期間限定家政婦つちゅーだけで、このなんだかモヤモヤした気持ちの置き所はよく分からないままだ。もうメンドクサイほつとこりー！ 後回し後回し。とにかく後半月家政婦頑張つて、んでもって原稿返してもらつて、それで 家に帰ればいいんだ。家イコールこここの家が一番最初に浮かぶのは……仕方ないデスヨね？ こここの所ずっとこの家で過ごしていたんだから。

私の家は、山のある田舎。ここには、カチヨーの家。

私は、カチヨーの家の家事をして、あと半月もしたらお役御免になる。

うし。

そこさえブレなければ終わる。カチヨーのアレな話をリーダーから聞いて、ちょっと同情してしまいキスもりハビリになればと許していましたが、ちょっと踏み越えすぎた気もシマス。超イマサラだとは思いますが、もう分をわきまえる行動をするつすよ！

……今晚のところはとてもじゃないけど平静でいられません。

明日！ 明日から、またキッチンと家事をやりますから。

そう心の中で盛大に謝つてから布団を敷き、でも何もかもする気になれずにそのまま寝てしまいマシタ。

一言物申すのデッス！

まわね。

「うなる」とは分かっておやいましたかね?

私は毎度のことながら自分の身なりを確かめた。うむむ、またしても……。化粧は落とされ、髪もサラサラして、肌もさつぱりして、コンタクトも外され。そ・し・て（ここ一番重要）……パジャマをキチンと着替えて。

ありえねえええええ！

布団から上半身を起こして、いた私は、頭を抱えてウンウン唸つた。
もうせ、ずっとじずっと現実から色々逸らしていましたが、私もですね、そりばつかりじゃーだめだろつ
つて曇りなき眼で正面から当たるのテスヨ！ 参ったか！！

つぢやないね。

大体今日は仕事だしつ。

力チヨーとはどうも顔を合わせ辛い。あんな場面をみてしまったし、それを見ちゃった事も言いづらいし、夜も不振な態度を取ってしまった。おかしな言動をしといて、何事もなかつたように挨拶すら交わせないよう。

えいやつと起きて布団を置み、身支度を整えてそろそろそろそろと足

音を忍ばせて階下へ階段を下りる。

力チヨーが起きてくる前に朝ご飯の支度を整えて、そろそろかな

つて時にまた自室へ引っ込もう作戦だ。

「うむ、これならば私の家政婦としての役割はキチンとこなせるし、顔も合わせずに済むといつなんともナイスなアイデアってなものだ！」

リビングに入るドアをそつと開けて、台所へ……。

早朝というのも忘れて大声で叫び、反射で口を手をやりこれ以上の近所迷惑をかけないよう押さえた。

「おはよう。早いな」

力チヨーがソファに座り、新聞を読みながらコーヒーを飲んでいた。

なんてこつた！ 早朝がんばる小人さん計画が台無しじやないか！ 顔合わせ辛いつづーのに何でいるのさ！

「かちよお……随分早起き『デスネ』

「まあな。仕事も立て込んでいたし、それ以上気になる」というのがあつてな

「やつですか。では、」飯の支度をしつづけた。

「ユリ、なにがあつた？」

「
え」

「『いつも昨日の夜からおかしい。』だった」

え、ちよ、ねえな！」。

バサッと新聞紙をリビングテーブルに置くと、立ち上がりてカチミーは私の腕をつかみ、クルリと向き合ひつつに捻った。

「熱もあるのか？」

ひょいとおでこにカチミーの手が当たられ、その手のあまりの大きさに、硬さに、温かさに……まるでオデコに心臓が瞬間移動したようにドクドクと鼓動が激しくなり、触れたその場所に対して全身の熱がオデコに集中してどわあああああ！ ダメダメダメダメ――ツ！

「ちよ、カチミー！ わざわり禁止テス！」

ピヨーーー！と一步後へジャンプして距離を取る！ あぶねええ！ つておおい！ 手、手、離してええ！！

「えりうこん」

「へへどうしてもいつしてもクンモノソモねえテスよつー！」

「下品だな。 何故そんなに怒っている？ 热は無こよつだが、顔が赤い」

「ほつとこて下サイー！」

「ゴコ」

掴まれたままだった手首をぐいと引かれ、一步あけた距離が再び詰まる。見上げた位置にあるカチョーの顔が迫ってきて、吐息が感じられる辺りでハツと気付いた。

二、これは

「だめ、
デス！」

咄嗟に、カチヨーの口へ私のもう一方の手で押された。うお、間一髪！

「き、き、き……ゴホン。接吻も、駄目デス。ほら、カチヨーはさ、私なんかでリハビリじやなくつても……」

ほかに、いるでしょう？ キスできる相手が。

辛うじて飲み込んだ語尾は、自分でも何言ってんだ私！　つて思つほど、感情に支配されていた。

え、でもさ、これって、まるで……。

「ととととにかく、接触禁止デス！あと一週間でゲン」「一貰つて出て行くだけの家事労働者なんデスよね私つて！変な誤解されない為にも適切な距離をお持ち下せ……つきやおおうー！」

カチヨーの口を押さえていた掌に、温かくてぬるりとした感触がしてぱっしと手を離す。

「何を――――――つ――――――！」

「息がしづらい」

「あ……」もつともで。スンマセん……って！ 話めないで下サ
イッ！」

「そろそろ朝食の支度をしてくれ。腹が減った」

「う、そういうえば。

家事労働だと自分に言い聞かせた手前、キチンとやらねばいけませぬ。それはそれ、これはこれとしてとにかく支度を！ ……ん？

「カチヨー、手を離して下サイ」

するとカチヨーはこれ見よがしに私の手首を握ったまま眼前に持ち上げ、ちゅうっと腕の内側に吸い付いてから離した。

「～～～～つー！」

「……待つてる」

伏目がちに視線を落とし、それだけ眩いたカチヨーはアッサリと手を離し、ソファーに腰をざさりと落として再び新聞を開いた。

待つてる？ 何を？ 『はんを？

よく分からぬい眩きが頭の中をぐるぐる回りながら、カチヨーの出勤に間に合つよつ食事の支度を始めた。

わ、わたしとしたことがあああっ！！

なんだかんだ、話を逸らされた気がいたしますよ。
確かに時間がなかつたけれども、一言で済むと思つんですね？

お触り禁止デス。

分かつた。

キスも禁止デス。

分かつた。

ほら！ 超シンプルでそー！ これで問題なく最終日までたゞり
着けるつてもんデスよつ？！ なのになんで力チヨーはああもずる
く逃げるんじょーか。

結局、朝メタモるのもお触り禁止もなにもかも解決せず。

大きく大きく溜息を吐きながら取引先に送る書類を封筒に折り込んで封をする。

ま、力チヨーは同居を始めても、会社ではそれ以前と全く変わることのない上司としての態度だったので、逆に私としてはありがたいのデスがね。

力チヨーがリーダーとアチチの仲だとしても、それならそれで好きにやつてくださればいいし、私の動悸息切れ体の火照りつていう症状が起らなくて済むのなら、それに越したことはない。穏やかにひつそりと同人誌の世界へまた潜るのデス。以前の生活へね！

……おっと、もう空じやんか。
喉が乾いて、マグボトルを持ち上げると軽かつた。そういうやさつ

き飲み干したんだっけ。

空のマグボトルを持ち、給湯室に入る。ワンフロアのただつ広い社内は、部署ごとに机を纏め島の様になつてているのデス。一番端の島の奥に、その給湯室 室つていつても、暖簾で仕切つただけの簡単なもの。この会社では、それぞれが好きな時に利用可能で、各個人で自分の分だけ作るよう決められている。お茶配りの習慣がないつてのはオフィスラブ系の漫画を読んできた身としてはちと寂しいデス。王道、やつてみたいじゃないデスか！

『「部長は濃いめの緑茶で、課長はブラック」「コーヒー、係長はミルク入りコーヒーで……」新入社員の私は、先輩から教えられたりスト通りに三時のお茶をいれた。まずは部長から配り、役職順に配り終えたら今度は勤続年数順に……。

覚えなければならぬ業務、新人女子が担うお茶だし、掃除などで頭がパンク状態だつた私は、ぼおつとしていたと思う。課長専用のマグカップを手に取つた途端、滑つて落として割れてしまつた。

「熱つ！ す、すみませ……」「君！」足に跳ねた「コーヒーとマグカップの傷したらしく、それでも落としてしまつたコーヒーとマグカップの処理をしようとしたしゃがみ込んだ私に、課長がなんの前触れもなく私を抱き上げた。「きやああつ！ あのつ、あのつ！」「黙つて。医務室にいくよ」有無を言わざぬ態度で、颯爽と歩き出す。私の重さをいとも軽く抱えるその力は、頼れる男性のものだつた。密かに憧れていた課長に密着してしまい、私は足の痛みどころではなくつて……』

『……すつ。

「『やせ』」

「沸騰してるだろ？がヤカンも頭も。阿呆ー。」

「イタタタタタ……ちょ、カチヨーー。」

「茶を淹れるのか。俺にもよこせ」

カチヨーは持っていたマグカップを私の頭に落としたあと（しかも角デス！）、それを流し台の上に置いた。

「ついでだらり。」

「う、ま、まあいいデスけど」

「お前の実家の作る茶は、美味しいからな」

「あああ、ありがと『やせ』マス」

褒められれば悪い気はない。グラグラに煮立つたお湯を急須とマグカップとステンレスマグに入れて温め、急須の湯は流しに捨て、茶葉を入れる。そしてゆらゆらとマグカップから優しくのぼる湯気の形を見て、マグカップとステンレスマグのお湯を急須へそそぎ入れた。

「手際いいな

「あ、はい。家では食後の度、休憩の度、何でもかんでも事ある」とここにつつも飲みますんでね

逆にこれが当たり前だと思っていたけれど違うのかな？ 県外に出たことのない私は分からなければ。

「うん、美味しい。ユリが淹れたから余計に。ありがとう」

淹れたお茶を一口飲み、ふわりと笑いながらマグカップを落とした私の頭のてっぺん辺りに手をやり、くしゃくしゃっと撫で回し給湯室を出ていったカチョー。

うわ……。

なにそれ反則デスヨ！ バツキヤロー！ それどんだけ攻撃力あるのか分かつてマスか？！

……。

あれ。

私なんでもまたこりや動悸が激しいのデスかね？ ピンクの小粒飲むべきか。いやいやいや、ありや便秘薬だつたの！ なんか動悸息切れに効く何かしらの薬飲むべき？ これ病気じゃないの？？ 膝に力が入らなくなつた私は、ズルズルと背中を壁に預けて座り込む。なんだつづーのよこの症状！

「あや、コリ子ちゃんどうしたの？ 具合悪いの？」

ふわつといい香りが近づいたと思つたら美穂先輩デシタ。一個上のキレーなお姉たま！ 給湯室近くの島について、何かと気が利く癒し系女子なのでっす！

「ややや、何でもないデス！ ちよいとばかり腰のストレッチをやつてしまして！ そづそづ！ はんずかすい～からこいつそりと！」

座り仕事つてのは、結構腰にくる。そんなに不自然じゃない言い訳をして立ち上がった。

美穂先輩は「大丈夫?」といつて支えてくれながら、心配をしてくれださる。なんていい子やアンタ！嫁にしたいわ！

「封筒あとポストに入れるだけでしょ？ 私外に出る用事があるから、後で私に渡してね。袴田課長にも言つておくから」

「そんな、悪いデスよ」

「いいの、ついでよ、ついで」

ふふっと花の咲いたように笑う美穂先輩はほんとにかわいいなああ！ 抱きついてクンクン匂い嗅ぎたいくらいに！

「それにしても袴田課長、少し雰囲気変わったと思わない？」

「へ？ そーデスカ？」

私が見たカチヨーは、会社では全く変わりなくオフの姿も基本変わつていない。ただちょっとやたらに触つてくるなーとか、気付いたら視線が合う事が多いいなーとか、あと、あと……やけに優しい気がするなーとか……あわわわわっ！－

色々思い出してギャーっとなる私をヨソに、美穂先輩は顎に手をやり首を傾けた。サラサラッと髪が肩に零れて、ああそれだけで眼福でゴザル。

「なんとなくさ、いつもピリピリしてたんだけど、こここの所穏やかになつたなつて。私が新入社員で入つた時は丁度離婚されたばか

りだつたらしくて、すつごく怖かつたわ！ といつても、怖いのは雰囲気だけで話せば丁寧に応対してくれるんだけどね。で、いつの頃か徐々に険がとれてきて、今なんでもうオーラが違うわ！ 何かいいことでもあつたのかしらね？

そうかそうか。前の奥様と別れて、暫く経つて私を介してリーダーと会つて、だから穏やかになりなすつたのだねカチヨーはよかつた、よかつた。いい事じやないか。

美穂先輩はマグカップにティーパックを入れ、お湯を注いで「じやあお先に」と机に戻つた。出て行くのを見送りながら、心のどこかが凍つているのに気付き。そしてまだなんかモヤモヤしてるようなしてないような変な気持ちがあつて、こりやまたなんだろうと考えたらさつきの妄想を思い出した。

あつ、あれ？

私、ノーマルな妄想してたああああああつー！

混乱、のひこ、凍る。

その日は退社の時間になるまで「えー」「ビして」「なんで」の諧言が繰り返された。

まさか、この、私が！
まさか、この、私がああつ！

『B-L妄想をしなかつただなんて』

ありえんよこりや。一大事デスヨ？？

B-L好き歴約八年。中学一年の時に友人から借りた漫画（しかも同人誌）に衝撃を受け、それ以来どっぷり腐女子してきたのですが……。そりやーネル^{ヘル}も読みます。それなりに好きであります。でも「へー」と眺めるだけでそれについての妄想はしたことがあります。

ほぼ一日中ボンヤリとしていたけれど、本日私のやることったら在庫管理における個数把握の為のナンバリングスタンプでシールを作ること。ザ 下つ 端雜用係ですからねつ。

勝手に番号が一ずつ動いてくれる便利道具で、シールにガチャガチャとスタンプを押すだけ。ひたすら枚数重ねるので、特に周りから不審がられることがなく終業時間を迎えた。うむ、単純作業で助かった。

手だけは動かし、脳内ではアレコレ妄想を試みるもののが悉く惨敗。どうやっても男×男ではなくて、男×女のカップリングになり、どう

うやつても何故か『課長』といつキーワードが出てきてしまうのだよ。

あああ何故だ―――！　健全な（？）BL妄想がしたいですううう―――！

さて、と。がっちゃんことタイムカードを押して本日の業務終了のデス。やけにここレトロだなーって思つたら、どうやら社長の趣味らしい。社長はあちらこちらに自分から飛び回るらしくて滅多に会社にいない。私も入社したその日にお目にかかれなかつた位謎な人デス。そんな謎なヒトつてムラムラ……じゃなくて、ワクワクしますよね！　私はアリだと思ひマス。ええ、アリです。

今日は寄り道があるのだ。ちなみにスーパーは寄り道に含まない。だつてそれ日常ですもん。

本日は帰りに例の眼科へ寄るのデス。カチヨーに連れられていつたあのドジ女医のいる、あ・そ・こ。コンタクトレンズは一日使い捨てのタイプで、合わなければまた違うのをという話でまずは一箱購入をしたのだ。左右の度数が一緒だつたから、間違わなくて済むのデツス！

一箱三十枚入り。左右で使えば十五日。オマケで三日分貰えただれど心もないので、行ける日に行つとこうと思つたのだ。

一度検査したし、日数もそう経つていいからメンバーズカード見せれば即購入できたはず。できれば……あの口の悪い女医と顔を合わせずにサラーツと購入して去りたいのデス。こええええもん！　エレベーターで一階に付き、気合一発！　頬にバチーンと入れたらいつのほか痛くてちょっと涙が出た。

「……何やつてるんだ」

「ぎゃ、カチヨー！」

声が頭の上から降つて來た！

オフィスビルのエントランスの端っこにいた私は、思わずホールドアップ！ なんでもありますーん！

力チョーは確か取引業者へ商談に行つていたはず。今戻つてきたのですねお疲れサマンサ。つてか、何故だこんな人気のない所でここまで大接近しても気付かないなどとはな、私！ くつそう力チョーめ、お主やるなっ？！

「見せてみる」

「へ？」

なんのこつちゃと尋ねる前に、力チョーは私の頬を両手で包み、そして左へ右へと目視する。

「……すこし赤くなっているな。痛みは？」

ちょ……わ、わあああっ！ ほっぺた！ わあああああっ！！

「ダメダメだめデスいやあああっ！－！」

ガシツと頬に触れていた力チョーの両手を掴み、放つて、一目散に逃げ出した。

ありえんて！ むつちゃありえんて！

おつきい手が私のほっぺたに触つたってだけで、心臓のリズムがおかしくなる。ばっくんばっくん激しく鼓動をして、こら寿命縮めるな！ 一生の内の鼓動数は決まってるんだからー！ と、それをなんとなく信じちやつている私は押さえるのに必死。

会社から相当な距離を駆け抜け、私はようやく足を止める。相変わらず心臓はバクバク音を立てていたけれどこれはまあ走ったせいだと無理矢理決め付けた。

ハアハアと乱れた息は何かしらイケナイ妄想を搔き立てられる……よね。こりやちょっとB-S妄想いけるんでないかい？と思つたけれど、酸素足りずにそれどころではない。とにかく呼吸を整えよう、繁華街の中心部にある南北に長く伸びた公園のベンチへ座つた。

どうしちゃったのでしょうか、私。

力チョーと住むようになつてから、思いつきり変デス。いえ元々変なのは自覚済みですけれどもね。ここんところの自分ときたら、力チョーに対して気持ちが一喜一憂振り回されっぱなしですよ。まあ初日からアレコレ肉体的にも連れまわされてましたけれども。

私に対しても妙に鋭かつたり（主に妄想している時）、トラウマ克服に協力すると私が言えば、それから妙に優しげにキスしてきたり（まあこりや私の自業自得な部分もアリ）、元々一ヶ月後に大事な用があるから家事をしてくれつて言つた割に、部屋の中はがらんどうで家事以前の話だつたり（しかも私の好きなように揃えると家具家電購入任せマシタ）……私のもつさい外見をステキ女子にメタモるなんて。

どんだけ私、居心地いいのさ。

やることさえやれば、あとは好きに過ごせたこの一週間というのも。おそらく気持ちが安らげる空間でもあつたのデス。まるでここが私の……と誤解してしまうかのようだ。

誤解？ なにを誤解するのデスかね？ んー……？

それについてはモヤモヤつとしていて、原因が分からず首を捻る。でもさ、考えても分かんないつづっことはだよ？ これ以上それ

について考えた所で答えが出ないんだよー」と結論に至る。しないよ。

とにかく目の前のやることを終えようと、ベンチから腰を上げてコンタクトレンズ専門店へと向かった。願わくば、見つかりませんようにと願いながら。

「あら。袴田君の……？」

ギャー！ 言つてる傍から見つかってーーああ！
なんつータイミングよ！

内心の叫びを口から出す前になんとかぐいっと飲み込んで、俯き加減に「はあ……その節は」と小声で挨拶を返した。
うむうむ、穩便に！ それとなーく！ スルーでお願いしまーつす！

そんな私の心の内に気づかず、女医はコシコシッとピンヒールの音を響かせながら近寄ってくる。ちょちょちょ、その白衣にピンヒールつか！ どんだけマニア嗜好なんだよ！ と、対する私もマニア向けをよく存じな趣味嗜好を持ち出して勝手に恐れ慄いた。

超S、つまり「どえす」ですね、わかりますわかります！ あわわわわ。

ピンヒールすでに敗北した私はもう涙目になりながら、女医の促すまま待合室の片隅にある長椅子に腰掛けた。

この時間は受付も終わり、診る患者も最後の一人が診察室を出て。まだ店内奥でレンズの付け方を指導される人は一、二人いたようだけれど、こちらからは全く見ることはできない。

ああ……なんでこんなこと……。

「あのお、何か私にご用でも?」

用がなければ呼び止めるはずがない。モテー オーラーー ビンビンーーー の女医が、最近マシになつたとはいえ地味子な私に声をかけたところで、私は『BL本お勧めラインナップ』位しか返せない。そしてそんな腐の成分なんて一生縁がないだろう人に語つたとしても、絶対零度を凌ぐ冷たい空気が流れるだろう。間違いないっす!

そんな私の心配をよそに、女医は明るい声で私の来訪を喜んでいた。

「コンタクトレンズ、違和感無いようで良かつたわ。袴田君が連れてきたときはどんなだけイモっぽい子かと思つたんだけど、磨けばマシになるものね」

ちょ、失礼ザマスよー。あつてるけどもね残念ながら。しかしイモっぽいとは死語使いだな女医め。年齢がしれるというもののデスよー。

「は……あ、カチヨーのお陰デス、はー」

実際カチヨーがあれこれ連れ回してメタモルつたお陰で一皮剥けたので、それなりに感謝はしているのだ。

家族にも会社の人にも褒められだし、最近は自分を鏡で見て驚かなくなつた。最初の頃なんて姿見や洗面所通りかかつただけで「ぎやつ」と驚いたものだ。

キヨドる私へ、何故かどえすオーラはどこにも見えない女医は目

を細め、「でも良かつたわ」と柔らかく笑つた。

「袴田君、待つてたもの」　　なにを？

「だから私とすぐ別れたのよ?」　　だれと?

……え? 別れた、とな? それって……??

キヨトンとする私に、女医は意外そうな顔をして口を開いた。

「もう話聞いていいでしょ? 私と袴田君が結婚していたこと」

ウジウジのハリモソノサノ一週間です……。

それからどう家に帰ったのか覚えていません。

それからどう日常を過ごしていたのか覚えていません。

「普通」だったと……思う。

朝起きて、ご飯用意して、洗濯干して、掃除して。
会社で仕事をして、ご飯用意して、寝る　　それだけ。

心の中がこんなにもグチャグチャで、でも何にも反応できないほど固まつて。

やりなければならない事だけをこなし、毎日が過ぎていった。

多分私、カレー作ったんだと思うんだ。大量に作って、毎日朝晩とそれだけテーブルに用意しておく。朝早く会社に行く課長に出会わないよう、先に家を出て二十四時間スーパーで時間を潰し、そろ行つた頃かなと見計らつて家に戻り家事を済ます。

課長の仕事が今、立て込んでいるのは知つてている。だから帰宅も遅く日を跨ぐ事もしばしばで、逆にそれが今の私には丁度良かつたりもする。

私はカレーだけ用意して、帰宅を待つことなく布団に入り、寝たふりを決め込む。ちゃんと身支度してさえいれば、朝もいつの間にか服を入れ替わってるなどなかつた。最初からそうしていれば良かったんだ。寝オチするとか、どれだけ気を抜いていたんだ、私。

自宅でも会社でも……課長が話す機会を窺つてるのは気付いている。けれど私はそれに対しても息を殺してやり過ごす。話したら、

すべてが終わつてしまつゝ氣がした。

心が凍る。

ふと氣を緩めればそれが一度に覆いかぶさり、私の何もかもを否定し始めるんだ。

もう一人の自分が勘違いするなよ、と責める。

このままずっとこの家で暮らしたいなとか、ちらつとでも思つてんじゃないよ。単なる便利屋代わりに使われているだけなんだよ。その証拠に、職場で課長は上司という立場を一ミリも変えたことがないよね？ それはつまりこの一ヶ月という家政婦代わりの罰が終わつたら元通りにしたいという現われじやないのか。

課長は、本当は私に関わりたくなかつたのではないか。たまたま私がアレな原稿を渡してしまい、それをいいことに気軽に頼んだだけじやないか。

誰でも良かつたんじやないか。

だめだ、だめだ、だめだ。落ち着け、落ち着け。

無限ループに嵌る思考を無理矢理ぶつたぎつて、毛布を頭から被る。

自分は一体どうしたんだろう。そもそもどこからおかしくなつたかと言えばまあ原稿取り上げられた所なんだけど……それ以外は割合順調に過ごしてきたと思う。この家にいるともやみやたらにカチヨーはスキンシップをしてきたり、妙に優しかつたりで混乱する事が多いものの、比較的楽しく過ごしていた。

だけど……リーダーと二人でカフェにいるところを見てしまい、心に亀裂が入つたのは自覚している。どちらも私と近い距離にいたにも関わらず、一言もその様な関係になつたと教えてもらえず蚊帳の外だつたのがまず悲しかつた。

美男美女のカップル、いいじやないか。お似合いじやないか。

けれど課長の隣は私じゃないのがなによりも苦しい。その場所に座るのが私じゃないというのが、心を乱す。

けれどどうして苦しいのか、乱されるのか、当てはまる感情はさっぱり分からず余計に混乱を誘つた。

止めの一撃は、女医が放つた言葉だ。

もつ話聞いてるでしょ？ 私と袴田君が結婚していたこと。道理で親しそうなわけですよ。道理で何か含んだ物言いだったわけですよ。

バツイチとなつた相手はアナタでしたか。ああそうですか。結婚していた、と聞いて……亀裂の入つた心が粉々に砕けた。約束の期限まで過ぐすのは苦しい。課長の家だけに、気配が染み付きますきて息が詰まる。

こここのソファのここ的位置が課長の定位置で……とか、庭を見れば一緒に草取りしたな、とか。

あの時端っこに集めた草花は、まだ一週間と経っていないのに逞しく根を張つた。青々とした葉が風に揺れるのを、ボンヤリと眺める。

家に帰る事も考えた。考えたけれども、約束は約束だ。三つの条件を満たしてから原稿を受け取つて、この生活から解放されるんだ。そしたらきっと、この苦しさからも逃れられる……はず。

原稿、かあ……。

あれほど夢中だつたB級漫画。読むのも書くのも妄想するのも大好きだつたけれど、今は一つ心を動かさない。

なにもかも億劫で、食欲も全くない。

課長が自宅に帰るまでは、私はリビングのソファの上でだらしな

く寝転がっている。律儀に必ず帰るホールならぬ帰るメールはしてくれるの、そのタイミングで一階の部屋に行けばいいから。

今日は金曜日。週末という事もあり来週に向けての抱える案件も多く、また帰宅は深夜になるだろう。

明日は出勤するのかな。もし休みだつたら、身の置き所がない。またリーダーの所に……いやいやいや、それはない。実家住まいのリーダー宅には何度もお邪魔させてもらつたりお泊りもしたことがある。けれど会うにはすこし時間がいる。気持ちの整理が付いてから会つて、「おめでとう」と言いたい。

じゃあインテリアコーディネーターの……と思つたけど、研修で県外に出ている。そもそも彼女の家は足の踏み場を探す、じやなくて色々乗り越えなければならないものが散乱している。

あー……どうかな……。

「ひりりと寝返りを打つたら、バンッ！ と激しく打ち付けられた音がした。

「へつ？！」

何事かとガバッと起き上がると、もう一度バンッ！ と音がして、そちらの方向へ首をめぐらせるとそこは

「ううう！ ロラ開けなさいーー！」

「ひつ！ リーダーーー！」

リーダーに憧れを持つ男性は絶対見てはいけない程、それはそれは恐ろしい形相のリーダーが、庭に面した吐き出し窓の外で、仁王立ちしていました……。

怖——つ！

「ちみりーダーって怖いですよ。

あまりの恐怖に魂が半分抜けたけれど、こゝを無視でもしようものなら……向こう三年は祟られそうです。せ、せめて玄関から！とお願いして、玄関に回つて鍵を開けた　と思つたらもう開いた！　早いよリーダー！　あまりの形相にドアから逃げ出し廊下の角へと隠れようとしたけれど、それよりも素早くリーダーが私の腕を掴んだ。

「もうっ！　何やつてるのよ！」

「……な、なにがですか？」

「何がつて……分かつてないの？」

靴を放り出すように脱いだリーダーは、私をぎゅうっと抱き締めた。

「今にも倒れそうな顔してるじゃないの！　ああ、頬もこけちゃつて……バカねえ」

そういうて、私の頬を優しく撫でてくれたリーダー。

こんなになるまで……あの男、許すまじ！

と、ボソッと出した咳きは一体誰に向けたもの？　大体リーダー

は何で今ここに来たのでしょうかね。私、ちょっと顔を合わせるの
……心が厳しいようです。

「あの、御用つてのはなんですか？」

努めて冷静な声を出したつもりが、僅かに震えが混じったか細い音でした。

早く、帰つて、お願ひ！

しかし私の希望は叶えられる事無く、「ねえ、座つてゆっくりお話させて？」と優しい声を掛けられれば、昔からお世話をなつているリーダーに逆らえる訳もなく「……ハイ」と頷く事しかできなかつた。

お湯を沸かし、いつものようにお茶を淹れる。お盆に載せてリビングに運ぶと、リーダーはキョロキョロと見回していた。

「ふうん、課長さんていい趣味してるのでね」

「あー……、この部屋のインテリアは違いますよ」

リビングテーブルに湯飲みを置きながら、同じサークルメンバーのインテリアコーディネーターの資格を持つ彼女の話をした。『B A R A たいむ』サークルに先に入つていて、その彼女が誘つてくれて私はリーダーと知り合えたんです。大体コイツにより私は腐女子の道を歩く事になつたのですよ？ 件のB-L本を貸してくれたのは中学以来ずっとツレの彼女です。全ての始まりは彼女なのだ。

「初めてこのお宅に来た時、カーテンとソファとリビングテーブルしか無かつたですから……つと

ああ駄目だ。

これから彼女となつてこの部屋に住むかもしないのに、私がベラべら喋つて気分がいいわけない。慌てて口を噤む私を別段気にした風もなく、私が渡したお茶を一口飲んだ。

そして湯飲みを置くと、「ねえ……」と私の手を握る。

「りりいたん。一体どうしたの？ メールしても電話しても返事がないし、課長さんに聞いても『分からない』の一言よ。……何か悩み事あるんでしょ？ 私で良かつたら聞かせて欲しいの」「何でもありませんよ。本当に……」

「何でもない訳ないじゃない！ チャットにも出てこないし、あのキャラがどうこうっていう妄想の感想、ブログも更新されてないし、同人本のお店にも姿見せてないでしょ？」「

私、すごいな。

確かにそれが全てだった今まで、どれもやつていらない事など無かつた。

二次元最高！ といって憚らない腐った青春。むしろ腐るのが青春だ！ 何故皆分からいかなかつ？！ と思つていたイタイ子してたね。

「りりいたんに連絡取れないから、課長さんに聞いたわ」

課長、と言われた途端、バクンと心臓が大きく鳴った。そつと繫がれていない手を胸に当てて、どうかどうか静まつて！ と願う。

「カレーを月曜日からずっと……しかもりりいたんが食べている

「どうして、さう心配していたわよ？ それに今は仕事がとにかく忙しくて、気になるのにどうしても時間が取れないって……参っているわ。だから私が代わりに様子を見るよう頼まれたんだけ

「うるさいやつだ！」

「え？ どうして謝るの？？」

「……え、あの、私あひなかつてど……」の様なやんと云ふか、「お氣になさりす」

「ちがんと見る……って、何言つてゐるの？」

「ですから、リーダーは私に気兼ねすることないですよ」

「は?
気兼ね?
え??」

大きな目をパチクリと瞬かせたリーダー。あれ？ 通じないかな？

「だから、私は期限終わったら出て行くので、安心してお付き合
いをしていただけ
」

「誰が？」

「え、リーダーが

「誰と?」

「課長と……」

「……」

「あ、あれ?」

「……っはあああ?? もうしてやつなるわけ?」

思わず腰をうかせたリーダーは、はああっと大きく息を吐き出しつて、再びソファにじりりと腰掛けた。

じりしてそななるも何もないんですけどね、なんて思う私に、あのね……とやけに気が抜けたような声でリーダーは口を開いた。

「意味がわからないんだけど」

リーダー、一言、ドーン――

それから私がそう思い至った経緯を、たっぷり時間をかけて根掘り葉掘りリーダーに問いただされた。

イケメン上司の観察記録の提出を言われたこと。

ノゾキやコスプレなどの指令で間接的に反応を窺っていたのではと思つていたこと。

キスだって、トライウマ改善計画に則りとにかく私で慣らしておこうって考えたんぢゃないかといつこと。

それから……カフHで一人いふところを見てしまったこと。

重く重く胸の中で圧し掛かっていた気持ちを吐き出せて、幾分マシになつた。

だから、もう遠慮する事ありませんよと付け加えると、リーダーは……。

「……あんつの、バカツ――！」

バーンとソファーを殴り（殴り?!) 立ち上がって、「どうしてそうなるのよ!」と吼えた。

ただでさえおつかないリーダーが怒りのオーラを纏わせたら、それはもう最強の一言に及ぶ。

「ひ、ひええつ

「りりいたん? 最初にはつきり言つておくれ。私は、課長さん

とは全く一切まるつきり間違つても何にもないわよー。

「ほあつ？！」

「ああもうホント」の子つたら……そんな事で気に病んでたのね。りりい たんが腐女子じゃなくなつたら普子になつて私がつまらないじやない！」

「ん……？ 後半にか聞き捨てならないよ、うな……？？」リーダーは私の頭を胸に抱えてぎゅうぎゅう抱き締めた。むおお、オムネ、オムネ！ やーらかいいいい！

「バカねえ。課長さんは鑑賞するだけよ？ だつて私には『俊介』君がいるもの。あんな腹黒好みじやないわ。大体利害関係が一致して協力しただけだもの……つと。それはともかく、本当に何もないわ。安心してね？」

俊介とは、リーダーが今一番大好物のBLキャラクター。実家住まいのリーダーの部屋は壁や天井に至るまでそのポスターがペタペタ貼られている力オスな異空間。家族誰も立ち入れないリーダーにとってパラダーアイスなお部屋なのです。

歴代彼氏誰も入ったことないらしいところハミー情報は正直どうでもいい。

更に、前彼に腐女子がバレて振られたなんて事も、もつどひとつでもいい。

それよりどれより、リーダーのたわわなオムネに挟まれた私は窒息寸前酸素ギブミー！

そりやーこれ天国に違ひないよ。女子な私も、えつらく気持ちがいいのですからつ！

しかし限界を感じタップをすると「あひ、『めんねりりいたん』とやつと解放された。

「でもそれだけじゃないんじゃない？ まだ他に氣になること、あるでしょ」

「あい……。課長の元奥さんが分かりまして……」

眼科医の、あの病院の女医さんで、と言つただけでリーダーは誰か分かつたようだ。大きい病院の受付業務をしているリーダーは、その辺りの情報に明るい。

再びソファに座りなおし、お茶を一口飲んで「あの人ね？」と、トントンこめかみを指で叩きながら記憶を辿っているようだ。

「うーん、結婚してた……とは知らなかつたわ。あまり表立つて知らせていなかつたのかしら。でも過去の事でしょ？ 問題ないじやない」

「問題、ですか？」

「そうよ」

何のことだか全く分からずコトーンと首を傾げたら、リーダーはそれを見て天を仰いだ。

「なんだ、自覚無いのね……。絶滅危惧種だわこの子」

はあーっと何度も息を吐いて、私に向き直る。

「何で自分が落ち込んでいるのか分かる？ 誰によつて気持ちが

辛くなつてゐるか分かる?」

「誰に……誰つて、そりや。」

「課長? ……です。リーダーと一緒に見るの何でか苦しかったです。元奥さんと聞いて、納得もしたけど胃の中に石が入ったようにずびーんつて重くなつたんです。」

課長が私に優しくする度になんていうかもう気持ちが、急上昇急下降三回捻りの大回転一つていうそんな気分になるんです。こんな、こんなの……初めてでつ……」

今も何かきゅうつと胸の奥が痛んで、両手で胸を押さえた。切なくて苦しくてもどかしくて、何の感情か分からぬ塊がグルグルして、じわじわと眼尻に涙が溜まる。

「『こんなの……初めてでつ……』。ああ、いいわねこのセリフ。使わせてもらうわ」

リーダーがニヤニヤ人の悪い笑みをしながら携帯のメモ機能を呼び出してポチポチ打ち込む。ちょ、リーダー、なにしてんのぞ!-

「あー、もう気が抜けたのよ。だつて答えは一つしかないもの」

「いいこと? と、胸を押さえる私の手をとり、ぎゅっと握るリーダー。」

「課長さんの事考えるの苦しいのよね? どうしようもなく。でも、ちよつとした仕草やちよつとした優しさにドキドキしたり、ムズムズしたりするんじゃないの?」

「うー、あー……はい……シマス」

「それはね、ズバリ言つと……」

「い、言つと?」

リーダーの目がキラリと光つた(気がした)!

「それは、恋よ!」

……へつ?

大暴走は止められないー！ うわあああっ！！

「い、とな？
こいつなんだ。」

「恋愛！ ドキムネ！ りりいたん、分るでしょう？『俺はいつも間にか彼のこと、気付いたら目で追っていた……脳のドキドキが苦しい。はつ！ これって恋なのか？！』の、恋よ！」

一人でなんか盛り上がりましてねーなんて半目になつて見てたら、両肩掴まれて前後に激しく揺すられてガクガクした！

「りりいたんの事言つてるのよ私はーっ！」

「ほ、が、が、がつ、やつ、め、てつ……」

「あらやだ。りりいたん、大丈夫？」

大丈夫かつて、やつたのリーダーでしょがー！
パツと手を離してくれたものの首と頭がコレコレでコラコラでふ

おおおおつ！

「げほげほがほ。……そ、そりで、私がつまり、そのう……恋をしている、と？」

リーダーの説明はアレだけど、なんとなく分かつた。

恋……恋、ですと？！ ワタシがっ！

がびーんと固まる私に、握りこぶしを作つて更にリーダーは力説する。

「そつー。腐女子といえども!! 次元は別腹よー。」

そ、そこですかっ？！ 問題点、そこなのですかっ！？
ぎょっとしながら口をパクパクしてしまう。ああ、声が出ないや
驚きすぎて。

「いい？ 大事な事だからちやんと聞きなさいよ？ 腐女子が腐
女子でありながら、リアル世界を生きられる魔法の一言をー。」

「ひつ、ひやーっ！」

なにをいうんだリーダー！

リーダーの独壇場に半分引きながら脊髄反射で返事をして、ソフ
アの上に正座に座りなおし大人しく聞く。

「いいこと？ 『それはそれ』、よ

「は……」

「それはそれ。わかる？」

「大事だから一回いって、わかりますわかります。いや分かったの
は大事だから一回言つて所であつて、リアル世界で生きられるな
んとかつてのがもうそこいらへんが……わあああつ」

「とにかく！ つりいたんは課長さんの事が好きなのよー。自覚

なさいつ……

で。

何故か私、会社に来ています。

辺りは真っ暗。そりやもう夜の十時とうに過ぎますからね。しんと静まり返った会社にそろりと足音を忍ばせて入る。社員なので入るのは可能デス。

しかしこの時間まで残っている同僚はいないでじょう 課長以外。

よつこらしょと手荷物を抱えなおしてエレベーターの開閉ボタンを押す。あああ…………どういつた態度をとればいいのでしょうか…………。

課長に対して、態度悪かつたですよね、私。

いつもの階数のボタンを押して、上昇する。

ソワソワソワとなにかこひ、ざわざわするんですねー。

ザラッとしたような、くすぐったいような、そんな気持ち。うかれポンチ（父親直伝死語）なワタシは、到着して左右に開くエレベーターのドアから、えいつとジャンプしてフロアに着地した。

リーダーは『問題ないじゃない』と言つた。

確かに、そう。

リーダーとは何かしらの協力関係にあるだけで、前妻とはとっくに別れている。そしてそして、今現在付き合つてている人はいないようだ。リーダーは教えてくれた。その後ボソッと「付き合つてる人も何も……」って呟き、それは何かと尋ねたら……につこりと、そりやーもう綺麗な笑顔で「なんでもないわ」とおっしゃつたわーー

——くつそ、ゼッタイ何か握ってますぜ！

悔しいがワタシでは全く歯が立たない。掌の上で踊らされようが全力で面白がってるリーダーには逆らえないのですよ。

でも、リーダーは基本私の事を可愛がってくれている。今現在可愛がってくれているという表現は微妙ですが、妹の様に思つていてくれるらしい。「うちの弟なんかよりよっぽど可愛いわ！」と常日頃言つてますからね。

ちなみに、弟モデルでB-L妄想しないのかと聞いたらキレられました。汚さないで私の世界を、と。

……まあ私も葵兄いでは全く妄想できませんので。つていうかゼツタイいやぢや。

とてとて歩みを進め、わが社のドアからそつと中に入る。

受付があり、その背後にはパーテーションで区切られた机の島がずらりと並ぶ。なんとなく音を出さないように、コソッとパーテーションの影から様子を窺うと、一番奥の窓際に課長がいた。

非常灯がほのかに光るだけのフロア。そんな中、卓上の煌々とした光がくつきりと課長の横顔を照らす。

真剣な眼差しでノートパソコンのディスプレイを眺め、カタカタと忙しない音がしんとした室内に小さく響く。

その様子をじっと見つめる私の胸は、ぱくんぱくんと大きな音を立てて血流が促進されていた。体温が急上昇して体中が火照つて仕方が無いですよほんとー！なにこれもうどうすんの！私は目をぎゅうっと閉じて、その場にしゃがみこんだ。

キタ————！ これか！ だから！

ちょ、やだ。

あまりに激しい動悸が聞こえやしないかハラハラしてしまつ。も、本当に、私つてば……。

ぎつ、と金属音が聞こえ、バクンつとより一層心臓が打ちつけた。
え？ いまの、何の音？

気になつてこつそり覗くと、課長は椅子の背もたれを利用して背中を伸ばし、片手は目頭を押させていた。週末の金曜日……ずっと残業続きで疲れますよねそりゃ。でも私は全く労わることなく自分の事ばかりで……。

「か、かちゅう……？」

ゆづくり歩み寄り呼びかけると、目を閉じて天井を向いていた課長はガバッと体を起こした。そして信じられないものを見るような目で、私を凝視する。

「 ユリ？」

ギシリ、と音が鳴り体ごと私に向く課長。

何か言いかけ、しかし首を振りながらガシガシと雑に頭を搔く。
その姿を見た私は、どこか脳内でカチツと音を聞いた気がした。

「…………ちよ…………、み、乱れた髪…………！」 その乱れた髪いつ！

「ああもうワカンネエかな！俺は嫌なんだよそういうのが！」

大声で喚いた彼は、頭を搔き筆り地団太を踏んだ。

そんなことを言つても僕は仕事で取引先の男性と共に仕事をしただけだ。やましい事など一つもない。そりや確かに僕の好みピッタリではあつたが、そのケがない相手に手を出す程飢えていない。

お前、嫉妬してんのか

はあ？！俺か？んなわけね！しゃん！

僕より頭一つ分背の高い彼。締めているネクタイを捕まえてぐいっと引き、その勢いに乗せて僕は彼の唇を

「つちゅわああああああつーーー！」

今、なに？！

思わず叫んでしまつたワタシ！ だつて……だつてええええ！

「ヨリ、どうした！」

慌てる力チヨーをよそに、私は両手いっぱい高く上げてバンザイ

「よ、よかつた！ 妄想できましたよ力チヨー！」

「……………」

「妄想できたんですよ！ カチヨー！ あーよかつた、ニシしか
もつ一生浮かばないのかとヒヤヒヤしてマシタ！ そうつ！ これ
はあるで……まるで……たたくなったムスコが、やつとたつ
」

「すい。

「ふきわやつ……」

「阿呆！」

おもむろに私の両頬をカチヨーはガシツと挟み、勢いよく頭突き
をかましてきた！

「いつた――――ほしつ！ 星が飛びましたよちよこと！」

そしてちょっとカチヨー、手を離して下さりよつ！ その、その、
手に挟まれた頬の、じわりと伝わる温かな温もりが……が……ひい
やああ！

しかしカチヨーは私の訴えなんか知るかといった具合に乱暴に私
み引き寄せ、唇を合わせた。

「もきわやつ……」

ガツチリと押さえる手は荒々しいのに、触れる箇所からは不思議
と臆病さを感じた。まるで何かの境界を探すように、皮一枚掠め、
熱が触れ、柔らかさを確かめる。軽く啄ばむように数度繰り返した
と思つたら、今度は……つ！ え、まつて……！

「すい」と

「ちよ……つ、あつ……ふによお」

すっかり腰砕けた私は、力チョーに凭もたれかかっていた。凭れかかるというか、もうこれ力チョーにぎゅう一つて抱き締められちゃってるんですけどね！

力チョーは私の首筋に顔を埋めてじっと動かない。いや動かれても困るしでも離れてもらわねばもっと困る。
だいたい、だいたいですよ？

「かちよ……」、これ、ゼッタイ十八歳未満閲覧禁止行為デスよ
……

「人聞き悪い事言うな。いつても十五未満禁止レベルだ」

「じゅ、充分じゃないデスカ！！ 何でまたこんな……つ！」

「俺の我慢が足りないだけだ」

「意味分かりませんよつ！」

「では分かるまで……」

「いやいやいいデスいいデス、もーいーデース！！」

キヤパオーバー！ もうムリー！

ジタバタと身を捩つて逃げよつとしても、意外に強い力チョーの腕はびくともしない。いえ、腕見たことがありますけどね！ 半袖Tシャツから覗くあの筋々すじすじとしている締まつたき・ん・に・く！

あれはもう私の脳裏に焼きつけてありますので、いつでも映像呼び出せます！

はっ！ そうか……。

私は唐突に理解した。 そつかそつか。 急にBL妄想復活したのは……恐らく対力チヨーだつたからじゃないのか、と。『課長、深夜に愛を』など今まで私が同人誌に投稿した力チヨーと清水先輩の力ツプリングシリーズ。 元はといえば『理想の彼氏!』と面接の時に見てビビビッと来たからなんですね。 ひょつとして私、力チヨー萌えてたからですかい？だから、力チヨーがあつてのBL創作意欲、だつたのですよね？！

あーなんかスッキリした！

キタ―――！ これが！ だからか！（後書き）

「妄想部」

http://mypage.syosetu.com/1445
26/

今回は動物企画となつております。私は雀が主役のお話を書いてい
ますよ

それと、来月以降のネタを募集しております。

妄想部、または私の方にお知らせいただけると……うれしいいい！
でっす！！

好きな人の過去つて、知りたいデスヨね？ ね？

ひとしきり『腐子』に戻った原因を脳内で探っていた間に、力チヨーは何故か私を抱き締めたまま持ち上げ椅子に移動して座り、力タカタとキーボードを打ち始めていた。

ちょ、自由だな力チヨー！

「力チヨー！ 抱っこしたままってなにさー…」

「仕事を終えてからまたな」

またなつて何だよまたなつて！

しかし不思議な構図ですな。真っ暗なオフィスフロアに一点だけ光る卓上ライトとディスプレイ。向かい合う男の膝上には抱きつくような姿のワタシ……。

また。おかしいよ、おかしい。

何がおかしいって 最後の「ワタシ」の部分がぜつたいおかしい！

「力チヨー、私降りる」

「駄目だ。今はユリを感じていたい」

「くわー！ どこの官能小説デスカ！」

足をずらすうちに腕を解いても、なんでもいつ器用に捕まえておけるんですかねカチコーーー！

「……む？」

「……刺激するな」

「ちゅ……！」ふつ！　だだだだ駄目！スーー　降つる降つるしてえええ！」

なんで平静なのさ！　もうなんでばっかりな私はどうしたらいのさ！

なにかしらが腰に当たるのをすぐわきペーンときた私は、今度こそ本気の脱出を試みた。このあはれんぼうめ！

いくら私がカチヨーの事好きなんだとしても、あまりにもアレな展開は脳みそついていけませんよ！

「カチヨーー　あのあのあのあの、お弁当作つてきたんで……それを食べましょひよー！」

「弁当？」

「うあ、ハイ」

もうね、そんっざんカレーでスママセンですよー。だからせめてお弁当作つて食べてもらおうかと思つて。リーダーが帰つてから心を込めて作らせて頂やした！

課長さん、きっと週末だから帰るの深夜よ。そこからまた力レーだなんて可哀想だわ。

やたらニヤニヤして気持ち悪いリーダーからの助言に従つて作り、お届けに参上したのだ。胃袋掻むには故郷の料理が一番だけどねと言われたが、残念ながら私は力チョーの過去を良く知らない。フツーに母親に作つてもらつていた味を思い出しながら弁当箱に詰めるだけだ。「お茶淹れて来ますからー！」と言つたらアッサリと膝上から下ろされ、まあ言つた以上やらねばと給湯室へ向かつた。

「懐かしい味だな

力チョーはおじぎりを一口食べてこう言つた。

具はおかか。鰹節に砂糖醤油で味を付けたもの。これ作ると友達は皆「甘つ！－」つてびっくりされちゃうけど、私の所ではフツーです！　あとは天ぷらも甘辛く煮たり、甘い卵焼きだつたり。基本甘いのデス。

どーして懐かしいって言つたのか……わからぬ。

「コリ、お前も食べろ」

そういうで、力チョーは私に三個あった大きなおじぎりの内一つ寄越してきた。正直な所あれこれ誤解だと分かった途端お腹は空いていたのでありがたく頂戴する。いえいえ、ほんとうに力チョーに弁当渡したらすぐにお暇するつもりだったのですがね。

力チョーの机の横にキャスター付きの椅子を持ってきて、並んで食べる。

「あい。モグモグ……あ、かちょー……モグモグ……かちょーんちも……じっくん……こんな味だつたんデスか？　じぐじぐ

「喋るか食べるかどつかにしる」

「いやほり、カチヨーって今まで何して生きてきたのかと思いま
してね」

「お前何気に失礼な奴だな」

「そんな今更じゃないデスか。もぐもぐ。私のは履歴書みてご存
知でしょーからカチヨーの知りたいなー、と」

食べやすいようにと、ピックに刺したタコさんワインナーとか
諸々、あつという間にカチヨーのお腹に納まっていく。私が作つた
ものが綺麗に食べられていくのを見るつて、ある種の快感を感じま
すね。脳みそで言えば後頭部の右五時の方向がこそばゆいような。
私の料理の味を懐かしいというカチヨー。この会社に来るまでの
事つて知りたいたふと思つたのでデス。ほら、好きな人の事知り
たいとか、そんな純なヲトメゴコロですよー！ キヤ！

おかげもいくつか私の為に残し、食べ終えたカチヨーは専用の湯
飲みを手に器用に片肩を上げて見せた。

「俺の事？」

「ハイ！ 見た目は良しでも中身は俺様どえす。これはもう分か
りきつているから横に置いとくとして、出身とか、経歴とか……イ
デテテテ」

一言多い、とグーでこめかみグリグリされました……。あつづ。

「興味を持ったのはよしとしゅう。しかしお前……ほんと……」

なんだか大仰に溜息を吐かれてしましましたよ？… なんだ？
ほんとにバカかアホかトンチキでもいうのか。

ぎし、と椅子ごと私に向き直つて、イヤミなへりこ長い足を組み
なすつた。くそ、ちびっこへの挑戦状だな？！

「少しは俺の居場所があると思つたんだがな……まあこはコリ
だからと諦めるしかないか」

肩をすくめて何か達観したような力チョーは、腕を組んで背もた
れに体を預けた。つまり『THE 偉そう』ポーズ。似合つから娘
めしい。

「そうだな……どいままで話すか。愉快な話ではないぞ？」

といいながら、私をちよこちよこと手招きする。はこよはこよと
近づこうとして気付いた！ やべ、これーの舞ジヤマイカ！
いくら力チョーの事『スキー！』だとしても、一足飛び過ぎて無
理だと思うんスよ。いつも、段階を踏んで……こやまで。こやこや
までよ。すでに同居してんじゃん私ってばあわわわー！

そんな事実に愕然としている私にじれたのか、力チョーは椅子を
すぐ横にくつづけて私の肩を組んで引き寄せた。ちよおーつー！
なぜええええつ！

しかも目線はディスプレイで右手はキーボード打つてるし… 仕
事の続きですかそうですか… つて、ほんと器用だない！

「俺が生まれたのは

「

構わず話し始めるカチョー。いや構つてるのは私ですがね！

「書類上は東京だな。それからは転勤族だった両親によつて全国各地回つて……正直幼い頃の記憶は薄い。中学一年の頃両親が離婚で揉めて一人つ子だつた俺は父方の祖母に引き取られた。祖父はその前年に亡くしていただから、祖母と俺がお互い支えあう為という口実の元、親権を押し付けあつていた両親は丁度いいとばかりに追いやつたというのが真相だろうな」

感情の読めない声で訥々と話すカチョー。まるで他人の人生のように語られている。

肩を組まれているから見上げても顎あたりまでしか分からないうち、表情を窺う事もできない。

「両親……。初めて知るカチョーのプライベート。中学二年生だなんてめっちゃ思春期真っ只中！ 中一の自分なんてBL漫画に出会つてキヤッホー！ と腐女子街道まつしげらデシタね。どう考へても子供。それなのに両親二人とも親権を押し付けあうだなんて……身動き一つしないカチョーに、思わず頬をすり寄せた。要らない子なんかじやない、と気持ちが伝わつて欲しいと思ひながら。

そうしたら……カチョーの体の熱やら心臓の音やらが布越しにウツカリ感じられてしまい、そしてそして生活を共にしているからだけど、同じシャンプーと同じボディーソープと同じ洗濯の香りが更にそれに足されてカチョーの男の香りまでが鼻腔をくすぐりなんかあれ私どじしたのつべくらいうわああああつ！

「 聞いてないな？」

「 嘸いでます！ あつ違つた、聞いてマスヨ聞いてマスヨはいはいー！ えーと、それから？」

「お前つてやつは……まあいい。それで十八の年に祖母を「くし、大学進学もあつて家を処分し、一人暮らしを始めて……二十五歳の頃だつたか？ 音信不通だつた両親の近況が入つてきた」

私の肩に掛けられていた力チョーの手が、私の後頭部を壊れ物を扱うかのように優しく幾度も撫でる。さつきまで力チョーの過去が知りたいなんて言つてた自分を殴り飛ばしたい。そんな軽い話、一つもないじゃないか力チョー。

つらくなないわけがない。子供を要らないモノかの様に祖母に押し付けその後音信不通だなんてそれでも親か！ 十四歳は大人への入り口に足をかけた年齢で充分理解できてしまう。見ず知らずのご両親に腹が立つて仕方がない。今更な近況とはなんのさ。

言葉の続きを待つ、私を撫でていた手がピタリと止まつた。

「警察からだつた。交通事故で……一人とも。身元確認と引き取りの電話だな。とつぐに別れているものだと思つていたが仕事で色々不便な点もあつたらしく、便宜上夫婦のままだつたようだ。やつとケリがついて離婚届にサインをする為に父親の車に乗つて……前方不注意でトラックに正面衝突したらしい。俺が思うに口論にでもなつて運転が疎かになつたんだろう」

クス、と僅かに口角が上がつたのが見えた。なんとも冷たい笑い

……胃の中がヒヤッとする。

「結局夫婦として死んだんだ。これまで何やつてきたんだろうな

……」

嘲るよ^{あざけ}うに吐き出される言葉は肉親に対しても出す声色じやなかつ

た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0942s/>

捕獲大作戦

2011年10月6日14時08分発行